
車内恋愛

櫻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

車内恋愛

【コード】

N0156X

【作者名】

櫻

【あらすじ】

駅までの道を車中で過ごす雨女と元上司の、三十分間を積み重ねた恋。 サイトとの重複掲載です

01・長雨の日に

秋雨前線がもたらす憂鬱が、ほんの少しだけハッピーに変わる。

ああ、まただよ。

オフィスを出て早々げんなりした気分です。

しとしと、なんて可愛らしい音じゃ表現しきれない土砂降りの雨を前に私はひっそりと溜息をついた。

腕時計に目を落とす。

二十二時半。とつくにバスは終わっている。駅までは徒歩四十分の道のりだ。

この距離を私は今から、傘もささずに歩かなきゃいけないってわけね。そりゃ溜息も出るわ。

「コンビニで買っつて言っつてもなあ……」

まず間違いなく今日の教訓が次に活かされることはない。となると、毎回買うにはお金がもったいないのだ。

さて困った。そう思いながらもとりあえずは一步。

頭皮に染み入るような夜の雨に怯んだように肩を竦める。でもそれも一瞬の事よと、私は華やいだ明かりを放つビルを出て暗いコンクリートへとビールを叩きつけた。そうしてちよつとだけビールを振り仰いでみる。入り口に書かれたご大層な名前のビルは私が勤める広告代理店の自社ビルだ。半年前、リクルートスーツを着込んだ自

分が緊張と共にここに立ったのは、果たしていい思い出になるんだろうか。

「まあいいや」

そんなことよりとりあえずは帰らなきゃ。

九月中旬ともなるといい加減夏の気配が遠ざかり、夜には肌寒さが忍び寄ってくる。こんな風に雨ばかり降っていたら尚更だ。おかげさまでシャツを濡らす雨が冷たいことこの上ない。もしかしたら明日には風邪でもひいてるんじゃないかと思うぐらいのひんやり具合だ。まあ、雨に濡れたって理由で風邪をひいたことは物心ついた頃から一度だつてないんだけど。

私、雨森唯は雨女である。それも筋金入りの、だ。

降水確率三割超えたら要注意。まず確実に外に出た瞬間雨が降る。一割だと……私としてはそれで五割といった所か。

とにかく私は雨というものに縁があつた。名前からしてそうだ。

春雨も五月雨も梅雨も秋雨も、雨とつくシーズンが大嫌いだといつていい。天気雨でさえどことなく憎らしい。晴れるなら晴れる。

車に泥を引つ掛けられないようになるべく車道から離れた場所を歩く。オフィス街なので流石にこの時間車通りは少ないし、こんなに気を遣う必要なんてなさそうんだけど、何となく癖になつてしまった。こんな癖がある割に折りたたみ傘を携行する癖が未だに身につかないのは、ある種異常と言える。二十六年もこの境遇に甘んじてるのに。

「そつえば……」

前の職場にいた時の上司にもそれで小言を言われたんだつたつて。ぱしゃりと水たまりを踏んづけつつ、それでもストッキングに掛からないよう静かに進んでいく。だけど前からやってきた車のハイビームが眩しさに負けて目を細めた瞬間、勢いよく自分で自分に水をかけてしまった。

「うっわ」

一瞬ふわっと苛立ちがこみ上げる。でも自業自得と思うと当たれ

るものもなく、私は渋々駅への道を急いだ。どうせお風呂入って服を洗濯機に放りこめば何もかも綺麗になるんだ。そう言い聞かせて。

駅までの道のりは長い。

その間特に考える事もないので、さつき頭に浮かんだ元上司の顔を思い浮かべた。

「元気かなあ」

つい呟く。そうしたくなる雰囲気、いつも纏っていたから。

元上司はとにかく顔色の悪い人だった。

そればかりが目につく、でもそれだけじゃない人だった。

主に鬼畜さと眼光の鋭さが際立って、途中から顔色なんて気にならなくなったぐらいだ。怖くて日常会話なんて絶対無理なタイプナンバーワンに、きつとあと十年ぐらい君臨できるに違いない。でもやっぱり、それだけでもなかった。

一度だけ、こんな雨の日に普通に話したことがある。

相変わらず傘を忘れた私に、たまたま帰りが一緒になった彼が小言を言いながらも駅まで送ってくれたのだ。あの時だけはいつも鬼畜な彼が優しく見えた。それまで何週間にも渡って日付が変わるまで残業させられたのなんて吹っ飛んだぐらいに。

「五月雨の降のこしてや光堂」

かつて芭蕉が詠んだ歌を口ずさむ。人通りのない道にひっそりと響く声は雨音にかき消されて、遠くまでは飛んで行かない。それを良い事に私は今まで一度も言わなかった言葉をぼつりと漏らした。

「あの時は結構楽しかったなあ」

昔を懐かしんで、あの頃はよかったなと言うにはまだ若いと思っただけど、色々ストレス溜まってるもんなんだなと自分の言葉で気がついた。あの上司ならいくら歳取っても絶対言いそうにない言葉だけど、私はまだあそこまで強くなれない。

三十代にして部長にまで上り詰めた、鬼のように働くあの人は元気にしているだろうか。

派遣社員としてたった一年だけ働いた広告代理店の上司。

一度だけ光堂になってくれた、強いて言うならそれだけの人を思い浮かべる時、私はいつも背筋が伸びてしまう。

……うん、まあ仕方ないよね。本当に怖かったんだよあの人。

あの時とは違う広告代理店に正社員として入社して、早半年。

未だにあの人の事を考えるとぴしっとしてしまっただから、笑ってしまっ。おかげで大事な会議の時、あの人の事を考えて目が冴えてくれるから助かってるんだけど。

対向車線のハイビームが眩しく路面を照らして、遠ざかっていく。

「ほんと、元氣かなー」

それを尻目にもう一度似たような言葉を繰り返し、駅までの道をてくてく歩く。

……と、そこで何だかとんでもない音がした。

「あれ、何今の」

何だかものすごく甲高いブレーキ音聞こえた気がするんだけど。

それに、タイヤが路面に強く擦れる音も。

事故？ 一瞬そう考え振り返り、私は目を疑った。

「ゆ、Uターン……！？」

それにしてはやけにアグレッシブな気がするんだけど、やっぱりUターンなんだろうかあれって。

激しいブレーキ音とタイヤ音を雨音に負けずに響かせて方向転換をしたシルバーのセダンは、一体何をそんなに急ぐ必要があるのか迷いなくこつちに向かって突き進む。ちよつとちよつと、アクセル踏み込みすぎじゃない？ 他人事ながら心配になる。元上司の車と同じ型だからだろうか。

幸い車通りは全くと言っていいほどない。

人通りも、私以外は誰もいない。

これなら誰かに見咎められはしないだろう。勿論私はスルーする気満々だから、運転手には安心してもらいたい所だ。

「さてと」

気持ち切り替えて再び駅へと歩く。

傘があればもうちょっと見ててよかったんだけど、いい加減体が冷たくて気持ちが悪いのだ。さっさと帰ってお風呂に入りたい。

ああ、それにしても面白いもの見ちゃったなあ。

なんて呑気に考えると、仕事で溜まっていた鬱憤が晴れたような気になった。

このまま鼻歌でも歌おうか。そんな風に思っただけで小さく笑う。

平穩はそこまでだった。

「……っ!？」

大音量のクラクションが鳴らされる。短く威嚇するわけじゃない、単なる仕様としての騒がしさに私はびくりと身を竦ませて恐る恐る後ろを振り向く。すると。

「何でいるの!？」

あのアクセル全開だったシルバーのセダンが、何故か今度は殆ど音を立てずにこちらに近づいてきた。

これが世間を騒がせたハイブリッドカーだろうか。

随分静かだけど、それならブレーキとタイヤ音はどうかした方がいいと思う。

いや、それはどうでもいい。

「私に用……なんだよね、やっぱり」

問題はそこだ。

こんな時間にこんな場所でナンパなんて洒落にならない。断ろうにも、さっきまでの荒々しい運転が気性を表しているようで既に涙目になっている自分が情けない。いつそ走ろうかとも思ったけど車に敵うわけもなく、私はせめて車道からより離れた場所に退避して事態を見守ることにした。

土砂降りの雨に叩きつけられ、外灯の明るさでセダンが艶々とした光を放つ。

何だかそれがニヒルに笑っているようで何となく腹が立った。

警戒心をそのままにキッと睨む。すると、運転手も私の様子に気

付いたのか更にスピードを落とすし、そして止まった。

そこ、できることならアクセル全開で立ち去ってほしかったんですけど。

それよりどうしたらいいんだろう、この状況。

すっかり困り切った私はとりあえずバッグを胸に抱いて半眼で車を睨む。そうしてしばし沈黙すると、助手席の窓が小さな駆動音と共に開いて、そこから呆れたような男の声が聞こえてきた。

「こんな所で何をしている」

低く、どこことなく冷たく聞こえる硬い声。

「し……」

さっきのクラクションと同じ、威嚇するわけじゃなくて仕様としての声に私はぱちりと目を見開いた。

「七条部長!？」

前髪から落ちた雨だれが眼球を潤す。でもそんなのどうでもいい。

「部長こそこんな所で何してるんですか!？ しかもあんなアグレッシブなウターンまで」

「帰宅途中だ」

いや、だから、ウターンの件は。

きっぱりとした声にそれ以上何も言えなくなり、私は好奇心が疼くのを抑えつつ口を噤む。訊けるわけがないのだ。……怖すぎる。

記憶の中に留めていたままの元上司こと七条部長の鉄面皮は当時のままで、それを見る限り元氣そうなのが分かる。ただ、まさか本当に再会するとは思わなくて、唐突な展開に動揺を隠せない私はバッグを取り落として中身をぶちまけそうになってしまった。だつてのに背筋だけしっかり伸びてるのが憎らしい。

あわあわと何も答えられないでいる私をじろりと一瞥し、七条部長が溜息を零す。

「また忘れたのか」

何をと訊いたら怒られそうなので素直に頷いた。

「習慣がないもので」

再び溜息が落ちる。

「だから折りたたみ傘ぐらい携行する習慣を持ってと言ったんだ」

「いえ、でも一応入れよう入れようと思うんですよ？ 前日までは、でもいつつ朝になると忘れちゃってるんです」

「前日に入れておけ」

「……返す言葉ありません」

本当に返す言葉が一つも見当たらない。

三度目の溜息が落ちる。

うう、何もそんなこれ見よがしに呆れなくてもいいのに。

ナンパよりも怖い相手に涙より先に戦慄に支配され、一歩後退つて両手で顔を覆って逃げ出したくなる衝動をこれまた恐怖心で抑えつけないながら内心で恨めしげな声を上げる。

いや、もう逃げてもいい気がしてきたんだけどね？

こっちは雨に濡れてるわけだし、急いでますって言えばいいんだから。

でも悲しい事に、七条部長は私を逃してくれない。

「で、どこまで行く気だ」

「駅までですけど」

「駅？ 歩いて行く距離じゃないはずだが」

「バス逃しちゃったんで。タクシー乗るのは勿体ないですし」

あくまで会話を続ける気な態度に、すっかり萎縮しながら答える。そうして「それじゃ」と言うタイミングを見計らっていると、今度は溜息を共に助手席が開いた。

「乗っていい」

端的な言葉に、最初何を言われているのか分からず首を傾げた。

そうして数瞬して色々理解した頭が反射的に横に振られる。

「いえ、結構です！ 私もうずぶ濡れなんで」

「早くしろ」

命令ですか、命令なんですか七条部長。私一応部長の車を気遣ったつもりなんですけど。

一度だけ乗ったことのある、座り心地の良い席が手招きするように私を誘う。でもその乾いた場所に自分が腰掛けるには気が引けて困っていると、親切をあつさり断られたのが癪なのか随分とご立腹な七条部長の顔が見えたもんだから、あまりの怖さに助手席に乗り込んでしまった。もうどうにでもなれだ。

般若とかそういうのじゃない。氷の彫像みたいに冷え冷えとした、むしろ絶対零度って言ってもいいぐらいの冷たさでこちらを見上げていた七条部長が乗り込んだ私を見て元の鉄面皮に戻る。それでようやく摂氏零度ぐらいになってくれてほっとした。

車がすつとほとんど音を立てずに滑らかに走り出す。

「後ろにタオルが置いてある。駅に着くまでもう少しかかるから、髪でも拭いておいた方がいい」

右手をハンドルに置きつつ、前を見たまま左手で暖房をつける少し骨ばった手を見ているとそんな言葉が聞こえてきて、私は弾かれたように顔を上げた。

「あ、ありがとうございます」

そうだった、このままシート濡らしっぱなしってのも問題よね。

ここは素直に甘えておこうと後部座席に手を伸ばし、黒くてふんわりとしたタオルを手取る。手触りのいいそれに思わず頬ずりし、水滴を落とす髪の毛の先を包んで丹念に水分を奪っていく。

その間もひたすら無言な七条部長は、私に再会した懐かしさだとかさつきまでの呆れた様子なんてまるで見せない。あくまで安全運転を心がけている。無機質なその横顔に目を向けると、窓ガラスを叩きつける雨を背景に年齢に似合わない若く整った顔立ちが映った。確か、前に同じ部署の人に訊いた時は三十五だって言ってたけど……。

あれから半年。誕生日が来ていたら三十六だけど、どっちなんだろう。

黙々と髪を拭きながらそんなあほらしいことを考える。

その間も勿論沈黙だ。

車内で二人きりで沈黙。普通なら息苦しいシチュエーションだ。ただ、私はこの沈黙を一度経験してたから怖くも何ともなかった。相手が七条部長だからだろうか？ 元々あまり喋る人じゃないと知っているから、沈黙でも何てことはない。これが当たり前なのだと思います、むしろ安心するぐらいだ。

口を開いたら大抵怒られる時だつて、体が覚えてるせいかもしれないけど。

そんな事を考えながら前を見る。そうしてふと違和感を覚えた。「七条部長、何だか道違いませんか？」

駅に行くにはあのまま同じ道を真っ直ぐ行けばいいはずだけど。気付けば国道に出ている事に気付き七条部長を今度は堂々と見ると、彼は「これでいい」と返す。

「こちらの方が近い」

「……その割には信号よく引つかかっているような気がするんですけど」

「偶然だ」

それはまあそうだろうけど。

きつと早く私を帰れるようにしてくれたんだろう。

車ならそれほど距離は変わらないはずなのに、本当に律儀な人だ。きつちり着こなされたスーツに目を向ける。

うちの会社の男性陣には無理だな、これ。

思わずそう思ったのは、そこに皺一つなかったからだ。几帳面だなと心の中で呟く。

信号が赤になる。何度目かの滑るような停車に、雨の音をより強く感じた。

声が落ちたのはその時だった。

「広告代理店に務めているそうだな。うちの社とは別の」
耳にすつと入り込んだ声に背筋が伸びた。

「何でそれを」

「瀬川から聞いた」

あの人は所構わずベラベラと……！

私は思わず元派遣先の社員さんこと瀬川さんの左頬にパンチを食らわしたい気分になりながら、ちらと七条部長の反応を伺う。どことなく後ろめたい気持ちを抱えているのに理由はない。ただ、何となくだ。

派遣社員が正社員として別の就職先を見つけるのは、一般的には喜ばれる話だろう。

だから七条部長も怒ってるわけじゃないし、ただ聞いたただけの様子だった。

それでも何となくきまらなかった。就職先がライバル社なだけに。

髪を拭う手が止まる。それを一瞥してアクセルを踏み込んだ七条部長が更に訊いてくる。

「仕事は忙しいのか」

「……そうですね、まだ慣れませんし」

「業務は何を」

「マーケティング部で主に顧客層のリサーチをしています」

何だろう、段々面接受けてる気分になってきた。

あの胃が痛かった就職活動中の日々を思い出し辟易する。それを見られたわけじゃないんだらうけど、七条部長が「そうか」と呟いた後で眉間に皺を寄せた。

え、何？ 怒ってる？ 変な答え方はしてないはずだけど。

「し、七条部長？」

刻まれた深い影にびくびくしながら声を掛ける。すると間髪入れず「もう君にとっては部長じゃないはずだが」などと返されたので恐怖感倍増だった。

「いや、そうなんです、けど。何となく癖で……」

自分の勤め先の上司やクライアント相手にはとてもじゃないけど感じない苦手意識と怖さに言葉尻が萎んでいく。

露骨な態度に怖がられているのが分かったんだらう。

「怒ってるわけじゃない」

彼がおもむろにそう言った。

右折レーンに車線変更し、赤信号で停車する。

暖房が利き始めたおかげで大分暖かくなった車内が窓ガラスを白く染めた。

その中で耳を打つのはいつも通り淡々とした、馴染んでいるとも言える静かな声だった。

「どこに就職しても、君が頑張っているならそれでいい。……ただ」
温度が上がり過ぎないよう暖房の風量を調整しつつ、七条部長がこちらを見る。

「顔色が悪い」

持ち前の鋭い眼光がずぶ濡れの私の顔に突き刺さる。

……もう少し柔和な顔してればもっとモテそうなのに。

前に車で送ってもらった時にも思った事をもう一度思い、それからふと苦笑を浮かべた。

どうやら、今度は私が心配される側になってしまったようだ。

そんなに疲れていたつもりはないんだけどな。

「あまり根を詰めるな。そのうち倒れる」

そう言う部長の顔色も悪い。

それなのにこんな風に心配されるのは予想外で、正直鬼の霍乱かって疑ったけど、浮かんだのは怪訝な顔じゃなくてへらりと緩んだ笑みだった。

「部長こそ、顔色悪いですよ」

怖かったのが嘘みたいに吹き飛んでいき、軽口を叩く余裕が出てくる。

現金なものだと声を上げて笑いそうになった。

怒ったような顔は心配してる裏返しだったんだ。

たったその程度の事が分かったぐらいで、ほっとした。

だけどこれは反則だ。

「仕方がない。有能な部下が消えたんだ、疲れもする」

何てことない、さらりとした声色で七条部長が眉を顰める。

今まで一度だつて向けられなかつた咎めるような目。

それが有能が部下が誰かを如実に表していて、今度はこみ上げてくるものを堪えるのに苦心した。

何も無い何も無いと思いつつ、実は心の奥底で燻っていたものがじわりと溶かされていく。淡々とした声が紡ぐ何気ない言葉が心をそつと掬い上げていった。

何で。声にならない声で独りごちる。

何でこの人はいつも鬼畜できついことばかり言うのに、こうやってここ一番つて時に自信をくれるんだろうか。噛み合わない歯車に油を差すみたいに、がじがじにかじかんだ手を温めるみたいに。

今まで会った誰よりも怖くて毒舌吐きで苦手だつた上司。

だけどころやって他の会社に入社して、色んな上司と仕事したことで私は気付いてしまった。この人は一度だつて悪意で誰かを叱つたことはないし、仕事以外のことで叱責なんてしなかつた。性別とか学歴とかそんなどうでも良さそうなことに重きを置いたりしなかつた。

やる気があるのかだの喧嘩を売っているのかだの散々言われた。本当に怖い人だ。だけどこの人がいたから今の自分があるんだつて言えるぐらい、姿勢を叩き直してくれた人でもある。やっぱり怖いのに変わりはないんだけど。

でも、尊敬できるっていう点に置いてこの人に勝る人なんていない。

ただそれに一度でも気付いてしまったら過去ばかり振り向いてしまつから、今まであえて気付かないようにしてた。そんな私の気持ちをあつさり打ち砕いて、七条部長はいつも通りの真っ直ぐな目はこちらを見ていた。

「他にも色々会社はあるだろうが、何故その業種を選んだ」

唐突な問いは、泣きそうになつたのを見破られたせいかな。

面接官と化した彼に、だけど私は今なら言えると口を開いた。

「派遣社員やつてる頃、派遣先にもものすごく恐い上司がいたんです」

誰とは言わない。沈黙で先を促す七条部長に甘えてそのまま続けた。

「その人に泣かされた回数なんて数えきれませんし、怒られた回数は泣かされた回数の十倍は軽く上回るぐらいだ。自信があります。だからもう怖くて怖くて、仕事以外で会話なんて絶対無理！ っと思ってました。実際仕事が終わってから話をしたことなんて、数えるぐらいしかありませんし」

長時間の残業をした時だ。つてろくに話した覚えがない。

それぐらい私達の間私語なんてものは存在しなかった。

「でもこのまま派遣社員やってるのもな。焦り始めた時、一番に頭に浮かんだのがその人です。多分それが私が今の仕事に就いた理由なんじゃないでしょうか」

「他人ごとみたいな言い方だな」

「そうですね。でも、今日はつきり分かりました」

あの頃、私は自分がやっている仕事はどこから来てどこへ繋がっていくのか漠然というレベルですら分かっていなかった。今あの頃を振り返っても、きつとよく分からないだろう。それでもまったく分からないわけじゃなくなったのが、ちょっとだけ誇らしくもある。漠然と広告代理店の的を絞った就職活動の理由は、今思えばそれが理由だったんじゃないだろうか。

こんな風に誇らしく思える自分を、私は誰より目指してたんだと思う。

嫌な事は沢山あった。上司やクライアントを殴りつけたい事だ。て数知れない。

派遣社員として雑用をこなしてた時とは違う諸々のことが、とにかく煩わしく感じられた日もある。

それでも不思議と辞めたいって一度も思わなかったのは、きつと信号が青に変わる。アクセルを踏んで前を向く七条部長をバックミラー越しに見て、私はそっと笑った。

「私は、あの怖くて堪らなかつた上司を今でも追ってるんです」

派遣先は実務経験のない人間相手だと学歴だけがモノを言う世界だったから、とても受けられる状態じゃなかった。

だから私は別の、ライバル会社に入社してそこで経験を積む道を選んだ。

その先どうなるかは分からないけど、目指す先は元いた場所だ。そこまで計画しておきながらこんな単純な気持ちに今更気付くなんて、馬鹿みたいな話だけど。

独白じみた話に七条部長は無言で付き合ってくれた。
駅のロータリーが近づく。

そこに車を滑り込ませる間も、包むような沈黙を通してくれた。ただ、送ってくれた礼とタオルの礼を言いながら助手席のドアを開けて下りた私の背中に一言だけ「無理はせず頑張ってこい」と、何とも難しい言葉を残してくれた。その声が少しだけ優しくかったのに驚いて振り向くと、既に車は走り出していた。

黒く塗りつぶされたアスファルトに白々と外灯の光が落ちる。
その中を颯爽と今通ったのと同じ道を今度は逆方向に駆けていくシルバーのセダンの、艶々とニヒルに笑う輝きを見て私は小さく「はい」と返し忘れた言葉を呟く。

腕時計に目を落とす。会社を出てから三十分が経過していた。
車の中にいたのはその半分に満たないだろう。

それでも私は憂鬱な秋雨と残業がもたらした静謐で濃い時間を、とても短く長く感じていた。

頬の筋肉は相変わらず弛んだまま、背筋だけがしゃんと伸びる。
鬱屈した気持ちは心の奥底からもとつくに消えてしまっていた。
全身ずぶ濡れで気持ち悪いことこの上ないのに、なぜだかとてもハッピーだ。

うん、明日からも頑張れる。まだまだ全然大丈夫じゃない、私。
「よし」

気合を入れるように言い、踵を返す。
その時丁度到着アナウンスが響き、電車が近づく音がした。

ホームに駆けて電車に滑り込む。

開かれたドアの奥の人混みに日常を感じた私はこれで本当に再会が終わってしまったと実感して切なくなっただけ、同時にこれはいんだなとも思いながら窓ガラスに指を触れさせる。そうして流れる景色をしっかりと堪能しながら、静かに静かに日常へと帰っていった。

02・光堂には消臭剤を

居心地のいいシートに染み付いた苦い匂いも、今だけは心地良い。

百数十件に渡る電話の発信業務が終わりオフィスを出ると、珍しく一時間の残業で済んだおかげか空はまだ明るかった。とはいってももうすぐ完全に夜に移行してしまうような、暗闇が両手を大きく広げているような、そんな微妙な明るさではあつただけ。第一、雨降ってるし。

「またやっちゃった」

それどころかここ三日連続でやらかしてるわけなんだけど、いい加減諦めた方がいいんだろうか。

しつとりと荒んだオフィス街を湿らせる雨は小雨で、ここ最近の雨の中では比較的可愛げのある方だった。救いと言えば救いだけど、濡れるのは確定だから自然面倒くさくなる。

「まあいいや、小雨だし。……あーあ、バス停まで走らなきゃな」
当然折りたたみ傘は持ってない。三日連続忘れたんだからこの秋はずっと傘を持ち歩かずにいようかなとか一瞬思っぐらい、私は折りたたみ傘を持ち歩く習慣がない。

肩を落としてぼとぼと雨の中に身を投じる。そうやってバス停までさっさと行こうと覚悟を決めて前を見据えた途端、短いクラクシヨンが二度鳴らされた。

あれ、この音どこかで聞いたような。

「あ!?!」

そつだ、あの時の！

私は夜の道路をすごい勢いでUターンしたシルバーのセダンを思い出し、キョロキョロと辺りに目を走らせる。

ま、まさかここにいるなんてことはないはずよね？

時間も早いし、大体部長のオフィス遠い。

「雨森」

いたー！？

私は叫びそうになる口を両手で押さえ、おずおすと右手を振り向く。

白くけぶつた、どことなく灰色な憂鬱気分を纏うオフィス街に溶け込むシルバーのセダンから掛けられた低い声は、つい一週間ほど前に聞いた元派遣先の上司の声だった。見れば運転席から手を振っている。

この人本当に七条部長だろうか。一瞬そんな思いに駆られる。

元派遣先の広告代理店は今いる場所より一駅は離れている。たまにたま通りかかるような場所ではない。では帰宅途中だろうか？ いやそれにしても早すぎる。部長はいつだって日付が変わる頃まで残業していて、早く帰る姿なんて滅多に見たことがない。

まさか偽物じゃない、よね？ だって私の名前呼んだし。

「雨森？」

怪訝そうに顰められた眉と声が向けられる。うんあの鉄面皮、本物決定。

本物なのはいいんだけど……。

「どうされたんですか、こんな早くに」

路上駐車する車の横を歩いて通り過ぎ、七条部長の車へと近づくと、そのまま窓の開いた助手席側を覗き込んで話しかけると、彼は私の手元を見て一瞬押し黙った後。

「またか」

それだけ呟いた。

「……すみません」

そして私は私で、自分の質問が無視されたにも関わらずつい謝っちゃうし。

いや確かに、雨女なのに毎回傘も持たずに出歩いているのはどうかと思う。

七条部長だって顔はこんな鉄面皮で声だって怖いけど、心配してくれてるんだらうって分かるから余計に。ただ。

「昨日も一昨日も降っただろう。何故今日も降ると予想できなかった」

「あはは、そろそろ晴れるかなーと思ひまして」

「予報を見たか？ 今日是一日降水確率百パーセントだ」

「ほんとすみません……」

ただ、こつも小言を言われると反省より先にもう笑うしかないというか。

雨雲からうつすらと差し込んでくる夕日を一心に浴びる車体が雨露を纏ってキラキラ光る。まるでここだけが色を与えられたような灰色じみたオフィス街の中にあるには不似合いな鮮やかさに思わず目を瞠る。

光堂だ。芭蕉の歌を思い出し、そんな事を考える。

雨には濡れてしまっているけど、秋雨の憂鬱さなんて物ともしない凜とした光。その光を素直に綺麗だと思っただけで感嘆の息を吐く私の前で、あの夜と同じように助手席が音を立てて開かれた。

「乗っていけ」

「え、ああ、いや。今日はバスありますし」

「早くしろ」

……命令ですか、やっぱり今回も命令なんですか部長。

あれ、このやりとり一週間前にもしたような気が。

既視感に見舞われつつ、一人困惑してバス停と部長とを見比べる。ただ一度体験したせいでこの先に何かがあるかは分かっていたので、溜息をつきつつ今日はそれ以上部長を怒らせないように車に乗り込んだ。ジャケットが湿っていたけど、シートには諦めてもらうこと

にする。

無言でドアを閉める私に部長の怜悯な眼差しがやや意外そうに向けられ、少しだけ目尻が柔らかくなる。本当にちよつとなのに、それだけでガラリと雰囲気が変わるぐらい優しげに見える。素直に言う事を聞いたのがよかつたんだろうか。

それにしても、いつもこんな風に優しい目をしてたら女性陣は絶対放っておかないと思うのに。毎度の事ながらそう考え、でもそれはそれで慣れないかもしれないと思い直す。少なくとも今この車内で突然態度を変えられたら私は泣いて許しを請う自信があった。

そんな失礼な事を考えている間に、ギアをドライブにチェンジしてウインカーを出し車は路上駐車の群れから出ていく。帰宅ラッシュの波に乗り音もなく走る車内は、勿論声もない。というか会話が
ない。

バックミラーを見ると部長は元の鉄面皮に戻っており、きりりとした横顔にこちらの背筋が伸び萎縮してしまうのが原因かもしれない。クラクションを鳴らされて車に乗り込むまでは何故かスラスラ話ができるのに、二人きりになるとどうにも駄目だ。言葉が出て来ない。

渋滞が近いのか、窓を通り過ぎていく風景はとても緩やかだ。

時間が時間だから仕方がないとはいえ、このままずっと無言でいるのは少し気まずいなと思った。

部長という時の沈黙は決して苦じゃないけど、何十分も無言は流石にどうか。

でも、かといって自分から話しかけるネタもないし度胸がない。溜息を押し殺し、私はそっとバックミラーを覗き込む。整った、静かな色を宿した表情が信号待ちの車を見据えている。退屈しているでも緊張しているでも、ましてや恐縮しているでもない姿が少しだけ羨ましかった。あまりに自然すぎて、もしかしてこの人私が助手席にいるって事さえ失念してるんじゃないのかと思ったけど、あえて口にしない。というかできない。

元上司として、部長の事は尊敬している。

彼に追いつきたくて、いつか一緒に仕事がしたくて私は今別の広告代理店にいるのだ。経験を積んだ先でもう一度、今度はちゃんと彼の役に立てるように。少しぐらい認めてもらえるように。仕事の鬼って呼ばれるこの人に認められるのは、私にとってそれだけ意味があることだった。

人としても尊敬している。

きついことを散々言っても理不尽な叱責はしない所や、年齢の関係もあるんだろうけどとても大人らしいし頼りがいもある。

ただ、だからって二人きりになつて平気かと言われると話は別で。しかも前回、久しぶりに再会した時に誰とは言わないまでも追いかけてるだなんて大口を叩いてるだけに余計に話し辛い。あの時はもうしばらく会うことはないだろうと思つてつい口を滑らしたようなものだけど、まさかこんな早く会うなんて。

ああ、そうだ。一つあつた、話のネタ。

「そういえば七条部長、今日はどうしてあんな所にいたんですか？」
最初に発した質問にまだ答えてもらっていなかったんだ。

バックミラー越しに一瞬目が合う。

「クライアントとの打ち合わせだ。終わったので直帰しようと思つていた」

「ああ、成程」

流石にライバル社に勤める私はどこの会社だったんですかと訊けず、ただ頷いて納得した。部長が打ち合わせに出るのは珍しい話だけど、ないこともないだろう。まさかうちの会社のすぐ傍に車を止めてるとは思わなかったけど、携帯でも使つたために停車していただけかもしれない。

革に似た感触のシートに頭を深く埋める。きしりと囁かな音を立てる座り心地抜群のそれに体ごと預けると、ふわりと苦い匂いがした。

「あれ？ 今気付いたんですけど、何だか苦い匂いがしますね」

「苦い匂い？」

「はい。シートに染み付いてるんでしょうけど……何だろ、これ」
芳香剤なら甘ったるい匂いがするはずだけど、そういう風でもない。

赤信号に引っかかり停車中の車内で首を傾げる私に、部長が何やら考えこむ素振りを見せる。

もしかしたらずっと車の中にいたから匂いに気付いてなかったのかも知れない。

あるいは慣れ親しんだ匂いだから気付けない、とか。
慣れ親しんだ匂い、ねえ。なんだろう。

心の中でうんうん唸る。そうして不意に思いついた言葉を、視線を落としたまま呟いた。

「……加齢臭？」

「雨森」

「嘘ですすみません出来心です許してくださいー！」

怒ってる？ やっぱり怒ってます？ うんそうですね、ものすごい凍えた声してましたもんね！

事もあるうか本人の前で口走ってしまった失言に脊髄反射かと思えるような素早さで頭を下げる。当然だ、いくら何でも加齢臭はひどい。仮に本当だとしてもと酷いが、少なくとも自分が派遣社員として働いていた頃はそんなの思ったこともなかったからきつと違う。そうに決まってる。それにこの苦味は加齢臭とは別物のように思えるし。……何であんなこと言っただら、私。

「でも、それじゃこれ一体何でしょう」
怯えつつ七条部長を覗き見る。

すると彼は心当たりがあるのか、さっきまでの危うげな声から一転して少しバツが悪そうに答えた。

「煙草だろう」

「ああ煙草……って、部長煙草吸うんですか？ 初耳です」

「会社では吸わないからな。普段は車でも吸わないんだが」

そう言う部長はどこことなく申し訳なさそうだ。

私が煙草嫌い、この匂いが不快だと思つてのことかもしれない。確かに私は煙草を吸わないし匂いもそんなに好きじゃない。

でもこれ部長の車だし、乗せてもらつてる身でどうこう言えるわけがないので、責めているわけじゃないと言つるように彼が謝る前に別の質問をした。

「何かあつたんですか？ ストレス溜まるようなことでも？」

案の定謝る気だつたんだろう。タイミングを逸した部長が困つたように目を細めてから首を振る。心なしかアクセルの踏み込む足も弱い。

「いや、試しに前回買った銘柄のスーパーライトを買つたらいつもより早く吸いたくなつただけだ」

言いつつ、ポケットから煙草を取り出して手渡してくれる。紺碧の綺麗な色をしたそれには、確かにスーパーライトと書いてあつた。煙草のことなんてよく分からないけど、わざわざライトでスーパーなんて書いてるんだからニコチンとか少なくしてるんだろう事は分かる。

でもそれで早く吸いたくなつたつて、明らかにそれ中毒ですよ部長。

喉元まで出かけた言葉は、ギリギリの所で押し殺した。

「せつかくですし、スーパーライトで慣らして本数減らしたらどうですか？」

「前回吸つていたのに戻したら本数も戻る」

「それじゃ身体に悪いじゃないですか。駄目です」
実にしれつと言つてくれるじゃないか。

溜息混じりに言つてみせる。そうして一瞬後に、何で私こんなこと言つてるんだろうと激しく後悔した。小姑じゃあるまいし、部長はいい大人なんだから自分みたいな小娘にどうこう言われたくはないだろう。ましてや一応元々はこき使われる立場にあつた人間には車のボディに雨が当たる音が強くなる。より気怠げな雰囲気纏

う街の景色が暗く染まっっていく。おかげさまでこちらの気分まで奈落の底まで突き落とされてしまい、私はもう何も言うまいと固く口を閉じた。これ以上何か言ったら今度こそ怒られそう。いや、今すぐにでも怒られるかも。

びくびくしている時ほど、相手の一挙一投足を肌で感じてしまうものだ。

一部が赤く染まったハンドルを握る部長の手の動きとか、静かに踏み込まれるブレーキペダルの動きとか、見てもいないのに分かってしまうのが恐ろしい。雨の音以外ほとんどしないのが原因かもしれないけど。顔を逸らし、無理矢理に窓の外を凝視していても分かるなんてどうかしてる。

ただ救いなのは、部長が怒っていたとしてもその顔を見ずに済んでいるってことぐらいか。不機嫌な、絶対零度の無表情でこちらを見られた日には二度と顔を合わせられなくなってしまう。それどころか今すぐ車から下ろしてもらいたくなるから、今見るのは危険だ。……話しかけられるタイミングが見計らえないのは難点だけ。

「雨森」

「は、はいっ！」

唐突に部長の声がして、途端にしゃんと背が伸びる。その勢いそのままを向き、今更ながら車が渋滞に引っかかっているのに気付く。周りの車は皆ぎゅっぎゅっ詰めになっているのに、今の今まで全然気付いていなかった。

色とりどりの車を何とはなしに見る。その横から、淡々とした部長の声が聞こえた。

「君は、煙草は？」

「煙草？ ああ、いや吸いませんけど」

喫煙するかって話だろうが、そう思い首を振ると「そうか」とやはり申し訳なさそうな声色が落ちる。

「では君にはこの匂いは気になるだろうな」

部長は未だに匂いに気付かないんだろう。車内で吸ったのならス

「ツにまで染み込んでいるに違いない。でも、だからってそんな風に気にしてもらえとは思ってなくて私は今度は大きく首を振った。」「いいえ。それほど気になりませんし、第一部長の車じゃないですか」

「それはそうだが」

「じゃあ別に匂いがついててもいいと思います。本数は減らした方がよさそうですね……あ、でも禁煙した方がいいなんて言いませんから」

また小姑になりかけて、焦って言葉を付け足す。

部長はてつきり私が禁煙を勧めるとでも思っていたのか、バックミラー越しではなく私の方を向いた。

「吸うのを止めないのか」

きつと本数減らせイコール禁煙に繋がる話ばかりされてきたのだろう。心底意外そうな声に頷く。

中毒はどうかと思うし煙草って身体に悪いからやめた方がいいんだろうけど、部長に禁煙を求める気は更々なかった。それは別に大人なんだから自己管理ぐらいできるだろうとか、勝手にしろとかいうわけじゃない。

「止めませんよ。禁煙できるに越したことはないんですけど、ストレス解消に必要ななら少しくらい吸った方がいいと思います。勿論、他にストレス解消法が見つければそちらを優先してほしいです。でも」

ジムに通うなりカラオケ行くなり人それぞれ気晴らしの方法は違う。

だけど数多くあるストレス解消法の殆どを、きつとこの人は実行できないんだろうなと思ったから煙草を吸うのを否定しなくなかった。

渋滞の波がじわりじわり進む。その都度ブレーキを緩めて前を向く部長の横顔に言葉を掛けた。

「部長、いっつも働き詰めですから」

他の社員さんの誰よりも率先して働いて、雑用だつて必要なら自分で難なくこなしてしまう。

その分仕事を抱え込んでしまつて、いつだつて帰りが遅くなつても朝出勤するのは誰より早くて。そんな生活をしていてジムやカラオケに行くなんて難しそうだったし、アロマシヨップを巡つてる姿も想像できなかったから安易に今あるストレス解消法を否定して胃を痛めてほしくなかった。たださえ顔色が悪い人なのに。……煙草のせいだつたら笑えないけど、そこはもう健康診断に頻繁に通つて自己防衛してほしい。

じつとこちらを見下ろす、冷たそうな無機質な部長と目が合う。仕事の時に見せる厳しさとは違う眼差しに、少しだけ怖がる気持ち が薄らいで笑う余裕が浮上した。口元を緩めて続ける。

「だから煙草吸つてる時ぐらい息抜きしてください。匂いが少々ついたつて、気にしなくていいと思いますよ」

例えばそれが大事な商談前でもない限りは、と言いたい所だけど そのぐらい部長は分かっているだろう。だから言わない。今までだつて周囲に喫煙者だと気付かせなかつたぐらいの徹底ぶりだ。今更指摘される筋合いもないだろう。

だから私は元部下として、あくまで上司を心配するだけでいい。暖房の風に乾いたジャケットの裾を撫でる。

手渡された煙草の綺麗な青を見下ろす。これが部長の疲れをちょっとでも取り除けてるのなら、有害極まりなくても価値はあるのだと思つた。何ならカートンでプレゼントしてみようか。タールやニコチンが少ないものを選ぶか、それとも。

「部長、煙草で好きな銘柄つてあるんですか？」

訊いてみる。もし好きな銘柄があれば、そのスーパーライトでも何でも、とにかく軽そうなものを買えばいい。次にいつ会えるか分からないから今からでもいいだろう。二度も光堂に入れてもらえた御礼だと思えば安いものだ。

部長はそんな事を訊かれると思つていなかったのか、逡巡するよ

うに人差し指でハンドルを叩く。

「特にない。気が向いた時に気が向いたものを吸っている」

何でも気にせず吸うほど煙草が好きなのか。

まさか私が知らなかっただけで筋金入りのヘビースモーカーなんじゃないのか、この人。内心で呟く私の隣で、部長はなお匂いが気になるのか窓を開けた。暖房の風がふわりと外に溶け出していく。反対に雨混じりの北風が入り込む。

「濡れますよ」

「構わん」

「私が構うんですけど……」

そもそも私が原因なのに何故部長が濡れなくてはいけないのか。

でも小声の反論は部長の一瞥で封殺され、車は渋滞の波から抜け出る一步手前の部分で止まる。その時路地に入り込む道の奥でちらりと見慣れた看板を発見して、私は思わず「あ！」と声を上げていた。

「どうした」

「え？ いえ、ええと。そのですね」

ただ、思い浮かんだことを実行に移していいか分からずもごもごしている、さっさと見えと言わんばかりに睨まれたので痛いぐらいに背筋が伸びた。

「いえ、その。カー用品店に行きたいなあと思い、まして」

「そこにある店か」

「はい。でもそれだと道から逸れちゃうので、また今度に
部長！？」

何であっさりハンドル切っちゃってるんですか！？

「何だ」

「いやだから私今度にしようと思ってたんですけど、何で路地入ってるんですか？」

「早い方がいいだろう」

「確かにそうですけど、でも」

「急いで帰らないといけない用事があるのか？」

「ないです、けど。でも部長に連れて行ってもらうなんて」

「不満か」

「そうじゃなくてですね！」

だから何でそんなしれつと言っただろうこの人！

口をぱくぱく開閉していると、部長は言葉が足りないと思ったのか囁くように付け足す。

「私は構わん。どうせ帰ってもすることがないからな」

どの角度から聞いても寂しい言葉に、うつと言葉を詰まらせる。

棘のない声が哀愁すら帯びていなかったせいかもしれない。せめて哀愁漂っていれば励ましようがあるのに。

かくして、コンビニぐらいならともかくいくら何でもカー用品店なんて道の違う場所に連れて行けとは言えず、それぐらいなら今度にしようと思っていた私の思惑をあつさり無視してハンドルを左に切った部長は相変わらずの鉄面皮で店を目指す。面倒くささも呆れもなく、あくまで無表情で。

というかいいんだろうか、元上司を顎で使うような真似して。後が怖いんだけど。

車一台分通るのがやっとの細い道を一分も進まないうちに、目指すカー用品店の駐車場に滑りこむ。雨で客足が遠のいたのか、見事なまでにガラガラな駐車場の、一番店の入口に近い場所に停車して「着いたぞ」と部長がギアをパーキングに入れた。その手が後部座席へと伸びる。

「使え」

手渡されたのは、黒い滑らかな肌触りの折りたたみ傘だった。

「せっかく乾いたのにまた濡らすのも馬鹿らしいだろう」

ジャケットの肩口を見ながら指摘され、いつもなら几帳面なまでの丁寧さで辞去する所を素直に頷き返す。

「はい。ありがとうございます」

本当はこのまま下ろしてもらって部長は帰ってくださいと言おう

としていたのも、この折りたたみ傘が壁となつて言えなくなる。借りたなら返さなければならぬだろう。ということは、また車に戻る必要があるってことだ。そして部長は待たされるのを何とも思っていないのだろう。シートベルトを外して目を閉じている。

「すぐ帰つてきますから」

もし部長が寝ていたらまた店内に戻つて色々物色すればいいか。

横顔に声を掛け、私は借りた折りたたみ傘を開いて店に向かう。

そうして目指すものをさつと物色し、色々なキャッチコピーの渦の中を漂いながら最終的には店員さんの力を借りて、狙った獲物を仕留める事に成功した。

ありがとうございました、店員さんの声を背に腕時計に目を落とす。車を出てから十分が経っていた。かなり迷った割には早い方だ。折りたたみ傘を開き、アスファルトを殴るように降りつける雨から身を守る。

胸元に抱き寄せる袋の中で、とぶんと液体が揺れた。

「これでよし」

ふふふと怪しげに笑うのはさぞかし気持ち悪いが、誰も見ていないからよしとしよう。

私は十歩少々の距離を軽やかなリズムで進み、二ヒルに笑うシルバーのセダンに近づき、そつと運転席を覗き込んだ。と、予想外にも部長と目が合つて荷物を落としそうになる。

「起きてたんですか」

呟きはガラスを通り越すことができず、唇の動きでしか彼に言葉を伝えない。それでも言いたいことは分かつたらしく、部長が助手席を開けた私に「寝ていたわけでもない」とにべもなく返す。

「用は済んだか」

「はい。あ、傘ありがとうございました」

きつちりとくるくる巻いた傘を後部座席に戻す。それからシートベルトを装着すると、やっぱり仮眠でも取ったのかややすっきりした風な面持ちの部長がエンジンをかけた。

暖房の風が音を立てて車内に吹き込まれる。昔のテレビや映画のような白黒世界から一転して、明るい色調が戻ってきたような錯覚を覚えた。もうすっかり暗くなり、雨のせいもあって窓の外はこんなに色がないのに不思議だ。

相変わらず殆ど音を発さず走り出す車は、渋滞を抜けたおかげか今度はすいすい駅に向かっていく。あれだけ時間がかかったのが嘘みたいに、それこそ私がカー用品店にいた時間よりも早く駅のロータリーが見えてきた。

迎え待ちの人やタクシーがずらりと並ぶロータリーの端に車が停車する。だけど助手席を出てみると、きっかり屋根のある場所だということに気付く。本当にどこまでも律儀で親切だ。その親切さに気付いたのはつい最近だけだ。

「せっかく早く帰れる日なのに、すみませんでした」

感謝を籠めて頭を下げる私に「いや」と返し、部長はシートを軽く押さえた。

「煙草の匂いが染み付いていたようだが、気分は悪くならなかったか？」

「？ いえ。そこまで乗り物酔いひどくありませんし、平気ですよ。ああそうか、乗り物酔いある人って車内の匂いが駄目だったりするからそれであんなに心配してたんだ。まあ私だってあんまり酷いと気分が悪くなるかもしれないけど、余程シートに近づかなきゃ分らない程度の匂いなら全然平気だ。

案ずる声に明るく笑って答えると、ようやく安心したのか彼が深く息を吐くのが見えた。

余程気にしていたのかもしれない。自分では気付きにくい匂いだけに。

でももう大丈夫だ。こちらには秘密兵器がある。

「ところで、これ」

胸に抱いた袋に手を突っ込み、おもむろに取り出した中身を部長に差し出す。

彼は突きつけられたそれを凝視して、呆けたように「消臭剤？」と呟いた。

その声がどれだけ意外か伝えてくるようで、私はにやりと笑って彼の手の上に消臭剤を優しく乗せた。

「二回も送ってもらった御礼です。これなら気になる時でも一吹きすればあつという間に匂いが消える、らしいです」

自信がないのは店員さんの受け売りだからだが、パッケージも何となく消臭力が強そうな雰囲気だからそれなりの効果は期待できるだろう。多分。使ったことないからやっぱり自信はないんだけど。

リボンを巻けなかったのは残念だが、普通カー用品店でそんな真似をしようとする人はいないだろうと思いつめた。こうするのは気持ちの問題だ。

ちかちか明滅する外灯の明かりに曝される部長の顔が、一瞬色を失う。でもそれが怒ってるからじゃなくて、本気で驚いてるからなんだと気付いたのは彼が「驚いた」と呟いたからだ。

「まさか人から消臭剤をもらうとは思わなかった」
「ごもつともです。」

「本当は煙草にしようと思ったんですけど、好きな銘柄がないって話でしたし」

「気を遣う必要はない」

「遣いますよ。お世話になりましたから」

こんな風に車で送ってもらえる偶然なんて、二回続いただけで奇跡だ。

もし三度目があるとすればそれはこちらから狙っていかないといけない。最初はそうやって無理矢理押しかけてプレゼントを渡す気だったけど、カー用品店で待っていてもらえたので手間が省けた。

だからもう、今度こそ長らくのお別れだ。

そう思い頭を下げる私に、部長が部下に気遣われたのが不満だったのか不機嫌そうに眉を顰める。だがすぐに気を取り直すと消臭剤を両手で包み込み、助手席に静かに置いた。

「すまない。有難く使わせてもらおう」

「はい。そうしてもらえると嬉しいです」

電車が来たのか俄にホームが騒がしくなる。私もそろそろ行かないと。

「それでは失礼します。今日はありがとうございました」

その音を聞き最後にもう一度だけ頭を下げた。

「ああ」

助手席が閉じられる直前聞こえた、ぶっきらぼうで柔らかかな声が次第に遠ざかる。生彩を欠いた灰色の世界で、銀色のボディが際立つように光りながら夜の道路を疾走するのを見送り、私は改札口へと歩いて行く。そうして自動改札を抜けた所で、はたと立ち止まった。

「そういえば、あんまり怖くなかったなあ」

この前会った時も今回も、最初こそ萎縮していたものの駅に近づくに連れて勝手に打ち解けてしまっていた。消臭剤なんて渡しちやってるし。

向こうの態度は全然変わってないのに、一体何がそうさせるんだろう。

萎縮しているのがそもそも間違いないだろうか。

「……まあ、いつか」

怖くなくなるならそれに越したことはない。そう結論づけ、もう一度道路を振り返る。

部長はあの消臭剤をきつと役立ててくれるだろう。

クライアントや上役の人達や女の人を乗せる時、ちょっと考えた末にシートに消臭剤を振りまいている姿を想像すると面白いけど、同時に嬉しくもあった。あれがあれば車内でも煙草を吸えるはずだから。それで少しでも彼の気持ちは軽くなるなら、体に悪いと分かっけてもいいことしたなと体を伸ばしたくなってしまう。

うんつと体を伸ばす。暖房で温められた体を冷やす風が心地よかった。

電車がホームに入り込む。それを追いかけるように駆けながら、喫煙所から漂ってきた煙の匂いにあの光堂を思い出した。微かに香る苦い匂い。あれも、決して悪くはなかったなと今は思えた。

03・三十分でできること

三十分でできること。童心に返った暇つぶしは、ちょっとでも彼を楽にできただろうか。

九月の月末。つまり前回からほとんど間を置かずに私は七条部長に遭遇した。

天気は勿論雨だ。今日は降水確率二十パーセントだからと気を抜いていたのが悪かった。

「……………」

助手席の窓を開けてこちらを見上げる部長は、もはや何も言うまいとただ溜息だけを漏らした。冷やかな声が飛んでこないのは、それはそれで怖い。

「すいません……………」

結果私は肩を縮こまらせて頭を下げる羽目になった。

いや、別に謝る必要があるのかって訊かれると微妙なラインなんだけど。

だって私がずぶ濡れになった所で部長には何の被害もないわけだし、強いて言うならこの銀色をした光堂に入れてもらう時にだけ申し訳なさが漂うぐらいだけど、でもそれだって今回は必要ない。

オフィスからバス停までの僅かな距離。その途中にある路地からぬっと顔を表したシルバーのセダンを見下ろし、私はついさっきクラクションを慣らして自分を呼び止めた鉄面皮の元上司を決意を込

めて見返した。

空はやや暗いものの、まだ十九時。バスだつてまだ終わつてない。部長がどうしてここを通りかかったのかはよく分からないけど今日は、今日こそは！

「あ、あのですね！」

大粒の雨が頭頂に降り落ち、頭皮を滑つて頬に流れる。

それを振り切つて、両手にぐつと力を込めた。

「まだ時間も早いですし、私今日はバスで帰り」
「乗れ」

「たいと思う、んですけど」

「早くしろ」

……いや、だからですな部長。私今日こそは部長の手を煩わせないようにしようとしてるわけなんですけど、聞いてます？ 聞く耳持つてくださってます？

銀色のボディを流れる大きな水滴は、まるで車が汗をかいているように見える。

ちらりとそこから運転席に座る部長を見ると、彼は案の定私を見て眉根を寄せた。鉄面皮だから分からないとはもう言わない。怒つてらっしゃいますね、間違いなく怒ってるってことでもいいんですね部長。

伶俐な視線が細められる。

「雨森」

「は、はいっ！」

名前を呼ばれ、また怒られる！ と反射的に背筋を伸ばす。すると部長は私の声のあまりの大きさにちよつと驚いたように目を見開いてから、ふいと顔を逸らした。

「……いい加減慣れる」

それは部長の怖さにだろうか、それとも車に乗れって言われることだろうか。

分からなかつたけど、逸らされて初めてこちらに向いた横顔の、

外灯に晒されたその色のあまりの白さに息を呑み、私は思わず頷いでいた。

「はい」

それから素直に助手席に滑りこむ。折りたたみ傘は忘れてくるせにタオルだけは鞆の中に入れてたから、それで濡れたジャケットやスカートを軽く拭いた。それでも大した抵抗にならないから、今回もシートには我慢してもらわなきゃいけないんだけど。

ドアを閉めると車内の空気がふわりと暖かくなる。部長が目元を緩めたからか、暖房の風か。私じゃその辺の違いは分からなかったけど、部長が少しほっとしたように見えたのは間違いなかった。

ギアがドライブに入れられ、サイドブレーキが上げられる。

音もなく走り出した車内で、私はじっと部長の横顔を見ていた。

ミラー越しにじゃなく、本物を。

しばらく沈黙のまま車は快調に走る。と、こんな時まで渋滞なのかすぐに音もなくブレーキがかけられ、食い入るような視線に耐えかねた部長がこちらを向いた。

「何だ」

「なんだと来ましたか。」

「……いえ？ 何でもありません」

何となく腹が立ち、にこやかな笑顔でふいと顔を背ける。バックミラー越しに部長がこちらを見てるのが分かったけど、それは無視した。元上司相手に失礼だって分かってても、こっちだってそれ相応の理由があつて腹が立つてるのだ。一番問題なのはその理由を口にできない事だけだ。

部長は多分、気付いていないのだ。

自分が紙みたい我真っ白な、具合悪いですよって張り紙貼って歩いているような顔していることなんて、きつとちつとも気付いてない。

私が派遣社員だった頃もそうだった。指摘するまで誰も何も言わなくて、本人ですら何とかしようとしなくて、これこそ社会人失格じゃないかと憤って散々忠告したのにそれをこの人はもう忘れてる。

最初に会った日も少し顔色が悪かったけど、今日はあれより更にパワーアップしていた。

昔は口に出す事で散々残業を押し付けられた。部長の抱える雑用をほとんど全部渡されたんじゃないかってぐらい、日付が変わるまで帰れない残業地獄に連れ込まれて、給料明細見てびっくりしたぐらいだ。あの時だ、部長が鬼に見えたのは。

でも、と思う。だからこそ私はあの時堂々と顔色が悪いって言うてやれたんだ。

ほんの少しでもこの人の仕事を引き受ける事で、楽にしてあげられる事で自分の言葉に報いた。結果はこちらまで倒れそうなくらいのハードスケジュールの到来だったけど、不思議と後悔だけはしてない。

だから私は言えなかった。もうあの時みたいに自分の言葉に責任が持てないから。ただ言葉を放り投げられる程、私はこの人に近くない。部下として何とか手伝える立場にもいない。それなのに心配なんかしても無責任に思えてならなかった。……おかしいな、最初に会った時は自然と言えたのに今はひどく難しい。

二回も駅まで送り届けてもらった中で、恐怖心は大分薄らいだ。それなのに私は最初に出会った時よりも、ずっとずっと部長に遠慮していた。まあ、このぐらいの遠慮しといた方が正しいのかもしれないけど。

窓の外をじつと睨む。赤いブレーキランプが薄闇の中を染めるように整列しているのが見えた。全然進まない所を見ると、大分時間がかかるかもしれない。きっと駅の前辺りが渋滞の終わりなんだろうけど、そこに行くまでにこの様子だと三十分ぐらいはかかりそうだ。

不意に、部長の声が落ちる。

「雨森」

深刻そうな低い声につい運転席を見ると、彼はどことなく思いつめた顔で後部座席を漁っていた。それにしても何でもありそうな後

部座席だ。頼めばひよいひよい願ったものが出てきそうで、ちょっと笑いそうになる。

「何ですか？」

想像に笑いそうになりながら必死に表情を引き締めて訊ねる。すると部長は「あつた」と安堵したような声を出してから頭を下げた。「いや、すまない。大事な事を忘れていた。君に不快な思いをさせたなら謝る」

……何の話？ 訳が分からず首を傾げる。

あ、もしかして自分が具合悪いつてことに気付いてくれたんだろうか。だとしたら嬉しい。自覚できるようになればきっとこの人の場合休みぐらいは取ってくれるだろうから。

とか何とか一瞬喜んだのも束の間。私は部長の手の中に握られている物を見てぎょっとした。

「はい？ いや、というかそれって消臭剤」

「さつき煙草を吸つたのに使うのを忘れていた。せつかく君に貰つたんだからと車に置いておいたんだが」

いやいやいや！ 違うんです部長！ 私そんな事気にしてませんから！

全力で突っ込みたくなつたけど、生真面目な部長の顔に何も言えず私は「あー」とか「うー」とか情けない声を出すばかりだった。

言われてみれば車内に苦い香りが漂っている気がするが、気にしなければ分からないほど今日は雨の匂いが濃いから気付かなかつた。それなのにこの人は私が不機嫌なのを見て煙草のせいだと思つたのか。

確かに前回指摘したけど、今そこじゃないんです。あなたの体調の話なんです。

内心で必死に言い募る。ただと言えなかつたのは、部長が自分の事を気にかけてくれてるって分かつたからだ。分からないなりに私の不機嫌の理由を探そうとしてくれたからだ。そんな人に向けていつまでもきつい態度を取っていられなくて、私は表情を和らげた。

そもそも腹が立ったのだから、自分が部長を堂々と心配できないという自己嫌悪から来たものでもある。ここで態度を改められないならそれは大人気ないどころか、子どもだ。ただでさえ送ってもらってる立場なのに。そもそも元とはいえ上司なのに何様だ、私よ。

私は自分にはとことん鈍く他人には細やかな気配りを見せる部長に向けて呆れ混じりの溜息をつき、消臭剤をそつと取った。

「大丈夫です。煙草の匂いなんて全然分かりませんから」

「だが、それなら君は何を」

何を考えているのか分からない鉄面皮がほんのちよつとだけ顰められる。

困惑した顔に首を振ってみせた。

「何でもありません。……それより私の方こそすみませんでした。今日も早めに終わつたのに送って頂いて」

しかも渋滞だ。すすい進めるならともかく、こんなに時間を食わせてしまうのは素直に申し訳ないと思った。部長の帰り道が逆方向だと知っているから、尚更。

頭を下げると今度は部長が首を振った。

ハンドルを握る手に力が込められ、シートに深く体を預ける。眉間に深く刻まれた皺は目が疲れたからだろうか。窓ガラスを打つ雨の音を子守唄に、このまま寝入ってしまいそうなほど彼は疲弊しているように見えた。目はしっかりと開けられてるのに。

数秒の間、部長はやや言いづらそうに続ける。

「一度家に帰ろうと思っただけだ。休憩だと思えばこのくらい大した時間じゃない」

「残業ですか？」

「ああ」

端的な言葉が発する気まずさに、部長はもしかして今この瞬間私に言いたくて言えなかった言葉を理解したんじゃないかと思った。あるいは思い出したか。そんな気がしたから私は本来なら小姑みために色々言いたいのを全部堪えて「そうですか」と頷くに留められ

た。気付いてくれたんなら、それで十分。そこから先は私には何もできないから、あえて何も言わない。

……あ、いやでも待って。私はそこではたと思いつ。

何もない事はないじゃないか。せつかくここで時間を潰せるんだから。

まったくもって動く気配を見せない渋滞の波を見る。うん、まだまだ抜けられそうにない。

私はそれを確認し、にこやかな笑みを部長に向けてから空々しいまでに明るい声で言い放った。

「じゃあ、三十分で何か仕事以外のことをしましょう」

「……仕事以外のこと？」

「そうです。車内でできて仕事全然関係なくて短時間で終わりそうなものがないですね」

胡乱気な眼差しを鉄壁ガードする笑顔を咲かせて見せる。相手の冷やかな視線になんて絶対負けちゃ駄目だと心の中で必死に言い聞かせる。普段なら部長の威圧感の前に屈服する私だけど、今日は譲れない。

じつとりと濡れたシーツの冷たさから逃れるようにやや上体を前に出して笑いかける。部長はそんな私を見下ろしてやはり胡乱気な眼差しを向けた後で、諦めたように溜息をついた。

「で、何をやるつもりだ」

よし、勝った。

前を見据えたまま、ちらと一瞥をくれる部長に内心でほくそ笑む。

ほんの半月前までは分からなかった細かな表情の動きとか声色の違いを見抜けるのはともかく、こんな風に提案を持ちかけられるようになった自分に驚きながらも、私はさて何をしようかと考える。

実は、全く考えてなかった。けどそれを口にしたら怒られそうだからうーんと唸って考える。

「そうですね……」

車内のできる、仕事は関係ない、短時間で終わる。

夜の闇の灰色とブレーキランプの赤に支配された世界で、ここだけが色を持つ車内を見渡してみる。

後部座席は漁れば何か出てきそうだけど、流石に勝手に漁る度胸はなかった。

となると物を使うという選択肢もパス。そこまで来ると残るのはふと幼い頃家族とドライブした時の事を思い出す。退屈を紛らすために私達は何をしたんだっただか。

「あ」

そうだ、思い出した。

ぽんと手を打つ。そのまま七条部長に向けて弾んだ声を出した。

「しりとり！」

「しりとり？」

「これなら終わらせようと思ったなら終わりますし、車内でできるし仕事全然関係ないです」

おまけにやるうと思えば真剣勝負にもなるし、単なる暇つぶしにもなる。気晴らしにはうってつけた。これなら仕事のことをごちゃごちゃ考えないでいられる時間が、たった三十分だけでもできる。それが私が部長の為にできる最善だ。

そう思い提案すると、予想外だったのか部長は片眉を上げて「しりとりか」と呟いた。

「得意なのか？」

尋ねられ、ぽんと胸を叩いて答える。

「すぐに負けるほど弱くはないですよ。子どもの頃は家族と車内でしりとり大会でしたから」

懐かしみながら放つ自信満々の言葉に部長が「そうか」とやや柔らかな口調で答えた。

「それならやるか。先攻はどうする」

「あ、それは七条部長がどうぞ。私は後攻で」

暖房の風が背中とシートの間に入り込む。「そうだな」温い風は体の力を抜くと、人差し指をハンドルでとんと叩いた部長がち

よつとだけ考えこむ仕草を見せた後で最初の言葉を呟いた。

「まずはこれからか。しりとり」

よく分かっているらしい。

私は子どもの頃の部長がしりとりをしている姿を想像しようとして失敗しながら、り、と呟き続きを探す。

「理科」

「カラス」

定番だ。

「西瓜」

「カササギ」

それってあれだっけ、綺麗なものが好きな鳥？

あれ、さつきも鳥だったような。

「ギリシャ」

「ヤンバルクイナ」

「……七条部長。念のため言いますが、古今東西じゃないんですよ。これ」

そこまで言っただけで一旦区切る。おずおずと控えめに手を上げながら指摘すると「偶然だ」と一蹴された。ま、まさかとは思っけど部長、自分ルール作ってより難易度を上げたりなんてこと……。いやあり得る。この人ならあり得る。自分で自分のハードル上げるの得意そっだし。

とん、とハンドルを叩く音がする。ブレーキランプの明滅が生み出す夜景の中で、七条部長が静かにこちらを見ていた。催促する眼差しに慌てて答えを考える。

「ええっと、梨」

「白サギ」

やっぱり鳥だ。そしてぎって、さつきも出てきたばっかだ。

「ぎ、議会」

「イカル」

イカルって何？ 鳥？

頭の上に疑問符を浮かべる私に部長が補足してくれる。

「大声で囀る鳥だ。なかなか可愛い」

「へえ……、そういう鳥がいるんですね」

可愛い。その言葉を部長から聞けたのに一番驚いた。

感嘆の息と共に頭にイカルを想像してみる。囀りが大きいってことは、嘴も大きいんだろうか。大きく口を開けて囀っている姿が頭に浮かび、私は自分の想像の中で生み出したイカルに満足気に頷いた。うん、確かに可愛い。家に帰ったらインターネットで確かめてみよう。

「じゃあ、次は」

車の進みがやや早くなる。その間に繰り返される短い単語のやり取りと時折挟まれる部長の補足の丁寧さに引きこまれ、私は外を埋め尽くす灰と赤の世界も雨も忘れて夢中になった。童心に返るとはこのことだ。

部長は私の提案をくだらないと一蹴することなく、むしろ意外と楽しんでるように見えた。古今東西ルールはやめたらしく途中からは鳥の名前もなくなっただけど、その分出てくる言葉が加速する。

一生懸命先を読んで考えておかないと置いていかれそうだ。

ハンドルを人差し指で叩きながら前を見つめる部長の横顔は予想外に真剣だ。鉄面皮だとか無表情がそう見せるんじゃない、数ミリ眉を寄せるのだとか口元を引き締めるのだとか注視していれば分かるレベルで彼の真剣さが伝わる。

見ていなければ全然分からないものだから、ふっと一度でも目を逸らすと怖いぐらいの無表情に見えるわけだけど、こんなにじっと見ていると気付かれないぐらい集中しているのだと思うと楽しくなつた。

これでいい、と思う。

運転に集中してしりとりに集中して、後のことは全部全部忘れちゃえばいい。

私を駅に送り届けたその後からこの人はきつと仕事で頭を一杯に

するんだろっけど、せめて私が車内にいる間ぐらい別の何かに集中してほしかった。

そんなんじゃない体の疲れは全然取れないし、むしろ頭脳労働させて申し訳ないけど煙草を沢山吸うストレスからは解放されればいいと思っただ。

ま、と部長が口を開く。

「次は“ま”だ」

「あ、はいっ！」

口元を緩めてへらりと笑う私に不思議そうな目を向けつつ催促する部長に、背筋を伸ばしながら「ま、ま」と呟く。子どもみたいだけど、こうやって呟いた方が何となく単語がよく出てくる気がする。

「鞠」

「りんご」

「午後」

「ごま団子」

「五角形」

「囲碁」

ちよつと待った。

「“ご”多すぎませんか!？」

身を乗り出して抗議の声を上げると、部長が意地悪くにやりと口の端を吊り上げた。冷静なようだからかっているような声が耳朶を打つ。

「しりとりでは初歩中の初歩の戦略だろう。ほら、続きはどうした。しりとりをしようと言いだしたのは君のはずだが」

「うっ……」

ひ、ひどい。この人、大人気ないぐらい本気出してきてる。

胸元で両手を組み合わせ、批難を籠めた目を向けるが部長はどこ吹く風とさっぱりしたものだ。ただ吊り上がった口元が意地悪で、私は大人気ないと思いつつ見たまんまを呟いた。それがたまたま“ご”で始まってくれたから万々歳だ。

「極悪非道」

「……」

部長の顔が凍りつく。

みるみる色を失う顔にああやっちゃったと思ひ身構えるが、そこは流石に大人だ。無言のままに綺麗さっぱり流し、ふいと顔を逸らす。

「海」

あ、ちよつと手加減した。

窓ガラスに部長の渋面が映り込む。冷やかな表情は怖いことこの上ないけど、彼が私を怯えさせる気はないのは分かっていたから感情の赴くまま吹き出すことができた。そのまま肩を震わせて助手席側のドアに縋り付く形で笑いを堪える。拭いきれなかったのか、毛先からぼたりと水滴が落ちて膝を濡らした。

ひきつり笑いをどうにか堪えていると、運転席から渋い声が聞こえる。

「何を笑っている」

「す、すみません！ つい」

そうだった。相手は私の人生史上一番怖い上司だった。

そんな大事な事を忘れて一人笑っていたなんてどれだけ度胸があるんだと、自分で自分を褒めてるんだか貶してるんだか分からない状況に陥りながらシートに座り直す。しかし次の瞬間またぶつと笑ってしまい、表情を取り繕うのに苦労した。

ああ、このままじゃまた喧嘩売ってるのかつて怒られる。

もしくは車から降ろされるだろうか。さすがにこの渋滞の中下ろされるのは気が進まないけど、ここまで笑ってしまったら誤摩化しようもないから文句も言えない。

頑張つて真面目な元部下の顔をしようとして失敗してを繰り返す私を、部長は不思議そうに眺めていた。けど仕舞いには呆れたのか、溜息混じりに「我慢するな」と言う。

「そんな風に顔を引き攣らせなくてもいい」

……引き攣るって、そこまでひどかったんですか？

自分の努力の無駄さ加減に馬鹿らしくなってまた吹き出す。今度は遠慮せず笑っている、自分の心の中までもがすっとしていくようだった。

セクハラまがいの暴言を繰り返す上司への腹立たしさだとか、いつまで経っても仕事を覚えきれない苛立ちとか、そういうものが飛んでいく。七条部長を楽にするつもりで自分が楽になってしまっているのに気付いて、それもまたおかしかった。おかしいな、私別に自分が楽になりたくてしりとりしたいって言い出したんじゃないのに。

渋滞の波が静かに引いていく。ようやくアクセルを踏めるくらいになった頃、私は口元を軽く押さえて笑いながら前を見据える横顔に向けて言った。

「七条部長がこんなに面白い人だなんて、今まで知りませんでした」
面白いというか、もしかしたら天然なのかもしれない。さっきなんて消臭剤出されたし。

こんなに怖い人なのに、今でもまだ怜悯な眼光を向けられるとびくつと体が強張るのに、会話の端々でさらっと面白いことを言う。

一年前、派遣社員として働いていた時には気付けなかった。

今度瀬川さんに訊いてみようか。あの人長いこと部長と同じ部署にいるって言うってたから、何か面白い話を持つてるかもしれない。でも、ううん。やっぱりいいや。

きっとこれは職場じゃなかなかお目にかかれない顔だろうから、瀬川さんにも言わず秘密にしておきたかった。

「別に私は面白い事を言っているつもりはない」

「知ってます。だから面白いのかもしれない」

淡々とした声に笑いながら返し、これ以上は失礼だろうと　　す
でに失礼だけど　　深呼吸を繰り返し姿勢を正す。ゆっくりと笑いの衝動をかき消して部長を見ると、駅手前の信号で引っかかった車が停車した所だった。

振動も音も感じさせない静かなブレーキングと同時に部長がこちらを見下ろす。そうしてまじまじと私の顔を見て、ほんの少しだけ目元を和らげた。厳しい雰囲気を払拭する優しい顔に内心で首を傾げると「楽になったか」と訊かれた。

「楽につて、私は別に」

どうもしてない、はずだ。

訳が分からず途方に暮れていると視界の端で青信号がちらつく。

アクセルを踏む部長がバックミラー越しに私を見た。

「顔色が悪かった。……根を詰めているんだろ。少しは休め」

柔らかい声に、ぽかんとだらしなく口を開ける。

心配してくれてたんだ。

顔色の悪さに自覚なんてなかった。具合はそれほど悪くないし、まだまだ全然大丈夫だって思ってたから。でもこの人は私を見て具合が悪そうだって心配して、だからしりとりなんて突拍子もない誘いに応じたんだと気付いた。きっと、私と同じ理由で。

きりりとした端正な横顔を見つめ、すぐに目を逸らす。目頭が急に熱くなった。

「ありがとうございます」

御礼ぐらいはしっかり言おうと息を吸い込んで唇を大きめに動かす。そうして言葉を全て言い終えてから、私はこのどうしようもない気持ちを手を仰ぎながら吐き出したくなった。

冷たいようで怖いようでいつだって人を気遣う姿。それはもう知ってる。

だけど、自分には踏み込めなかった一步をこの人はやすやすと踏み出してしまった。

ああもう本当、敵わない。

部長と自分じゃ立場が違うし、逆になれば私にだって踏み込めるのかもしれない。踏み込めないかもしれない。それはその立場になつてみなきゃ分からないけど、この人は逆の立場になったって同じことを言うんだろと思うたから、私は悔しいような嬉しいような

気持ちに嘔み締めた。こうなりたいつて思いがこみ上げる。でも私はまだ言えないまま、車は駅の前に滑り込んだ。とうとう着いてしまった。

今回も屋根の下にきつちりと止まったシルバーのセダンのドアを開ける。すると部長が「そういえば」とふと思いだしたように声を上げた。

「しりとり、終わらなかつたな」

「あ」

律儀な言葉に私も呆けた声を上げる。確か部長は海って言ったんだつたか。傘を持った人達の波から逃れるようになるべく車体に近づき「み」と呟いた。それから鞆を胸に抱いて頷く。

「みかん。んが出たので私の負けです」

充血した目を見られたくなくて極力笑顔を保つて言うと、部長は一瞬何か言いかけた後で「そうだな、君の負けだ」といつも別れ際に聞くぶつきらぼうで柔らかな声で答える。それを別れの合図に頭を下げる。

「今日もありがとうございました。しりとり、すごく楽しかったです」

ホームのアナウンスが遠く聞こえてくる。白々とした光とコンクリートが生み出すモノクロームの世界で、シルバーのセダンがニヒルに笑う。部長の心情を表すように。

「私もいい気分転換になった。ありがとう」

一瞬ドアを閉める手が止まる。でもそんなことを聞き返すのは無粋な気がして、静かにドアを閉めた。大事な言葉は聞き返して二度楽しむんじゃないくて、不意打ちを楽しまないとして頭の中の自分が言う。しりとりを始めた自分の目的が達成された喜びに打ち震えて、それはもうハイテンションな自分の声が。

喜びに答えるように鞆の中で携帯が震える。取り出すとそれは瀬川さんから、毎度おなじみの食事の誘いだった。私はそれを見なかつたことにして静かに携帯を閉じ、鞆をやや大ぶりに振って鼻歌

交じりに改札口へと入る。

胸を突き上げるハッピーな気分は今はまだ独り占めしたい。だから今日は早く帰ってたっぷりお湯を張ったお風呂に入って寝てしまおう。

もし次また会うことがあったら、その時は顔色のいい自分であったかった。

雨の音が激しくなる。普段なら憂鬱になる音を振り返り、私はホームに滑り込んだ電車の音とアナウンスに日常が戻ってくるのを待つ。夜の街の、ブレイキランプとハイビームと外灯に曝された雨の軌跡とを小さな笑みで眺めて。

04・七センチ先の瞳

いつも冷静な部長の逆鱗にとうとう触れてしまった、らしい。

『金輪際合コンに誘いたくない人間ナンバーワンに決定したわ』
別部署の同期社員からの第一声に口を尖らせる。

私はオフィスの前で雨宿りをする人達の中に混じって立ち、携帯を持ち直した。

「悪かったと思ってる。でも私だってこんなになると思ってなかったの」

『よりによって雷雲を呼び寄せるなんて、どれだけすごい雨女なのよ』

「いつもはもつと穏やかな雨なんだけどねー」

真面目に返すとぶちっとな電話を切られた。うわあ、感じ悪い。

一つだけ小さなストラップのついた携帯を揺らす。通話終了画面を閉じて溜息をつく、遠くで空が光った。十秒ほど開けて雷が鳴る。

見るまでも感じるまでもなく雷雨だ。アスファルトを打つ雨の激しさは普段の雨の比じゃない。怒られるのももつともだちよつとだけ思っただけで申し訳なくなつた。でも合コンに誘ってきたのは向こうなのに、あんまりな言い草じゃないか。

彼女に「ねえねえ、雨森さん彼氏いるの？」と訊かれたのは今週の月曜日。いないと答えた私に「じゃあ合コン行こう！ね？」と誘ってきた彼女がセツティング完了を伝えてきたのが水曜日。

そして今日、金曜日。

「これじゃ中止だろうなあ」

合コン会場は居酒屋なんだから雨なんて関係ないけど、こんな悪

天候の中飲みに行きたい人もいないだろう。

週間天気予報では降水確率十パーセント。ギリギリ大丈夫だと思つてたのに。

「安請け合いしちや駄目つて教訓だつたら大きなお世話だわ」

雷雲に向けて呟く。ゴロゴロ不機嫌そうな音しか返つてこないけど言っただけはタダだ。

外回りを終えた営業が取引先の社員か、オフィスに入っていく人達の姿を目で追う。僅かに開いた傘を手に進む人の姿はさながら槍を持った聖騎士のようで。

思わず見とれていると、携帯が手の中で震えた。

まだ文句でもあるのか。

一瞬そう思つたけど、開くと電話じゃなくてメールだった。

「……この人はこの人で何でこう元気なんだろう」

送り主の欄には瀬川透と書いてある。

彼は派遣社員として務めていた広告代理店の社員さんだった。ちなみに内容は例のごとく食事のお誘いだ。

あの人の中で雷雨の日は外に出たくないとかいう感性は捨て去られてるんだろうか。仮にそうだとしたらそういう凶太さはさっきの女性社員に渡してあげて欲しい。まあ瀬川さんの話なんてした時点で合コンのお誘いは来なくなるんだろうけど。

「彼氏、ね」

そんな甘つたるい言葉の響きを自分のこととして口にしたのは一体どれぐらいぶりだろう。

そう考えて、そうか四年前かと思ひ出した。大学卒業と同時に何となく疎遠になって別れてしまった彼氏が最後だ。社会人になったからというよりは、卒業したからというのが正しい別れだった。

あれから誰かと付き合うなんて考えを起こしたことがない。

それぐらい好きだったから？ と訊かれると答えはノーだ。

そんなに好きならもう少し自分からアクションを起こす。しなかつたのは、ちょっとでも「まあいつか」って気持ちが働いたせいか

もしれない。そんなのはもう慣れっこになってしまっていて、今更
どうしようと思わなかった。

昔からそうだった。

毎回　　って言えるほど付き合った人の数多くないけど　　気付
けばよく話していて、気付けば休日毎回遊びに行つて、気付けば付
き合っていた。そしてじつくり時間を積み重ねて「ああ、好きだな
あ」って心から思った頃に飽きた相手から別れを告げられる。この
パターンの繰り返しだった。

例外はない。一度もない。ただ一つだけ違いがあるなら、最初に
付き合った人からはちゃんと好きだつて言われたぐらいか。うん、
他の人はそれさえなかったわけだから周りから尻が軽いつて言われ
ても文句は言えない。言われたことはないけど。

当然ながら全員好きだった。それは間違いない事実だ。

でもその気持ちの後々温められる程度には軽いものだったつてい
うのも事実だった。

いつもちゃんと気持ちを温める前に、自分から好きだつて言える
ぐらいになるまで固まる前に流されてしまう。軽い、上っ面だけの
好きつて感情に負けてしまう。

相手も多分、似たようなものだったんじゃないかと思う。

要するにとろいのだ。心よりも行動だけが先走つて、なかなか追
いついてきてくれない。だから毎回同じことを繰り返す。

私にとって誰かと付き合つて別れるという一連の行為は雨に降ら
れるようなものだった。自分が外に出たら雨が降るつて分かつてい
て折りたたみ傘を持たずにいるのと、そう大差はない。こうなつて
しまつと分かっているのに対策を練らないから、毎回あんな別れに
なる。

でもいい加減そんな自分が嫌になつて、最近では予防線を張るよ
うにはしている。

「そんなわけでごめんなさい」と

メール画面を開いて、ちゃっっちゃと断り文句を入れて送信する。

別の会社の社員になった私を頻繁に食事に誘ってくれるのは嬉しいし、同じ業界に務めてる同士話せる事が多いのも楽しいけど、毎回毎回誘いに乗りはしない。

まあ、これに関しては頻度が多すぎるというのもあるけど。

五回に一度ぐらいは誘いを受けようと考えていても、結果月一か二ぐらいで食事に行く羽目になる。何てペースだと我ながら呆れた。いくら何でもマメすぎる。

送信完了の文字にふうと息をつく。毎回この瞬間、瀬川さんに悪いなと思うと気が重かった。でも、だからこそ断るんだって自分を奮い立たせる。申し訳なさに負けてずるずる引きずられるのは御免だ。

今まで私は降る雨に打たれるばかりで、何にも無頓着で歩いてきた。

本物の雨に関しては今でもそうだ。服が濡れても体が冷えてもお構いなしなのが変わりはない。ただ、それ以外の事にはもう少し頓着しようと考え始めてもいた。その第一歩が今の仕事だった。

お金を稼げればって特に気にせず働いてた頃とは違い、今の私には目標がある。そうやって何かに執着して頑張れるのは実はものすごいことなんだと、今までの自分を振り返って真剣に驚いていた。仕事も人間関係も程々に、それなりにこなしてるだけだったから。

「さて、そろそろ諦めて帰らなきゃね」

呟くとより雨の音が強くなる。自分が雨女だと実感する瞬間だ。

でも今日は合コンもないし、気合い入れた化粧が全部落ちたって別にいいや。

そう思い、オフィス前を通りすぎる車の群れを見つつ帰ろうとしてふと立ち止まった。

そういえば七条部長、元気にしてるかな。

私は自分が目指したいものの姿を頭に思い浮かべて心が引き締まるような、背筋が伸びるような気持ちになる。そういう気分になる自分が嫌いじゃないからよく思い浮かべるあの人は、今何をしてる

んだらうか。

前に会った時は随分顔色悪そうだったけど……。

「こんな所で何をしている」

声が落ちる。真っ向から向けられた声にぼんやり相手を見返して唸った。

「いえ、ちよつと考え事を」

「考え事？ こんな雷雨の中をか」

渋い声に頷きながら血の巡りが悪そうな肌色の首筋を見上げる。

そうそう、確か部長の顔色もこのぐらい悪かった。

というか今日の方がずつと顔色悪いじゃないか。

「屋根ありますし。それより部長こそこんな所にいるなんて
て」

そこで、大事な事に気付いた。

「七条、部長？」

自分より頭一つ分以上大きな上背を見上げ、呆けた声を上げる。

そんな私を見下ろし、グレーのスーツをきつちりと着こなした部長が溜息を漏らした。さしている傘から降り落ちた雨垂れが大理石を打つ。

「君は誰と喋っているつもりだったんだ」

「いえ、あの。すいません、ぼんやりしてました！」

本当に誰と喋ってたんだか自分でも分からない。

慌てて謝る。呆れを通り越して激怒されるんじゃないかとビクビクするものの、彼は特に何も言わず視線を落としただけだった。

「相変わらず傘は持ち歩いていないのか。……ん？」

そうして私が傘を持っていないのを確認して再び呆れる。

ついでに目についたのであろう携帯画面に片眉を上げた。

そういえば、メール画面閉じずにそのままだったんだ。

特に意識せずにはたとと携帯を折りたたむと同時に声が降ってくる。

「瀬川か」

「はい。食事に誘っていたんですけど、断りました」

淡々とした声に、彼が内容を見たかもしれないのに素直に答える。これが今の会社の上司ならセクハラですよって言ってやれるが、部長の場合あまりに淡々としすぎていてこれがただの質問にしか聞こえなかつたせいかもしれない。

答えると、部長は少し考えるように黙り込んだ後で傘も持たない私を見下ろした。

「これから用事でもあるのか？」

傘もないのに？ と暗に含んだ声に乾いた笑いが漏れる。

「あはは、本当は合コン誘われてたんですけどね。ただ、こんな天気ですから」

「……ああ、成程」

言つと部長は後ろを振り仰ぎ、時折ピカピカと光る空を見て「確かにこんな天気だからな」と呟いた。部長が持つ黒い傘を飾る水滴が、一瞬激しく光つた雷光に反射して眩しさに目を閉じた。耳を打つ、アスファルトを叩く雨の音が一層ひどくなる。

砂嵐に似た音の中恐る恐る目を開けると部長と目が合った。

「ひどい雨だな」

「そうですね。私もこんな雷雲呼び寄せられるなんて知りませんでした」

「いくら雨女だからと言っても、全部が全部君のせいというわけじゃない」

「周りがそう思わないみたいで。これで今後同期の女の子からの誘いはなくなつちゃうでしょうし」

傘をさした人の一群が目の前の歩道を通りかかる。それを見ながら苦笑すると部長が眉を顰めた。

「行きたかつたのか？」

静かに訊かれたので、あっさり首を振った。

「正直言つとそれほど興味はなかつたんです。だから雷雲が来たんじゃないかなーって」

本音だった。あの場で断らなかっただけで、行きたかったというのはまた違う。朝起きてああ今日はしっかり化粧しなきゃって思った瞬間面倒くさいって本気で思ったぐらいだし。

色んな人と出会うのは大事だし、コネを得るのにも繋がるから嫌いじゃない。

でもやっぱり少し面倒臭いというのが本心だった。

そうか、と部長が呟く。それに対し今度は私から質問した。

「そういえば、部長は今日もクライアントの所ですか？」

「ああ、少し用があつてそのビルに行っていた」

長い指が差すのはこのビルの向かい側のビルだった。四十階建ての大きなガラス張りのビルは曇天と雷光を映画のスクリーンみたいに映し出しながら佇んでいる。それを見上げて納得していると、部長が再びこちらを見下ろした。

「このまま直帰しようとして外に出たら君を見かけたから、ついでに声を掛けてみた。……傘は持ってなさそうだったしな」

「本当、毎度毎度すみません……」

同じ事を何度言わせるつもりだと冷ややかな声を向けられる前に平謝りに謝る。本当は最初に会った時からそんな言葉は投げかけられていなかったけど、もうこれは癖としか言いようがない。

謝る私に、三十代後半とは思えない端正かつ無表情な顔がくいと後ろに向けられた。

「そこに車を停めてある。乗っていけ」

「あ、でも」

顎が示す場所に止まる、水も滴るいいシルバーのセダンが二ヒルに笑う。

すっかり見慣れたそれを見ていつものように断ろうと口を開いた私だったが、そこで再び雷光が私達を白く染めた時に見えた部長の青い横顔に言いかけた言葉を止めた。いえ、と小さく呟いて顔を上げる。

「それではお言葉に甘えさせて頂きます。何度もすみません」

そのまま頭を下げると、いつものごとく渋面を作ろうとしていた部長がぴたりと止まり意外そうに「ああ」と頷く。あまりに私が素直だったから驚いたんだろう。でも今日だけは素直にならざるを得ない理由があった。

さりげなく、当たり前のように差し出された傘の中に遠慮がちに入る。

いつもならこれも断る所だけど、断り文句を出すのをぐっと堪えて隣に並ぶ。

大きな傘は人間が二人入っても全然大丈夫みたく、どちらか濡れない。それも断らずに済んだ理由だったけど、勿論それだけじゃない。

きつと、気付いてないんだろうな。

腕が触れ合いそんな距離で注意深く部長の横顔を見つめる。

鉄面皮と言える無表情と思わず背筋が伸びてしまうような鋭さはいつもと変わらない。目元を緩めれば一気に優しい雰囲気になるんだろうなって所も。でもその顔色は前に会った時よりもとずっと悪くなっていた。厳しい顔つきじゃ隠せないぐらいに。

だから私は部長の親切に遠慮するのを止めたのだ。

どの道強制されるからというのもあるけど、それまでに要するたった数秒でももつたいなくて。

律儀に助手席のドアを開けてくれた部長に会釈し、濡れていない体をシートに預ける。消臭剤を定期的に使っているのか、今日は煙草の匂いはしなかった。

ボディを叩く雨の音がいつになく大きい。

大粒の雨を避けるでも真綿で包むように受け止めるでもなく、ただそこに佇む車の中で聞く雨の音は心地良かった。外の天気が荒れていけば荒れている程、屋根の下にいるという安心感が強くなるせいかもしれない。

そうして雨や雷の音を聞いていると、運転席に部長が乗り込む。

しゅっとシートベルトを伸ばす音やキーを差し込んでエンジンを

かける音。運転開始までのちょっとした時間を無言で、なるべく気まずくない沈黙で包むとギアがドライブに入れられた。

サイドブレーキが外され、緩やかに車が進み出す。何度も通った駅までの道を辿るために。

「珍しいな」

温い沈黙の中、ようやく七条部長が口を開いた。

「君はまた断ると思っていた」

どことなく柔らかな声にバックミラー越しに彼を一瞥する。

青い顔は相変わらずだったけど、暖房をつけたからか大分楽そうに見えてほっとする。

「そうですね。でもこんな天気ですし、早く帰れるのに越したことはないですから」

「ああ、その方がいい」

軽い声に頷く部長の視線が和らぐ。前方を見据える鋭さが消えて、優しく温度を感じられる眼差しに変わった。

きっと、ようやく物分りの悪い元部下が色々理解したので満足感を感じてるんだろう。否定はできないけど、肯定もしたくない話だ。だって多分この人は私が早く家に帰って休むのを望んでるだけで、自分がどうこうって思っていないんだから。

この車内でしりとりをした時の事を思い出す。

あの日部長は顔色の悪い私の事を心配して、あんな子どもみたいな遊びに付き合ってくれたのだ。それを提案した私もまったく同じ気持ちだったけど、彼は遠慮してあんな提案しかできなかった私を軽々と超えていった。

だから今日は私が言いたかった。

立場がどうかさというのを乗り越えてはつきり言いたい。

いい年した大人なんだから自己管理ぐらい自分でできるだとか、そんなのもどうでもいい。こんなに顔色悪くしてる時点で全然管理できてないんだから。

でも、一番腹が立つのは周りの人間だった。

同じ職場にいる社員さん達は部長のこんな顔を見て何とも思わないんだろうか。

それは私が派遣社員として勤めてた時からずっと持ってた疑問だった。

この人は限界をものすごく高い所に設定してるだけで普通なら倒れてもおかしくないぐらい働いてるのに、どうして何も言わないんだろう。それが不思議だったから自分で声を掛けたらとんでもない残業地獄に叩きこまれたけど、今でも悪いことをしたとは思っていなかった。

……まあ、何度言っても本人が気にしないのも大問題なんだけど。私はむかむかした気持ちを抱えたまま、でもここで腹を立てるなんて馬鹿らしいこともしたくなくて黙りこむ。

あまりの悪天候のおかげか、まだ夜の七時なのに道は全然混んでいなかった。

「空いてますね」

「皆今日は早めに帰ったんだろう」

赤信号に停車する車の数も数台程度だ。

これなら駅までそう時間がかからないだろう。

だから、それまでに言わなきゃ。

滑り出す車が大通りを駆ける心地良い振動に身を任せる。フロントガラスを濡らす大粒の雨が右へ左へとワイパーによって流されるのを見ていると、不意に部長が囁いた。

「どうした？」

雨音に消されそうな声に首を傾げる。

「何がですか？」

「いや、何となく堅苦しくしているように見えただが」

まさか緊張が伝わってしまったんだろうか。

あまりにもあっさりと自分の覚悟や緊張を見破られて内心で焦っている、再び信号が赤になって車が停車する。

確かここは赤信号が長かったはずだ。

駅に近づいたからかややブレーキランプの海が広がる世界で、私は手を握りしめて覚悟を決めた。

「天気、悪いですね」

「？ ああ」

唐突な言葉に部長がちらとこちらを見る。

その不思議そうな視線を捉えて真っ直ぐに見返して笑ってみせた。

「こんな天気なんです。今日は部長も早く家に帰って休んだらいかがですか？」

「そのつもりだが、どうした？ 突然」

「突然つてわけでもないですけど、その」

前々から思っていたんですけどは言いづらかった。

遠慮して少しでも気を楽にしてもらいたいと思った時にはちゃんと言葉が出てきたのに、ストレートに心配しようと思った途端うまくいかない。普通逆じゃないのかと心の中で文句を言いつつ、そんな事しても始まらないので何とか言葉を搾り出した。

「部長、顔色がすごく悪いです。残業続きだったんじゃないですか？」

前回会った時から今日まで十日ぐらい開いている。その間この人はほとんど寝ずに仕事してたんじゃないかって思うぐらい、ひどい顔色だった。

雷光から二秒とかからず激しい音がする。

段々近づいてくる雷に身を竦め、それでも部長の顔を見ていると彼はちよつとだけ目を見開いて自分の頬に手を当てていた。

「確かに残業はあったが、君に心配されるほど酷いとは思わなかった」

「普通はそこまで顔色悪かったら心配するんです……」

やっぱりこの人自分の限界の設定が辛すぎる。

予想通りの態度に内心で呆れる。けどただ一つ予想外だったのは、嫌味や怒られるのは覚悟したつもりだったのに全く彼が怒らなかつたことだった。少なくとも言葉にはされなかつた。

進み出した車が駅へと近づいていく。

その時間を沈黙で埋められるのは気まずいと感じつつ、バレないように横顔を覗き見る。それが無表情を保とうと努力しているのが何となく分かって、いつ言葉にされるのかと内心戦々恐々としていた。

後悔だけはしないけど、怖いものは怖い。これはどうしようもない。

本物の雷が近づいてくるのより、アスファルトを一面染め上げる白光より、大粒の雨にずぶ濡れになるのより、私は部長の雷の方が遙かに怖い。本物の雷は遠くの木々に落ちるかもしれないけど、部長の雷は精度が高すぎるぐらい高いから間違いなく私に落ちる。確実性で言えばこちらの方が脅威だ。

なのに、駅の前に車が止まってこの怖さから逃れられるという時になつて私は口を開いていた。

終わらせようと思えば終わらせられるのに、そうしなくなかった。本当に言いたいことはもっとあったのだ。

ギアをパーキングに入れる手を見つめ、意を決して顔を上げる。

血の気のない顔は、いつもより彼の表情を冷たい鉄面皮に見せていた。

「お願いですから、今日ぐらいちゃんと休んでください」

「……雨森？」

「部長がそんな顔色だと、さすがに私だって心配になりますから」
不思議そうな、どこか呆けた部長の声にこちらまで不思議な気持ちになつてくる。

どうして私こんなこと言ってるんだろう。

最初に顔色を指摘した時もそうだったけど、自分ってこんな風にお節介を振りまく性格だったつけと疑問に思った。でもそんな疑問をあつさり脇に押しつけて、言葉は勝手につらつら出てきた。

「それから」

たたんだ傘を手にホームへ向かう人、外へ出ていく人。

横目に見える光景に付いて来る雑踏は届かず、彼等も私達に目を留めることなくすれ違っていく。

そんな一対一の状況で向かい合って部長に笑みを浮かべてみせた。私を心配してくれた部長みたいに。

「今も七条部長の仕事量は半端じゃなく多いんでしょうけど、少しぐらいなら部下に押し付けちゃってもいいんですよ。私にだってできる仕事中にはあったんですから」

だからそのぐらいきつと皆許してくれる。

いや、許さなかつたらそれこそ許しがたい話だ。

いつも誰よりも早く来て誰よりも遅く帰るこの人の手伝いをしようとも思えずに全部押し付けてしまえるなら、私はそんな人と食事になんて行きたくないし。……食事に行きたがる人なんて瀬川さんぐらいしかいないけど。

外灯の光に曝されて、ずぶ濡れになった駅前がよりいつそうの白々しさを放つ。

モノクロームの世界で唯一温かみを持つ車内の主は、私の言葉に表情から色をなくした。隠そうとしていた感情さえ消える。

……あ、これ絶対怒られるわ。

「顔色が悪いか」

直感で察していると、何故か部長は無言でシートベルトを外した。それから深く息を吐き、おもむろにこちらに腕を伸ばす。

え、まさか殴られる？

身を竦める。震えた体に一瞬止まった手が、しかし遠慮無く伸ばされた。

そして気付いた時にはジャケットの襟元をくいと引かれていた。体を引き寄せられ、前髪が触れ合いそうなくらい顔が近づけられる。

え、と声を漏らしそうになるのを堪える。吐息が触れ合いそうになって、呼吸さえ止まりそうになった。

伶俐な眼差しが驚くほど近くに見える。意外に長い睫毛が静かに

伏せられ、ますます顔が近づいていった。鋭い眼光のあまり近さに後ろに下がりそうになる。でもジャケットの襟を掴まれてるせいで身動きも取れず、私は結局キスする直前でぴたりと止まった部長の近くで見ても綺麗な肌だとか端正な顔立ちを見ることしかできなかった。

「君は」

目が開かれる。顔は少しだけ離されたけど、唇に彼の呼吸が触れた。

遠雷に、車内までもが暗い夜に閉ざされてしまったように感じた。でもそんなのもうどうでもよかった。

「もう少しよく見て物を言え」

苛立ちに微かに震えた声とは裏腹に表情が温度をなくしていく。撰氏零度の普段の顔から、絶対零度の無表情に。

そのあまりの冷たさに今自分はこの人の逆鱗に触れてしまったのだと知った。昔似たような言葉を口にした時に残業地獄に叩きこまれた理由もそこにあるんだと、ようやく気付いた。あの時腹を立てていたのは知っているけど、これほどまでだなんて知らなかった。激しく怒るのは、きつとまだいい。

部長の場合これが一番大きな怒りの表現方法なんだろうなと気付いた。

いつもなら、いつもの私ならここで謝っていただろう。雨が降ったのを自分のせいにされてごめんねと謝るように、面倒事を避けて頭を下げたはずだ。

でも今回は謝る気にはなれなかった。後悔もしていない。だからこそ気まずくて、私は部長から目を逸らした。

「よく見たから言ったんです」

こつやって反発するのだった。いつもなら怖くて絶対できないのに無性に言っただけだった。部長みたいにくまなく気遣えない自分が嫌になるけど、それでも心配なんだって伝えたかった。

無言で体が離される。放り投げられるようなぞんざいな解放を合

図に、私は助手席のドアを開けた。

音の洪水が飛び込んでくる。

砂嵐に似た豪雨の音やホームのアナウンスが大きな一つのノイズになって襲いかかってきた。

「送って頂いてありがとうございます」

「……ああ」

その雑音だらけの場所に踊り出て頭を下げる。

部長は目を合わせずにただ一言頷いてから「気をつけて帰れ」と元通りの淡々とした声で言い、シルバーのセダンを発進させた。今までのような柔らかかな声はもう聞けなかった。

遠ざかる車を見送り、盛大な溜息を漏らす。

これで完璧にお別れか。

最初に指摘した時はまだ同じ職場だったから離れようがなかったけど、今は違う。あそこまで完璧に怒らせたらもうどうしようもないなど、残念なんだか悲しいんだかほっとしてるんだか分からない気持ちで、ちょっとだけ泣きたくなった。

誰かの顔色を真面目に心配する自分は嫌いじゃなかったけど、それももうおしまいだ。

駅に足を向ける。曇天のように重たい足はなかなか前に進まなかったけど、それでも私は日常に帰るべくホームを目指した。

05・どしゃぶりハイウェイ

どこまでも続く暗闇をハイビームで照らし、シルバーのセダンが高速道路をひた走る。

あれでもう完璧に私達の関係は終わったと思ってた。

というほどの関係性は皆無だけど、少なくとももう会うことはないと思っていた。

仮に次会うことがあるとしたら、それは私が今の職場で経験を積んで彼の務めている会社に入社できた時ぐらいだと。その時ならきっと今より堂々と会えるだろうし、雷雨の日も大分過去になっているだろうから笑って話せるかもしれないと思ってた。

なのに、どうしてこんなことになってるのか。

「乗れ」

この人何で私の目の前に現れたんだろう。というかまた命令口調ですか七条部長。

……まあこれについてはいつものことだけど、そうまでして乗せてってもらえるのは変じゃない？ と頭を抱えたくなる。私この人の事完璧に、どうしようもないぐらい思いきり怒らせたはずなんだけどな。

午後八時のオフィス傍の道路脇に停車するシルバーのセダンは今日も雨に濡れている。辺りに人影はなく、車もこの時間になるとほとんど走っていないかった。

少し湿った空気にべたついた肌を霧雨が濡らしていく。今日も今日とて私は傘を忘れ、バス停までの道を歩いていた。後ろからクラクションを鳴らされるまでは。

「あの、七条部長」

「何だ」

いや、何だつて言われても……。

音を立てて開かれた助手席の窓から声を掛けると彼が 七条部長がきりりとした厳しい目付きをこちらに向けた。

淡々とした、でも冷たさのない眼差しは決して怒ってるわけじゃないと分かっただけでも怖い。

結果、一歩後ろに下がって完全に怯えた姿勢でぎこちなく返す羽目になる。

「最近この辺のクライアントとの打ち合わせ多いんです、ね？」

「少し立て込んでいてな」

そうか、立て込んでいるのか。忙しいのに誘ってるんだから早く乗れってことねオーケイ分かった。

確かに部長が出てくるような用件なんだから立て込んでいて当然だろう。普段はオフィスで仕事に忙殺されているんだから、外に出てる暇なんて殆どないのだこの人は。

もしかしてまた残業続きなんだろうか。

不安になって運転席を覗き込む。するとちょっとはマシになった顔色が見えて、私は心の中でそつと安堵の息をついた。

よかった、ちゃんと休めてるみたい。

予想外の再会だったけど、これが確認できたのはよかったかもしれない。

「そ、そうですか。体調崩さない程度に頑張ってください。じゃあ、私はこれで」

私は妙な満足感を覚えながら、でもきっぱりと決別するように後ろに下がる。部長の目付きが鋭くなったのも理由だけど、もうこれ以上余計なことを言っただけで怒らせたくない。主に私の為に。

「雨森」

なのに、どうしてもこの人は私を許してくれない。

冷え冷えとした声に顔の筋肉も足もぴたりと止まる。ひきつりそうな笑顔で「何か？」と訊くとギロリと睨まれた。

「さつき言ったことが聞こえなかったか？ 私は乗れと言ったんだが」

「聞こえたような聞こえなかったような」

「ではもう一度言う。早く乗れ」

言い直さないでください。お願いですから、本当にもう私全身濡れて風邪ひいてもいいからこのまま帰してください。

大体、何が悲しくてこんな気まずい空気の車内に呼び込まれなくちゃならないんだ。

何？ 部長は気にしてないの？ 私は気になりすぎて気まずすぎて怖いんですけど！

とか何とか心の中では渦をまく気持ちは一切言葉になって出てこない。正確には出せない。

「雨森」

何も言えずにいる私に再度部長の声が向けられる。

辛抱強さを感じさせる声にますます訳が分からなくなった。

こんな、元部下とはいえ腹を立たせるだけ立たせるライバル会社の社員なんて無視すればいいのに、この人は雨に濡れる私を放っておけずに声をかけるのだ。律儀さも親切さも折り紙つきだ。問題は有無を言わさぬ態度だから断るのも怖いってことだけだ。

部長が助手席に手を伸ばす。底冷えしそうな不機嫌な空気に、渋々自分から開けた。

気まずいのも怖いのも多分にあるけど、このまままた怒らせると後々怖い。

万が一、またこうやって道端で会った時の為に車に乗り込むと暖房の温い風がふわりと頬に触れた。しつとりと濡らされた体が温かさで震える。

暗いせいで色なんてほとんどない道から一気に別世界に引き込まれる。

そんな落ち着いた色彩を持つ別世界の王様は、私がシートベルトを締めるのを確認してギアをドライブに入れた。それから後部座席

に手を突っ込んでタオルを取り出す。

「使え。いくら君でも何度も雨に打たれていたら風邪をひく」

「……ありがとうございます」

ふわふわのタオルを素直に受け取る。

本当は連日連夜雨に振られても風邪なんてひいたことはないんだけど、それをあえて言う理由もなく黙っておいた。

車自体が走行時に音をあまり立てないせいで、車内はしんと静まり返っていた。

あの雷雨が嘘のように今日は可愛げのある霧雨だ。フロントガラスを濡らす雨も、叩くというより触れるような優しさだった。

そのせいか車内を満たす沈黙もどことなく優しい。

とはいえ、それすら私には怖くて仕方ないんだけど。

「長い雨だな」

「そう、ですね。秋雨前線もまだ消えてないみたいですし」

「今年は随分長いらしい」

「台風も多いみたいですね」

降り注ぐ柔らかい雨を受け止めるフロントガラスの先を見据えながら淡々と話す部長に、失礼でない程度についていく。さすがに顔は見えてられなくて、タオルで顔を押さえて前だけを見た。

対向車が、アスファルトの溝に溜まった泥を巻き込みながら通りすぎる。

光が視界に溢れそうなぐらいに眩しいハイビームに目を細めると、遠くで信号が赤に変わった。

できれば今日ぐらいは青信号ですつと駅に行きたかったのに。こういう時に限って大抵信号は赤だ。

停車する車に合わせて沈黙がより密度を増す。

私の中の気まずさもそろそろ限界に近いぐらい強さを増した。

いつもは穏やかな沈黙が今日は痛い。

何も雰囲気は変わらないのに、雨だって優しいのに怖くて胸と頭が痛い。あと胃も痛い。

ストレスなんて仕事してても滅多に自覚できないのに、よりによってこんな場所でキリキリ痛む胃が憎たらしい。だけどこれみよがしに胃薬を取出して飲むわけにもいかないから、胃を押さえることすらせずに口を噤んで信号の色が切り替わるのを待った。

横からトラックが走り抜けていく。青い光が一筋の線になってすっと横切った。

一体どこに行くんだろう。

そう考えて、あの道が高速道路の入口に繋がっていたのを思い出す。

随分大きかったから長距離トラックかもしれない。この雨の中運転するのは大変そうだと、こっそり無事を祈った。色彩に乏しい世界に、まるで蛍みたいな光を一瞬だけ見せて去ったあのトラックの無事を。

部長がハンドルを指でとんと叩く音がする。

何かを催促するような、苛立っているような音に思わず体が震える。

大きく弾んだタオルを見てか音はすぐに止んだ。

代わりに低く、なるべく優しく放とうと苦心しているような声が耳朶を打った。

「何もする気はない」

温度のない、暖かくも冷たくもない声は部長の精一杯なんだろう。でも、何もする気はないって。

「し、知ってます！」

その精一杯で放たれた言葉の意味を一瞬よく噛み締めてみて、私は慌ててタオルをどけて部長と目を合わせた。

突然動いたからか部長が目を瞠る。

苛立ちも怒りもない眼差しを見返し、ようやく体から緊張を解いて噛んで含めるように言った。

「その、何かされるなんて思ってませんから」

気まずいとか怖いと思うことは色々ある。

律儀過ぎる親切に対して今日ぐらいはいらないよって思わないわけじゃない。

でも部長が人を車内に連れ込んで、話を蒸し返して嫌味を言うだの怒るだの殴るだのって考えは持ってなかった。

一般的に男が女を密室に連れ込んでやりそうなことの数々は、そもそも想像すらしてない。いくら何でもそんな想像をするのは失礼すぎるし、どんなに頑張っても想像しようとしてもできそうにない。

真っ直ぐに見返した一見冷たそうな目が安堵したように細められる。

ほんの僅かな変化だったけど、それだけのことで気まずい思いをさせてたのは私の方だったのかもしれないと思って、恥ずかしくなつて目を逸らした。

……そういえば部長には前にも怖がるなつて言われてたんだつた。その度に態度を軟化しようとしてくれていたのを思い出し、申し訳ないやら気まずいやらで目を合わせられない。

これじゃ完璧子どものお守りをさせてる気分だ。

そう思ったけど多分何度でも怖がるのは目に見えてるから、せめて今はそうじゃないと示すように体から力を抜く。

シートに身を預ける私に部長が深く息を吐いた。

「そうか」

「はい」

信号が青に変わる。光も夜の闇も路上駐車している車のブレーキランプ、何本もの線が変わっていく。残像は車の速さと快適さを乗っている私達に知らしめながら駅に近づいていく。

コンビニも少し遠くに見えるカー用品店も、そこに行けば人が沢山いて話し声がするだろう。騒がしいとも思うはずだ。

なのにこの車の中だけは特別ひっそりと静まり返っていた。部長が沈黙を破るまでは。

「……この前はすまなかつた」

横から放たれた声にぱつと顔を上げる。

「え？」

呆けた声を上げると、部長は前を見据えて運転に集中しながら続けた。

「前に送っていった時の話だ」

ああ、と部長の声にあの雷雨の日を思い出す。

ドアを開けた途端溢れ出したノイズと遠雷。騒がしい世界から一転して静かで誰の目にも付かない光堂の中であつたことを。私達の気まずさの原因を。

もう会うことはないだろうと思った。

あんなに怒らせたんだから、もう声を掛けてもらえないだろうって。

でも、それなのにまさか謝られるとは思ってなかった。

気まずそうな、申し訳なさそうな声。

同じ職場にいた頃は一度だつて聞いたことのない声に一瞬この人誰だろうって疑問に思ったのは、仕方のないことだと思う。

いつだつて毅然として背筋を伸ばして、謝らなきゃいけないようなことなんて端からしそうにない部長は、よりによって元部下の私に謝っていた。そんなの、頭を下げなきゃいけないのは私の方なのに。

慌てて首を振る。湿った髪が額に首に張り付いて気持ち悪かったけど、それどころじゃない。

「図々しいことを言ったと思ってますから」

そう、だから怒られたのは仕方ないと思ってる。逆鱗に触れたのだつて自業自得だ。

当然後悔はしてないわけだから謝れもしない、でも。

「反省してます」

安易にかつ直接的に口にしてしまったのは失敗だった。そう思う。私も部長みたいにくまく気遣えたらもう少し違っていたかもしれないのに。

うつん、それよりも私踏み込みすぎるのをやめた方がよかつ

ただ。

いつもみたいにちゃんと距離感を掴んで接していればこんなことにはならなかった。唯一後悔らしい後悔をしたらそこだったけど、あの時何とかして息をとってもらおうとした気持ちが無駄だったとは思いたくなくて口にはできなかった。

「図々しいなんて思っていない」

俯く私に、少し早口な部長の言葉が聞こえた。

「少し疲れすぎていたんだ。……君に指摘されるまで気付かなかった」

疲労が蓄積しすぎて苛々してたつてことだろうか。

今はもう大分顔色もよくて落ち着いた様子の部長がバックミラー越しにこちらを見た。

理性の宿った、むしろそれしか宿ってなさそうな冷静な目を同じくバックミラー越しに見返す。

しゃんとした、でも鋭さのない顔。

怒っていないんだ。

何を考えているのか分かりづらくてもそれだけは伝わったから胸を撫で下ろす。

……あれ？

そうして撫で下ろした胸を見て内心で首を傾げる。

何でこんなほっとするんだろう。それが分からなくて。

大体どんな相手でも関係がこじれて疎遠になる時、私は仕方ないかなあって思ってた。引き止める面倒くささもあつたけど、多分どうやったって駄目なんだろうなって気持ちがあつたから。

こんな風に気まずい思いをしてまで向き合つたことは今までなかった。

ものすごく強制的な向き合い方だけど、それでも今まで一度だけ。

ああ、でもそうなのかもしれない。

今まではただ向き合わなかっただけで、ちゃんと相手とことん

話さなかつただけで、それがちゃんとできて元通りの関係に戻れたら私はこんな風に嬉しい気持ちになつていたのかもしれない。お互いが逃げずに話ができさえすれば。

部長の、ハンドルを握る手を見る。運転の荒さなんて一度も感じさせたことのない丁寧な動きをする手を。

それからきつちりと着こなされたスーツを見る。一日仕事をした後なのに皺一つないシャツを。

最後に前方を見据える横顔を見る。いつも毅然として滅多に崩れない鉄面皮を。

「少しは休めましたか？」

声をかけると部長が頷く。それさえもきつちりした動作に見えて思わず笑いそうになつた。

「あの時、自分が疲れてると気付いて有給を取つてみた。一日寝ると違うものだな」

「そうだと思いますよ。私も休みの日にはたつぷり寝てますから」
うんうんと頷きながら、私はようやく心からも緊張感が解けた気がしていた。

何であんなことがあつた後で声なんて掛けてくるんだらうつて、ずっと不思議だつた。こんな面倒な元部下ほつといて通り過ぎれば早いのに。

でも違うんだ。この人はきつと、それができない性格なんだつて気付いた。

気ままいままで放つておけない。あんな別れで疎遠にできない。

皺一つ我慢できないような几帳面さと律儀さと潔癖さのせいがそれを許さない。そして本人もそんな自分を嫌つてないのが分かつたからようやく納得できた。巻き込まれた私としては大変心苦しい一時があつたのは否定できないけど、文句を言いたい気持ちは失せていた。

だつてそれつて、とてもすごいことだ。

二十六年間私がやってこなかつたことを、私の周りの人達がしな

かったことをこの人はずっとやってたんだろうから。

部長を尊敬する自分の目に狂いはなかった。

やっぱりまだまだ敵わないのは悔しいけど、仕事だけじゃなくて人柄も目標にできる人を見つけられたのは自分にとってプラスだと思うから満足感は強かった。

駅がぐんぐん近づいてくる。

出迎えの車やタクシーを見ていると、ぼそりと喉の奥から出てきたような声が聞こえた。

「怖がらせるつもりはなかった」

小さな小さな声は、もしかしたら独り言だったのかもしれない。

でも私はその後悔しているような声に、目を合わせずに呟き返した。

「知ってます」

そんなつもりで私と接したことがないのぐらいは知ってるつもりだ。

怖いのは悪意から来るものじゃなく、単にこの人の地が怖かったからでもあるし。

最後の信号で車が停まる。

同時に向けられた視線にやっと心から笑い返した。へらりと、なんともだらしのない顔だけど嬉しいんだから仕方ない。尊敬する人にそんな細かなことまで気にしてもらえて喜ばない人はいないだろう。霧雨が車のボディを包むような柔らかさがようやく車内に満ちる。まるで仲直りをしたみたいだ。喧嘩なんてしてないのに。

「で、だ」

とん、と部長の人差し指がハンドルを叩いた。

どことなく緊張しているような言いづらそうな空気に首を傾げる。すると部長はこちらを見て言うべきかどうかさえ悩んでいる様子で視線を彷徨わせながら、最終的に覚悟を決めたようにこちらを見た。「お詫びと言ってはなんだが、何かしたいことはあるか？ もしくは行きたい所でもいい」

真摯な、でもこちらの出方を伺う珍しすぎる態度に度肝を抜かれて一瞬言葉を失う。

……そんなに気にしてたんだ。

お詫びという言葉が部長の口から出てくるの自体とんでもない話だけど、何かしたいことだとか行きたい所を訊かれるのはもつとんでもない話だった。

部長の言葉に、反射的に首が何度も振られる。

「いいです！ だって私何度も駅まで送って頂いて」

「それでは気が済まない」

済ませてください。

心底そう言いたかったけど、その前に部長がハンドルを叩いた。

「車ならあるからな。行きたい場所があるなら連れて行けるし、したいことがあるれば大抵の事はできるだろう」

いや、確かに部長なら何でもそつなくこなしそうだけど。

車が走り出し、駅の前で停まる。

今すぐ助手席から出て行って笑って誤魔化せれば話は早いんだらうけど……。

ちらりと運転席を見る。答えを待つ静かな部長の視線に、何となく逃げられない気持ちになる。

元とはいえ部下に謝罪までした覚悟を思うと、固辞し続けるのも辛そうだ。というかさせてくれないだろう。今まで部長に言われて断り続けられたことなんて一度もない。

でも、それならどうしよう。

お詫びなんてさせるつもりは勿論ない。

どちらかと言えば私の方が煙草をカートンで買ってあげたいくらいだ。苛々させたお詫びに。

かといって断れもしない。難しい問題だ。

沈黙が耳に痛い。窓も閉めてるせいで雑踏もホームの音も遠く、静寂を打ち破るには至らない。その中で答えを待つ部長を前に私は必死に考えて、ぱつと顔を上げた。

そつだ、一個だけいい方法があつた。

ようやく思いついた風の私を部長が見下ろす。それににこやかに笑つて「そうですねえ」とあえて軽い口調で言つた。

「箱根にでも行きたいですねー」

これならどうだ。

にこやかな笑いを崩さないまま私は内心でガッツポーズを取る。

ものすごく軽く言つたが、ここから箱根までは高速に乗つても五時間はかかる。

普通に考えて、わざわざ行こうと思つ距離じゃない。少なくともお詫び程度では。

ニコニコ笑う私の言葉に部長がぱちり瞬きする。

でもきつと次の瞬間には「別のにしろ」と言うか「ふざけるな」と言うはずだ。別のにしろと言われたらそれしかないと言えればいいし、ふざけるなど言われたら平謝りして終わらせよう。うん、それでいい。

タオルを畳み、バッグを胸元に抱き寄せる。

これでいつでも出られる。

そうやってすっかり準備万端の体勢で部長を見上げると、彼はハンドルを叩き何を言おうか考えてでもいるのかしばし沈黙していた。ほら、そんなに悩まずにすぐ断つてくれていいんですよ。

心の中でほくそ笑み、次に出てくる言葉を待つ。

……だけど私は本当に甘かつた、らしい。

おもむろにカーナビの画面をつけて軽い電子音を響かせた部長が一つ頷いた。

「箱根か、行けないことはない」

いや行けない！　っていか行かなくていいですから！

今カーナビで確認したんなら分かるだろうけど、遠いんですよ箱根！

いやその前に何部長ハンドル握りなおしてるんですか。

まさか今から行くつもりじゃ　いやありえる、ありえすぎて怖

い。

「じよ、冗談です！ 行かなくていいです遠いですし！」

シートベルトを外して慌てて部長の腕に取りすがる。

ギアはパーキングに入っている。その間に説得しなければと焦りだけが渦巻いた。

一緒に傘に入った時でさえ触れなかった腕を思いきり掴む。

この際距離感がどうか言ってられなかった。箱根を阻止しなければ。

さらりとしたスーツ生地を手の平全体に包み込む。それを見下ろした部長の手がその更に上に乗せられた。表情とは全然違う熱い手がやんわりと私の手を握って引き剥がす。

「これでは運転ができない」

いやだから運転させないように掴んだんですけど。

「あの、だからですね」

一体何て言えばいいんだ。

心底この天然なんだか生真面目なんだか分からない上司の扱いに困っていると、不意に問いが降ってきた。

「君は明日仕事は？」

「休みです。……あ」

さりげなさすぎる問いに素直に返し、直後激しく後悔する。

仕事だつて言えば帰してくれたはずなのに、何で休みだなんて。

口を押さえて後悔の波を漂う。その横で部長が口の端を吊り上げた。

「なら問題ないな」

シルバーのセダンみたいな、でも決定的に違う楽しげな笑みに私は恨めしげな目で質問する。

「部長もお休みなんですか？」

土曜日も基本的に職場に顔を出してははずだ。

そう思つて半ば懇願するように訊くと口元に浮かんだ笑みが濃くなつた。

「有給をねじ込む」

それは休みとは言わない。

がくりと肩を落とす。何でこの人こんな頑固なんだか。

少しぐらい瀬川さんや私の大雑把さを分けてやりたい……。いや駄目か、そうすると仕事が回らなくなる。

私はもう自棄なんだか逃避なんだか分からない考えを巡らせ、胸元に引き寄せたバッグを足元に戻した。帰れる気がしないのを嫌すぎるぐらい感じていた。

窓の外で透明なビニール傘を持って歩く人達の群れを見つめる。

やっぱりどこまでも色のない世界でここだけが柔らかな色を持っている車内に目を戻すと、部長がカーナビを操作しながら訊いてきた。

「箱根ということは温泉目当てだろう？」

「そうですけど」

本当は何も考えてなかったけど、温泉に行きたいと常々思ってたのは事実だ。

ナビ、と行き先設定をする指が止まる。

「お互い疲れていると思わないか」

それで温泉に行こうと思っただろうか。

「部長、温泉好きなんですか？」

「嫌いな日本人を見たことがないな」

好きってことね。

なるほど、と思い深くシートに体を預ける。

私はともかく部長が疲れているのは間違いないだろう。温泉に浸かりたくなったのも分かる。

だから箱根に行こうとするのも分かるけど、いいんだろうかそれで。私一応女なんですけど。

……。いや、でも気にしてないかこの人は。

考え、即座に否定する。

そういう面で大雑把というか無頓着なのは不思議としか言いよう

がないけど、そういうの下手したらセクハラって言われますよって指摘する気にならないのは相手が全く気にしてないからだろう。

それに私も不思議と気にならなかった。

カー用品店にちよつと連れて行ってもらう、その延長線上に思えたせいかもしれない。あんまりにも淡々としてるから。

ただ、これだけは指摘したい。

「こんな時間から行ったら着くの真夜中ですよ」

温泉に入ろうにも開いてないだろう。秘湯でもない限り。

とうとうカーナビから温泉情報まで検索し始めた部長がその問いに顔を上げる。

「仮眠を挟めば朝になるだろう。日帰りするには丁度いい時間だ」

「日付超えてますけどね……」

もはや日帰りとは言えそうにない旅行の予感に溜息を漏らす。

その時ふと部長が何か思い出したように「そついえば」と呟いた。

「随分前だが、君を駅まで送って帰ったことがあったな」

「前？ ああ、部長の所で働いてた時ですか？」

覚えている。あの職場にいた時、一度だけこの車に乗せてもらったのは忘れがたい思い出。とんでもなく苦手だった上司がちよつとだけ苦手でなくなった瞬間だったから。

ああ、と部長が頷く。

懐かしむような、でもどこか意地悪そうな笑みが浮かんだ。

「あの時、乗って帰るかと言った私に君が言った言葉を覚えているか？」

「言葉？ ええつと……」

一体何だったか。

部長の態度ばかりで自分のことなんてまるで覚えてなかったから必死に記憶を探り、直後見つけた記憶を焼き付けたまま部長を凝視した。

意地悪そうな笑み。それが何を言いたがってるか分かったせいだ。

「どこまでも付いて行きます」

声が重なる。低く淡々とした、でもどこことなく楽しそうな声と私の声が。
カーナビの設定が終わる。ギアをドライブに入れ、部長が私の肩を指さした。

シートベルトを締めると、そう言いたいんだろう。

でも部長はそうとは言わず、平坦に一言。

「行くぞ」

それだけ言って、案内を開始するナビに従ってウィンカーを上げた。

そして私もシートベルトを無言で締めて脱力する。

……どこまでもっていうのは問題だろう、私よ。

当時と同じ突っ込みを心の中で入れる。脱力し、ナビが示す到着時間を見下ろした。

「お供します」

諦めを言葉にして放つ。

その声に、それでいいとシルバーのセダンが笑うようにスピードを上げた。

06・加算された体温

一人分加算された体温。温いはずのそれが気まずさに変わっていく。

嫌な予感はしていたのだ。仕事からずっと。

相変わらずセクハラ上司は五月蠅いしデータはなかなか纏まらないし、瀬川さんからのメールが今日はやけにしつこいし、傘忘れたし。……これはいつもだけだ。

とにかく嫌な予感がしていた。

だから私は定時でさっさと仕事を切り上げて、相変わらずの土砂降りの中バス停への道を歩いていった。

それなのにどことなく気分が落ち着かない。

もう仕事は終わって後は帰るだけなのに。

肌寒い空気に触れて濡れたジャケットがより冷たくなる。

体を震わせると飲食店の赤やオレンジの光がちかりと眩しく明滅した。

顔を上げると屋根から雨垂れが滴り落ちて鼻の頭に触れた。

……あ、そうだ。道を変えてみよう。

虫の知らせじみたものを感じ取ってしまったてる気がしてどうにも気になっていたので、いつもとは違う道で歩いて帰るのもありかもしれない。いつも通りで落ち着かないんだから、地味にルート変更すれば気分もすっきりするかも。

止めどなく頭皮を伝って地面へと落ちていく雨を額を拭うことで一旦退ける。

バス停までの大通りは一つしかないけど、辺りを見れば路地は沢山ある。

これなら行けるかな。方角さえ分かってくれば迷いようがないし、この辺の道には詳しいつもりだ。

さて、それじゃあどっちに行こうか。

私は右と左に見える道を見て唸りながら歩き、それから思いきり前につんのめりそうになった。

ハイビームに照らされる。それだけなら普通だけど……。

「唯ちゃん！」

「げ」

この雨の中どこの馬鹿が窓を開け放って叫んでるのかと思ったら、私は自分の名前を呼ぶ、思いきり見知った人の顔を見て顔をしかめた。

いやだって、声だけならともかく　あれ、あのシルバーのセダンをって。

「何で瀬川さんが部長の車に……？」

間違いない。運転席に座る不機嫌そうな鉄面皮は紛れもなく七条部長だ。

というか瀬川さん、何であんな七条部長の隣にいてマイペースに振る舞えるの？ 私だったら絶対無理なんだけど。

そしてそのまま通りすぎてくれたらいいのに、やっぱり止まるんだ。

次第にスピードを落として私の横に停車した艶やかなシルバーのボディが今日はどこか疲れたように笑っている。そりゃそうか、あんなも疲れたかと心の中で話しかけると助手席の窓からにこやかな男の人の声が出た。

紺のスーツをオシャレに着こなした、どちらかといえば営業マン風のその人はこの雨の中ここだけ晴れてると言わんばかりに満面の笑みを浮かべた。

「久しぶりー！　こんな所で会うなんて奇遇だね！」

「は、はあ。それより瀬川さん、今日は七条部長と一緒に外出だったんですね」

そう言つてさりげなく部長に頭を下げると渋い顔を向けられてしまった。

「ああ、やっぱり不機嫌だこれ。」

瀬川さんが絶対零度の睨みを利かせられてないのは、単に諦めたせいじゃないだろうか。

「彼なら私みたいに怯えるってことをしなさそうだし。」

「良くも悪くも凶太いんだよね。……悪い人じゃないんだけど。」

部長の威圧感と瀬川さんの明るさの落差に一歩引き気味に笑いかけると「ん？」と瀬川さんが首を傾げた。私より二つ年上の彼はその甘いマスクが持つ威力をいかになく發揮して、女子社員を五人ぐらい一気に落とせそうな笑顔で部長に振り向いた。

「そうそう、仕事でちよつと外出ててさ。傘忘れちゃったから部長に頼んで家まで送つて帰つてもらおうと思つてさ。そうですよね、七条部長」

「ああ」

部長、声が低すぎて怖いです。

「度胸ありますね……」

自分だつたら頼まれたつて逃げて帰りたいのにすごい人だ。

そう思い心から呟くと瀬川さんに不思議そうな顔をされてしまった。

「仕事中は怖い怖いってあれほど言つたのに、仕事が絡まなくなるとあまり細かい事を気にしない性格なのかもしれない。本当に羨ましい限りだ。どれだけ考えてみても自分には真似できそうにないけど。大体部長怖すぎ。」

「瀬川」

「そんな事を考えていたせいか、ボディを打つ雨さえ避けて通りそうな低音が耳朶を打つた時思わず背筋が伸びてしまった。」

「へ、返事なくてよかつた。」

「部長？ どうしたんすか？」

「瀬川さんが小首を傾げる。」

そのたつぷりとした甘さを冷ややかに睨めつけ、部長が後部座席からタオルを取り出した。

「雨森をいつまで雨に濡らす気だ」

「あ……」

不機嫌極まりない声に、流石の瀬川さんの顔が引きつる。

「そうだった！ ごめん唯ちゃん！」

「はあ。いえ、私なら別に」

別に雨に濡れたぐらいじゃどうにもならないんだけど。

慌てた声にそう告げようとすると、後部座席の荷物を一所に固めた部長がこちらを一瞥した。

一秒に満たない溜息の後で告げる。

「乗れ」

できれば乗せたくないと言っているような声にちよつと気が引けた。

だけどこのままじゃ瀬川さんが怒られるんだろうなあ。

更に言えば私まで睨まれる可能性が高い。ここは乗っとくしかないのか。

「……すみません」

小さく謝りながら瀬川さんの後ろの席に座る。

同時に部長から渡されたタオルで顔や髪を軽く押さえると、今日は大分顔色の良さそうな部長の顔がバックミラー越しに見えた。夜に高速に乗って箱根まで足を伸ばしただけあって、具合が良さそうな姿に小さく笑いかけそうになり慌てて顔を引き締める。

危ない。今日は瀬川さんがいたんだった。

別に私が部長に笑いかけたぐらいでどうこうというわけじゃないんだけど、さすがに温泉に行った話は秘密にしたかった。私の為というよりは、どちらかといえば部長の為に。

私の場合はいい、瀬川さんからの食事の誘いが減るだけだし。でも部長は違うのだ。

万一元部下と温泉に行ったなどと知られた日には、瀬川さんは歩

くスピーカーよろしく広めるだろう。

丁度私の勤め先を部長に話したみたいに。

明るくて誰にでも好かれるムードメーカーだけど、口の軽さは折り紙つきだ。注意するのに越したことはない。

ギアがドライブに入れられる。水溜りを踏んで進むタイヤの音が静まっていく頃には体も大分暖まっていた。暖房の風にはっと息を漏らすと「ごめんね」と拝むようにして瀬川さんが謝ってきたので苦笑して首を振った。

「瀬川を先に送るがいいか？ 少し遠いが」

いつもとは違う、斜めから見る部長の横顔に問われて頷く。

「はい、私は後で十分ですから。ここあったかいですし」

どことなく懐かしい肩のラインと横顔は、前の職場で毎日のように見ていた姿だった。

一歩分先を歩く部長の姿はいつでも変わらずしゃんとしていた。

あの時の事を思い出し、怖さからじゃなく背筋が伸びる。

暖房に温められたせいかわかそれとも私の心の持ちようか。

ほんわかと温い空気の中、部長がバックミラー越しにこちらを見てからハンドルを切った。路地に入り、いつも使うのとは違う大通りに向かうのはそれが瀬川さんの家に繋がっているのだろう。

「えー！ 部長、俺の家の方が遠いんですけど！」

「時間としてはそう変わらん」

「変わりますって！ っーかそれじゃ俺唯ちゃんと話できないじゃないすか」

「別に雨森目的で車に乗ったわけじゃないだろうが」

いちいちごもつともです、七条部長。

淡々と目さえ合わせずに瀬川さんをあしらう部長に心の中で拍手を送りつつ、そんな部長に食い付ける瀬川さんにも拍手を送る。

どちらも私には真似できない芸当だ。

特に瀬川さん。同じ会社にいた頃、話してるだけで給湯室や女子トイレ行くのが怖かったぐらいだ。彼とはまともに話せない。いつ

も曖昧に頷くだけで、相手のペースに巻き込まれて話が進んでしま
う。

今そうならないのは、ひとえに会社が違うからだ。おかげで断り
文句を言うのは得意になったけど、やっぱり面と向かって喋ると彼
のペースに巻き込まれてしまう。

何ていうか、あの糖度の高い笑顔を向けられると断りづらくなる
のだ。

断った瞬間大型犬がしゅんと尻尾を落とすような、そんな彼の落
ち込みようが想像できるだけに。

だからお願い、今日は誘わないで。

心から祈っていると、唇を尖らせた瀬川さんが足を組んでこちら
を振り返った。

「ところでちよつと気になってたんだけどさ」

「何ですか？」

「部長と唯ちゃんって付き合ってたの」

目を眇めて私を見る眼差しの鋭さにドキリとする。

でも、でもその質問って　！

「な、ななな何でそうなるんですか！？」

後部座席のシートにしがみついて声を上げると、赤信号に車が停
車する。いつもは細かく見れる部長の手の動きとか横顔なんて全然
目に入らないぐらい、瀬川さんの質問は強烈だった。

いや、だって七条部長と付き合ってるかって言われても！

大体瀬川さん気付いてます？　横に部長！　部長いますけど大丈
夫なんですか？

私フォローしませんよ！？　絶対しませんからね！

ああしかも部長瀬川さんのこと凝視してるし、明らかに驚いた顔
してるし。

そんなの予想外だったって顔がいつ冷たい憤怒に変わるか怖くて
仕方ないのは私だけ……なんだろうなあ、きつと。瀬川さんに期待
した私が馬鹿だった。

「えー。だって唯ちゃんが部長の車乗ってるのうちの社員が何人か見たらしくてさ。それで気になって乗せてもらったら本当に唯ちゃんいたし」

「私だってまさか部長が今日通りかかるなんて思って」

「今日のは偶然だ」

言いかけた所で部長が言い訳のように呟き、細く鋭い眼光が瀬川さんを睨めつける。

「今日のはってことはいつもはどうなんですかー？」

「ちょ、瀬川さん！」

睨まれてます！ すっごい睨まれてますから！

内心の叫びを言葉にできたらどんなにいいだろう。

心底そう思ったけど、不機嫌な部長を前に言えるわけもなく黙る。やや荒くアクセルが踏み込まれる。

「今日はやけにうるさいと思ったたらそれが目的か」

「部長が渋るから苦勞しましたけどねー。社員の中で車乗せてもらったの俺が初じゃないすか？」

「乗せる理由がない」

確かにそうだ。はっきり言つと何だかとても薄情に聞こえるけど。フロントガラスを打つ雨の音がやけに大きく聞こえる。瀬川さんが口を閉じたせいだ。

愛嬌のある、少し大きめの垂れ目が沈黙を抱いて運転席を見据える。

どことなく真剣な眼差しに内心で首を傾げていると面倒になったのか部長が溜息をついた。

「何度か送って帰ったことはある」

言いづらそうなのはやっぱり他の社員さんに知られたくないからだろう。

私は部長の言葉だけじゃ足りないかもしれないと、慌てて口を開いた。

「私、雨女なのに傘持ち歩く習慣がなくて、濡れて歩いてる所を部

長が見かねて駅まで送ってくれたんです。多分その時社員さんに見られたんだと思います」

「ずぶ濡れのジャケットをつまんで苦笑いする。論より証拠だ。だから、と部長をちらりと見た後で続ける。」

「瀬川さんが言うみたいにつき合ってるって話がもし出てるんなら、思いきりデマです。皆さんにもそう言っというて下さい」

タオルで毛先を包み込んで水気を取り除く。いつもこうやってびしょ濡れになって部長に拾われて車で送ってもらった時、こうやって乾かしているのだと伝えるように。

ふうん、と瀬川さんがこちらを振り向く。探るような目を堂々と見返す。

「てつきり付き合ってるんだと思ってたのに。部長誰も車に乗せてないし」

「違います」

きっぱり返す。

いつもは彼のペースに巻き込まれるのに今日は一步も引けなかった。

部長が怒って怖いからというわけじゃない。勿論それもあるけど、少し違う。

だって、こんなあんまりじゃない。

「親切でしてくださってる事を曲解するのってどうかと思います」

部長からしてみたら元部下がずぶ濡れで夜中歩いてたから拾っただけなのに、そんな風に曲解されて彼女扱いされたらたまったものじゃないだろう。

そんなつまらない誤解するぐらいなら仕事しろと言われそうだ。

きつい口調で言い切った私を瀬川さんがまじまじと凝視した。

……それは分かるけど、何となく部長にも驚かされてる気がしてならない。何でそんな呆気に取られた顔をしてるんだろうか。

確かに私が瀬川さんに言い返してる姿なんて見たことないだろうけど、そんなに驚かなくて。

信号に停車する。横を原付が通り過ぎ、外との温度差にガラスが曇り始めた。

目元に力を入れて瀬川さんの視線を受け止めていると、彼がへらりと笑う。

「へえ、よかった。じゃあ俺今日こそ一緒に食事してくれる？」
何でそうなる。

「今日こそって、今帰ってる最中じゃないですか。あとじゃあって何ですか、じゃあって」

今の話の流れのどこに食事の誘いに繋がるものがあつたのか理解出来ない。

ここが前いた職場ではなく部長の車だからというのもあって気が大きくなるのか、思いきり呆れてみせる。それをますます面白そうに見て、彼が体ごとぐるりとこちらに向けた。

危ないですよ、その姿勢。そう指摘するのは馬鹿らしいのでやめた。

どの道放っておいても部長が言ってくれるだろう。摂氏零度から次第に絶対零度に近づきつつある睨みがいい加減限界に近いぐらい恐ろしいから。

怒られる運命にある瀬川さんに内心で合掌する。

嬉しそうにここにこにこ笑う彼はそれに気付かず小首を傾げた。

「んー？ 唯ちゃんが食事してくれるんなら降りるけど。あ、でもせつかくだから俺の家で唯ちゃんの手料理食べたいな」

申し出に当たり前のように首を振って返す。

「私降りませんよ。傘ないですし」

あと手料理なんて作る気はない。

「大丈夫！ 俺が持つてるから一緒に入れればいいよ」

「結構です」

「えー、どうしても？」

「どうしてもです」

朝から感じていた予感ってこれか。

まさかこんな所まで食事に誘われるとは思わなかった。

いつもメールで誘いを掛けてくる時はこれほどしつこくないのに、やっぱり面と向かって話すとあれこれと返事が返ってくるのが少し煩わしかった。

瀬川さんのことは嫌いじゃない。

いい人だと思うし、口調こそ軽いもののしつかり者でもあるし、仕事だってできる。

収入だって安定してて顔もいいから引く手数多。

それにこう見えて軟派じゃないのは社内外で知れ渡ってるぐらいの人だ。

そんな人に食事に誘われて悪い気はしない。

だから今まではそれほどげんなりしなかったのに、今日はやけに部長の視線が気になって早くこの話を終わらせたくてたまらなかった。

別に食事に誘われたぐらいでと思わないでもない。

でも、どうしてもここでそんな話をしたくないと思ってしまう。

今までの、あの静かで穏やかで背筋が伸びるような時間が音を立って崩れていくような気がして何となく嫌だった。

胸に手を当ててもやもやする気持ちを抱える。黒い気持ちに一人驚いた。

そんなに大事にしてたんだ。

雨の日に後ろから鳴らされるクラクションだとかアグレッシブなウターンだとか、色のない世界を見渡せる温かな車内を。だからこんなに嫌な気持ちになるんだと感じ、深く納得した。

そっか、何だかんだ言って自分にとって特別な時間だったんだ。

あの時間は。

タイヤが水溜りを荒々しく踏みつける。泥が大きく跳ね上がったのが視界の端に見えた。

怒るのも馬鹿らしくなったのか、斜め後ろから見る部長の顔は存在感が希薄になるぐらいの無表情だった。何も考えず運転に集中し

ているからか、ハンドルを叩く仕草も見られない。落ち着かないのはそのせいかもしれないと思っていると、瀬川さんが拗ねているような残念そうな顔をした。

「唯ちゃん、俺がどれだけ誘っても断るね」

「どれだけって……。月一ペースで付き合ってるじゃないですか」「少なすぎる！ 俺毎回勇気出して誘ってんのにさー……」

大きな尻尾がふさりと地面に落ちて行くような声色に、そうだったんだと目を見開く。

大げさに言っているんだとしても、人を誘うのに勇気を出す瀬川さんなんて想像できなかった。

上目遣いに見上げる眼差しが打算なしに誘いをかける。

う、と後部座席のシートにしがみつく。部長を呆れさせた根気強い視線に耐えていると、急に車が止まった。

「瀬川」

低い、感情を感じさせない声が耳朵を打つ。

「何すか、俺今頑張ってる」

「着いたぞ。さっさと降りろ」

え、と瀬川さんと二人声を上げる。

外を見ると二十階ぐらいはありそうな背の高いマンションの玄関口に車が止まっているのが分かった。

これが瀬川さんの家なんだろうか。

随分家賃が高そうな場所だなと見る私をよそに、部長がさっさと瀬川さんを下ろすために冷え冷えと睨みを利かせていた。

「わざわざ私の車に乗ってまで早く帰るんだ。せいぜい休んで明日に備えろ」

厳しい声色に何を思ったのか瀬川さんが助手席のドアを開ける。

「……分かりましたよ。送ってもらってありがとうございます。唯ちゃん、またね」

「はあ、お疲れ様でした」

そうして頭を下げて出ていく後ろ姿を見て、私は一人吐息する。

分かりましたって言うてるけど、彼は一つだけ多分理解してない。明日に備えろって言葉。あれは間違いなく仕事量を倍に増やされるのを意味しているのだということ。経験者が言うんだから間違いない。部長は本気だ。

「瀬川さん、明日から大変ですね」

「……」

哀れみを込めて呟く。それを無言でかわし部長がギアをドライブに入れた。

静かに、今度は優しく水溜りを踏んで車が発進する。ざあっと急に強くなった雨がシルバーのセダンをより一層艶やかにする中、車内はしんと静まり返り暖房が風を送り込む音が耳に心地よい。

静かで、落ち着く音だ。

加算された体温が消えて車内の温度は下がったけど、それはそれで心地良かった。

「騒がしいのが消えると随分静かになるな」

同じ事を思ったのか部長が呟くのが聞こえた。

鉄面皮で冷静沈着で、どちらかと言えばあまり喋らない部長には瀬川さんのペースはやかましかったのかもしれない。どこか疲れた横顔に苦笑で返す。

「そうですね……、何だか嵐が過ぎ去ったみたいですよ」

こんな密室に大型の台風が来たようで私まで疲れていた。

明るいのはいいことだけど、仕事終わりでただでさえ疲れてる時にはしゃげるほどの元気はない。ある意味瀬川さんが羨ましいくらいだ。

私も大学生の時はあのぐらいのテンションだったんだけどなあ。むしろ部長みたいに無口な人と一緒にいた事の方が少ない。元彼も皆瀬川さんみたいに少し押しが強く明くるて周りを明るい気持ちにさせる人ばかりだったし、私もそのノリに付き合っつて馬鹿騒ぎしてた気がする。社会人になってからはしてないけど。

そう考えると、昔はいかにノリだけで相手と付き合っつてたかがよ

く分かる。だって私、あの頃元彼と何喋ってたかって訊かれても答えられる気がしない。相手の性格とか大雑把になら分かるけど、細かく答えられそうにない。ちゃんと話をしてなかった証拠だ。どうりで振られるわけだよ。

心の中で溜息を漏らす。その間にも満ちる静寂がしとしとと雨を運ぶ。

でも、その時から比べると今は大分成長したのかも。ふと思う。静けさに退屈を覚えないし、会話がなくても平気だ。

それに怖い上司ともこうやって話ができる。何を話したかだつて答えられるし、人柄も……少しぐらいなら答えられる。落ち着いて人を見られるようになったって点では成長したと言えないだろうか。

先入観とか恐怖心も次第に薄れて、徐々にだけど仲良くなってる気がするし。

満足げに考え「あ」と声を上げる。それから慌てて運転席を見た。「そういえば部長。先日は箱根に連れて行ってくださってありがとうございました」

先日と言っても三日前だが。

瀬川さんのいる手前見えなかった分、今御礼を言うべきだろうと頭を下げる。

「ああ。あれから調子はどうだ」

「すごくいいですよ。部長も具合が良さそうで何よりです」

そうか、と頷く部長の血色のいい顔色に頷き返す。

部長も温泉に入れて満足だったんだろう。僅かに緩んだ目元がバツクミラーの端に見えた。

本当は途中で思い直させようと苦心した霧雨の夜。

あの夜、結局どれだけ止めても聞き入れてもらえず私達はサービスイリアで仮眠を取って箱根に行くことになった。とんでもないことをさせてしまったと思っただけ、温泉で散々くつろいだのは今となってはいい思い出だ。

行ったものはもう仕方がない。隠し通しさえすれば。

「瀬川さん、ちゃんと誤解を解いてくれるといいんですけど」

温泉は隠しとしても、問題はここだ。

背筋を正し、膝の上に両手を置いて溜息をつく。

助手席のシートに隠れるように身を縮こまらせるのはこれ以上誰にも見られないようにとの私なりの配慮だ。

ハンドルを叩こうとしていた人差し指が止まる。

一瞬後にとん、と叩かれた長くしなやかな指は早い速度で数度ハンドルを叩いた。

沈黙の後、駅へ繋がる道に出てから囁くような部長の声が耳朶を打つ。

「……そうだな。君にはその方がいいだろう」

「？ いえ、私は別にそれほど深刻じゃないですけど。もう勤め先違うわけですし」

むしろ問題なのは部長だと思っんですけど。

同じ職場だし、向こう一週間ぐらい好奇の視線に晒されるかもしれないのに。

……まあ、部長ならそんなもの「仕事しろ」って一蹴しそうです。

あまりにらしい姿を想像して笑いそうになる。

そんな私の耳に嘆息混じりの声が聞こえた。

「だが、はつきり言わなければ瀬川に誤解されて困るんだろう？」

「それはそうですけど、でもそれは」

歩くスピーカーに色々吹聴されないためです。

心からの言葉を続ける息が、ぷつりと途絶える。

七条部長の、これまたとんでもないお言葉で。

「瀬川はああ言ってたが、私は君達の方が付き合っていると思って
いた」

「はい？」

何で皆さんそんな誤解ばかりしてらっしゃるの？

本気で訳が分からずばかんと口を開けていると「ああ」と付け足される。

「君がうちで働いていた頃の話だ。後で違つと気付いた」

「いえ、あの……。その頃誤解されてただけで十分驚きなんです、けど」

とんでもない誤解だ。由々しき事態だ。

力いっぱい首を振る。体を洗われたばかりの犬みたいに水滴が飛び散ったけど、それには構ってられない。

「違います！ 全然違いますからそれ！」

「だが二人で食事に行くぐらいには親しいみたいだな。案外私の考えも外れてはいなかったか」

「ちが……。っ、それは瀬川さんがしつこいからで」

「しつこいから？」

言つと眉を顰めた部長がちらりとこちらを見た。すつと細められた、鋭い目で。

「ならば訊くが、君はしつこくされたら断りきれずに誰の誘いにも付いていくのか？」

ぐっさりと、何かに突き刺されたような気がした。

否定しようと必死になっていた熱が冷えていく。部長の視線に冷やされて。

何か言いかけていた唇が、顔が固まる。体まで固まって血行の悪さに肩が痛くなった。

雨が強くなる。駅が見える。その前にシルバーのセダンを滑らせ、車が止まる。

沈黙に支配される。何か言わなきゃ。

そう思うのに何も言えないまま、私は鞆を胸に抱いてドアを開けた。

「……送って頂いてありがとうございます」

部長は無言だった。答えない私を叱責するような怜悯な眼光を避け、くるりと回れ右すると丁度良くアナウンスが流れてきた。

音もなく走り去る車が黒と白とブレーキランプやウィンカーの赤や橙の海へと飛び込んでいく。

それを背にひたすら駆ける。早く日常に、電車の中にと逃げこむように。

今まで部長に質問されて答えなかったことも、あそこまで失礼な別れをしたこともなかった。

でも、どうしても私には言えなかった。

あまりに凶星だったのだ。

きっと部長は私が瀬川さんの事が好きだから、しつこくされた理由をつけて食事に行っているんだろうと指摘しただけだろう。

だけど、それは違う。

私は別に瀬川さんが好きだから食事につき合うわけじゃない。

本当に、誰かにしつこくされたら根負けしてまあいつかで済ませしてしまうのを自覚していたから、何も言えなかったただけだ。

それが嫌で、そんな風に惰性でずるずる縁が深まるのが嫌で努力してるけど、まだまだ上手く行かない。

部長の言葉は、そんな私の弱さの核心を的確に突いていた。

階段を駆け上がる。ホームにたどり着き、バクバク言う心臓を押さえて荒い息を吐き出した。自分の中にある悪いもの全部吐き出すとするかのように。

冷やかな声を思い出す。

他の誰でもない部長の失望に、胸がずんと重くなった。

何も言えなかった自分が悔しくて腹立たしくて情けなくてならなかった。

07・熱情劣情そして哀願

熱い吐息が放つ哀願。切なげな声の意味を私は何にも分かっていなかった。

風と雨が強くオフィスビルを叩いている。

地面に落ちて細かく砕けた雨の雫がパンストに当たり足を冷やした。

秋雨前線もそろそろどこかに行つて、もうすぐ冬が来るのかも。

吐く息のあまりの白さにそう思い、私はぼんやりと空を見上げた。

瀬川さんと七条部長の二人に最後に会ったのが二日前。

あの日の夜からずっと頭がぼうつとしていて仕事がるくに手がつかずにいた。

勿論最低限の仕事はする。お給料貰つてるわけだし。でもどうにもやる気が出なくて、昨日今日と定時になるとさっさと退社することにしていた。上司の嫌味攻撃なんてこの際無視だ。

鞆を持ち直し、やる気がないせいか少しだるい体をバス停のある方向に向ける。

今日も今日とて傘を持つてなかったけど、降水確率零パーセントで降る方が悪いんだから仕方がない。この寒い中雨に濡れて帰るのは気が引けるけど。

嘆息する。その時突然鞆の中で携帯が震え、無意識に肩が跳ねた。「……またか」

鞆の中に手をつ込み、ガサゴソと奥を探る。

今日はもう職場から電話は来ないだろうとたかをくくつてたけど、何も電話やメールは職場だけがしてくるわけじゃない。それがどうにも憂鬱だからあえて取りにくい場所に突っ込んだんだけど、バイ

ブレイション機能をオフにするのを忘れたのは失態だった。

財布やら手帳やら入った鞆の中でストラップの紐らしきものが指先に触れる。

掴んで引き寄せるとまだ携帯が震えていた。

「電話なんて珍しい」

我ながら関心なんて欠片もない声で言いつつ画面を開いてみる。

大体相手の予想はできている。後は渋々確かめるだけだ。

受話器が震えているようなイラストが画面一杯に出てくる。その下に見えた名前に、私はまたかともう一度呟いて肩を落とした。

案の定電話を掛けてきたのは瀬川さんだった。

一昨日の夜からやけにしつこくメールが来るなと思ってはいたけど、全部無視したせいかな今度は電話に切り替えられたらしい。しつこいというか図太いというか。めげないのはいいいことだと思っけど、「でも、今それされてもね」

ただでさえ二日前の部長の言葉がぐっさり突き刺さっている時に誘われても、とても受ける気にはなれない。

かといって電話で話していたら相手のペースに巻き込まれそうで、メールをしてもそうなりそうで。そんな自分を見るのが嫌でとりあえずひたすら連絡を取らないように努めてるわけんだけど、諦めてくれないんだろっかこの人は。というか残業地獄は大丈夫なんだろうっか。

着信画面が消える。暗転して待ち受け画面が現れた。

同時に着信をサイレントモードに切り替えて携帯を鞆の奥底に放り込む。

今頃少し離れた場所で彼が肩を落としていることだろう。

振りではなく本気でそう振る舞える人だというのは随分前から知ってるから。

「ごめんね、瀬川さん」

彼には届かない場所で謝る。

そんなの何の意味もないのに今は直接言う勇氣がなかった。

謝るぐらいなら一緒に外に出ようと言われた時断る度胸もない。そのせいで電話やメールに煩わしさを覚える自分に、また嫌悪した。

ああやって無視してるのに何度も誘ってもらえるのに対して悪い気は勿論しない。

はつきり言って食事ぐらい行けばいいじゃんとか冷静な自分が指摘してるぐらいだ。

何の不足も不満もない相手を意固地になって断る理由なんてないと、冷静な指摘が頭の中をぐるぐる回る。

何をこんな臆病になってるんだろって自分でも思う。

ただ、こんな風にぐるぐる悩んでる時だからこそ相手の勢いに負けてちゃ駄目なんだとも思ってた。

誰かに言われたから、強要されたから何かをする私。

自分から率先して身を乗り出すわけじゃない私。

それが嫌で、どうしても変わりたかった。

それこそが唯一自分がしたいと心から思えたことだったから、やめられないんだと分かっていた。

心のどこかでは、このまま瀬川さんの誘いに乗ってもし付き合うことになったら、明るいけど真面目で意外と誠実な彼氏ができるのと思う自分もいる。でも一昨日向けられた七条部長の眼差しのおまりの冷たさが、そんな甘えた気持ちのを完膚なきまでに破壊してくれた。

無言の重圧を籠めた視線は今でも目に焼き付いている。

やっぱり失望されちゃったんだよね、あれ。

それどころか誰の誘いでも受ける尻軽女ぐらいに思われたかもしれない。否定はできないけど。

願わくば、あんな女に追われていたのかと部長が落ち込みませぬように。

神様にそれだけは強くお願いしてみる。

仕事で彼を追いかけている自分の気持ちは、これも珍しく自分の

内から出た気持ちだったから。

落ち込みつつ雨の中に一步踏み出す。くらりと目眩がして視界が揺れた。

ぶれた世界の端っこで、シルバーのセダンがニヒルに笑っているのが見えた。

「え？」

オフィスから漏れる電飾の光に淡く照らされたそれに声を上げると、運転席から紺色の大きな傘を持った背の高い男の人が出てくる。その人はこちらを見るなり後ろに下がるようにジェスチャーで指示した。相変わらずの鉄面皮で。

「え、あれ？」

どうしてここにあの人がいるの？

仕事で近くに来たのかな。

そんな風に思いながら示される通り後ろに下がり、屋根のある場所に体を落ち着かせる。でもそれで終わるかと思ったら、ずんずん歩いてきたあの人が一瞬だけ不機嫌を顔に乗せて私の前に立った。

「七条部長」

「またか」

短い言葉が呆れを含んで放たれる。

傘を持たない手を見るその目が失望を持っていないのに体から力が抜けそうになるぐらい安堵しつつ、頭を下げた。

「……すみません」

ああ、こうやって意味もなく謝るのもよろしくないよね。

髪が頬に触れた時にそう思ったけど、言った後でやっぱり今の謝罪取り消すですとも言えなくて黙りこむ。

そんな私の顔を見て、部長がやや怪訝そうな顔をした。目を眇め、何やら……凝視されてるような。

「な、何ですか？」

まじまじと見られ、上ずった声を出して訊く。

部長はその声をあっさり無視して何やら考えこむように視線を遠

くに向けた後で、ふうと息をついた。

おもむろに腕が伸ばされる。

「ちよつとすまない」

「へ？ あ、あの部長！？」

何でおでこに手なんてくつつけてるんですか！？

前髪を避けるためか下から差し込む形で額に七条部長の手の平がぺたりと触れる。前に触れた時は熱かったそれは今日はひどく冷たくて、思わず肩が震えた。動揺に顔がかあつと熱くなる。

押すでも引くでもない、ただ当てられているだけの優しい感触がしばらく経ってから離れる。

「雨森」

心底呆れたと言わんばかりの声が落ちてくる。

「君はこの雨の中傘も持たずに歩いて、熱が悪化するかもしれないとは思わなかったのか」

へ、と無意識に声が出た。

「熱？」

「そうだ」

「誰がですか？」

「君以外に誰がいる」

いや、確かにいないけど。

……あ、でもそっか。

「だるいだるいと思ったら、熱だったんですね」

どつりでやる気が出ないわけだよ。

てつきり部長の言葉のせいで落ち込みすぎてやる気が出ないんだと思つてたら、こんな伏兵が潜んでいたとは。

「気付かずこんな時間まで働いていたのか」

本気で感心していると部長が目を釣り上げたので口を噤む。

「あ、あんまり熱出すことがないもので」

「九度以上はある」

何でそこまで分かるんですか。人間体温計ですか部長。

その様子を想像しながら苦笑いで返すと、再び傘を広げた部長が車の方を向いた。

「乗っていけ」

傘が差し出される。

でも私はどうしても領けなくて首を振った。

「いえ、今日は」

「雨森」

予想でもしていたのか、ぴしゃりと耳を叩く声は素早かった。

「熱のある人間を雨の中帰らせると思っているのか」

正論だった、ものすごく。

険しさの含まれた半眼で睨まれる。鋭さに身が竦み、体が強張った。

正しいことを言われているのに、親切心ですらあるはずなのに怖くてたまらなかった。

「……すみません」

謝ると傘が頭の上にかざされる。冷たい雨をしのげる紺色の布地に守られて、熱だと自覚したせいか余計に揺れる視界をどうにか平行的に保ちながら車の助手席へと乗り込んだ。

乾いた体をシートが支えてくれる。

もうすっかり慣れた感触に胸がずきずきと痛んだ。

『君はしつこくされたら断りきれずに誰の誘いにも付いていくのか？』

強引さとしつこさで断りきれずに何度もこのシートに腰掛けている自分を、彼はどう思ってるんだろうか。今回は私に熱があるし、親切心から言ってくれたんだろうけどまだどこかに失望があるんじゃないんだろうか。

傘を後部座席にしまい、運転席に座ってシートベルトを装着する横顔は今まで見たのと同じ無表情だった。私はその中に何かしらの感情を見つけられないかと目を凝らしてみたけど、何も見えない。

静かで落ち着いた横顔。

でも何を考えてるのか分からないそれが怖くて、中で何を思われているんだろうつて思うと不安で、気付けば握り締めた手が真っ白になるぐらい力を込めていた。

「シートを倒して少し休んでおけ」

横を通り過ぎる車の波が途絶えるのを見計らう部長がこちらをちらと見る。

言われるままにシートを少し倒すと呼吸が大分楽になった。

自分ではろくに見ない顔色を伺って指摘してくれる声は厳しいものの優しさが見え隠れする。

なのに、どうして私こんなに怖いつて思ってるんだろつ。

「雨に濡れても風邪はひかないんじゃないか」

問いに微苦笑で返す。

「はい。だからこれが初めてです」

「それで傘を忘れるとはな」

「あはは……、風邪つて自覚がなかったんで。そういえば喉痛かったかもあって振り返ると色々あるんですけど」

「人間加齢と共に体力が衰える。次からは傘を持って歩かないとまた風邪をひくぞ」

「部長、私まだ二十六なんですけど」

いや、確かに二十五超えてからちよこちよこ変わったなあとと思う面は増えたけど。

怖さを抱えたまま表面上だけ明るく返し、呆れ顔から目を逸らした。

まだ温められていない車内でほうつと吐き出した白い息が消えていく。部長が言う通り九度ぐらい熱があるのか、自分の吐息とは思えないぐらい熱い。

目を閉じるとギアをドライブに入れる音がやや気遣うような静かさで響いた。

カチ、カチとウインカーの音がする。帰宅途中の車の波が途絶えるのを待って、ようやくその音が消えた。

そこから先はただ雨の音と暖房の風だけに支配される。沈黙を破る声をお互い発さなかった。

悪寒に震える体の芯を抱えて、私は目を開けるタイミングすら計れずにいた。そんな体たらくで言葉なんて発せなかったし、部長は部長で元々無口だから沈黙を苦にしていなかったらう。

多分、放っておけばこのまま駅まで無言で到着するに違いない。

優しい沈黙とハンドルを叩く人差し指と暖房と雨とシルバーのセダンのささやかな呼吸音に支配されて、生きているはずの私達は何も言わないまま。

それでも勿論よかった。悪いことなんて何一つない。

でも優しくて落ち着くこの静けさが忍び寄るような恐怖を運んでくるようで、私は耐え切れずに目を開いた。暗闇の中で恐怖にだけ耐えるのは辛かった。

子どもにでも戻ってしまったようだった。

夜を恐れて、絵本で見た怪物が現れるのが怖くて眠れない子どものように。

……恐れているのは怪物じゃなくて、部長だけだ。

冷たく責める眼差しが何度でも何度でも甦る。

その都度冷ややかさが隣に座る部長の顔と重なりあって、まるであの夜の再現を今しているように感じてしまう。きっと怖いのはそれなんだと受け止めると、また手に力が入った。

部長は一昨日の件について何も言わなかった。

こんな状態の私を問い詰めるのは酷だと思ったのかもしれないし、どうでもいいと思ったのかもしれない。あるいは何も言えなかった私の姿こそが答えだと納得して、話は終わったと思っているのかもしれない。それはすごく正しいんだけど、私の頭には今もあの眼差しが焼き付いて離れない。

どうしても自分の気持ちの切り替えが上手くいかない。

何でいつまでも引きずってるんだらう。そう考え、心の中で首を振る。

答えはすぐに出てきた。

凶星を突かれたのなんて初めてだからだ。

ああやってずばり指摘されたのなんて初めてで、だからこんなに気になってるんだ。しかもピンポイントに自分が一番気にしている事で、一番尊敬している人に言われたから余計に。

気まずさと恐怖の交差点に立ち、何も言えない時間が過ぎていく。その時沈黙を破って部長が口を開いた。

「雨森」

低く微かな声にびくりと体が震える。

大きく震えた体を隠そうと身動きして「何ですか？」と殊更明るい声で尋ねると、部長が顔を顰めた。

「いや……、寒ければ温度を上げようと思ったんだが」

今日は寒い。いつも通りの温度にしていたら寒いだろうと思ったんだろう。本当にただそれだけの問いかけに慌てて首を振ると、部長は思案するように口を閉じた後で暖房の風を心持ち強くした。

温い風が頬を打つ。緊張と疲労に眠気が押し寄せてくる。

赤信号が遠くに見える中、車の発するライトが鈍色の世界を満たしているのが見えた。でもそれを綺麗だともごちゃごちゃしているとも思えないまま、私は息を呑んでいた。

真っ白になるまで握りしめられた手に大きな手が重ねられる。

力を解こうとするような、包みこむようなそれに目を見開くと部長の真っ直ぐな視線とかち合った。

「怖がるな」

囁く低音が耳朶を打つ。まるで懇願するようなこの熱と言葉を私は前にも何度か聞いていた。

すまない、と息だけが放たれる。伶俐な目が苦しげに細められる。「怖がらないでくれ」

切なげな声に、私が握り締めた手や肩を震わせる意味を見抜かれているんだと分かった。

そのせいでこんなに辛そうにしてるんだというのも、懇願される

のだというのも。

心が一瞬浮つきそうになる。自分と同じ熱があるんじゃないかと思つような眼差しの持つ艶の意味を、ありえないそんなの私が熱出してゐるせいだと思ひながらも考えてしまふ。

怖がられたくないと思つてもらえるぐらいには、嫌われてなかつたんだと思つと嬉しい。

でも、でもこれだけはどうしても分からなかつた。

「な、んで」

震えた声を吐き出す。

頭の中がごちゃごちゃしてくる。意識が朦朧として何がなんだか分からなくなる。

それでも口に行っている言葉は何一つ嘘偽りのない疑問だつた。

「何でそんな事言つんですか」

怖がられたつていいじゃない。

昔私が派遣社員だつた頃、散々きつい言葉を浴びせかけたように怖がらせてしまえばいい。

「失望するならとことん突き放してください。鬼みたいに怖い人で終わらせて、もう二度と声を掛けてこなきゃいいじゃないですか」

私はきつとそんな怖い人を追つたりしない。だからクラクションを鳴らさなければ、Uターンなんてしななければ二度と話をすることはないだろう。いつか同じ職場にと思つてはいるけど、それだつてずっとずっと先だ。その頃にはきつと今日のことだつて思い出に変わつてゐる。

手が握られたまま車が発進する。

片手でハンドルを握る姿を見ながら、昔とは随分距離が近くなつたスーツ姿を見ながら続けた。本気で怒っているのが分かる絶対零度の眼差しを見据えたまま。

「この前部長の仰つた通りなんです」

「……なに？」

「私、昔から押しに弱くて。今はまだ五回に一回ぐらいで済んでま

すけど、前は一回でも誘われると断れなくて。そのまま何度も遊んでたら気付いたら付き合ってることになっちゃってて、でも別れられなくて、気付いたら好きになっちゃってたけどその頃には相手は私のこと飽きてて振られて。部長が指摘した通り、全然、駄目で」
何で私こんな事言ってるんだろ。

部長にはどうでもいい話のはずだ。元部下とはいえ今は赤の他人としか言いようがない女の情けない恋愛遍歴なんて。なのに言葉は次から次から溢れて止まらなくて、涙で化粧がぐしゃぐしゃになる。雨に濡れても落ちないはずなのに、涙が熱すぎるとろけていく。

熱があるせいだ。そう理由をつけようとしたけど、それだけじゃない気もした。

「でも　っ！」

だつて熱ぐらいじゃ、こんなに苦しい理由になんてならない。

「私だつてこんな自分が嫌で！　もつとちゃんとしたくて、でもやっぱりまだ、難しくて、そんな自分も嫌で！」

考えなしに放つ声が熱を帯びていく。高く重く昏く、どこまでもその鋭さに、心をいつも覆っていた雲が晴れていくような気がした。

ああ、なんだ。

私全然大丈夫なんかじゃなかったんだ。

お互いどことなく冷めてたとはいえ、別れる直前、私は確かに彼等の事が好きだった。

好きだつて言われたことがないのが悲しくて、言われてみたくて頑張つて、でも伸ばした手がすり抜けていくのが怖くて、面倒つて言葉で片付けて逃げてた。それを大して関心がないからだつて自分を納得させてたけど、実は全然違つてたんだ。

本当はそんなの嫌で、どうにかしたくて、だからこんなに心が痛い。

「私は部長みたいに意志が強くないんです……っ！　はつきり物も言えないし、気遣いだつて上手くないし、とろいから自分の気持ち

にだって気付くの遅くて！ でも、だから目指したかった」

あなたに、私はあなたのようにになりたいと思った。

浮遊霊にでもなったみたいに、頭上から自分を見ているような気分になる。

そのぐらい他人事で私は私を観察していた。

こんなにも胸は痛くて苦しくて体も思考も熱いのにな、見ている自分だけが冷静だった。脊髄を刺激する震えそのものになったような冷たい自分は、そのくせ妙に感情移入してやっぱり泣いていた。

部長の顔を見ていられなくてぎゅっと目を閉じる。アイラインが溶け落ちたらみつともない顔になってるんだろなあと思ったけど、涙は全然止まってくれない。

「私はあなたが怖いんです」
怖くないわけ、ない。

心の中の自分の呟きと重なる声は切実だった。

「目指してる人に失望されて、怖くならないわけ、ないです」
そうやって失望される自分をいつまでも晒しているのが怖いんです。

雨が心の奥底に触れる。怖くてたまらなかつた理由を吐き出して、やっとすつとした。

心を冷却する静かな雨のおかげでようやく口を閉じる。

こんな苛立ちとどうでもいい話をぶちまけた自己嫌悪に三十分後
囚われるとしても、今はこの開放感に溺れたかった。

前を見ることしかできない横顔が私の言葉の意味が分からないというように歪む。ほんのちよつとだけ、ずっと見てないと分からないぐらいのささやかさで。そんな小さな変化を見逃さずにいるぐらいこの人の事を見てたんだって、今更ながらに気がついた。

気が付いて泣きそうになる。やっぱり私、とろすぎるって責め立てたくなつた。こんな所にも怖い理由が落ちてたなんて。

車が駅の前に辿り着く。わめき立ててる私に腹を立てながらもきつちりと送り届けようとする姿勢はやっぱり真っ直ぐで律儀だ。

その姿勢に、私は今でも甘えている。
ぐちゃぐちゃになった顔を見られたくなくて俯く。

シートを元の位置に戻して鞆を持つとしたけど、手は離れない
ままだった。

指先に力が込められる。行くなと引き止めるように。

掠れた熱が灯った声が車内に満ちる。

曇天によく似合う、雨が降り注ぐノイズに似た声だった。

「失望なんてしていない」

硬く、淡々とした言葉に真摯な色が混ざる。肩が大きく跳ねた。

聞きたいと思った。その言葉の先にある根拠を。

同時に絶対に聞いちゃいけないと思った。宥める声は無表情でありながらも気遣いの上手い上司のものだ。これに縋って希望を持ってしまったら、私はもつと駄目になる。そんな気がして。

手に力を込める。大きく首を振り、剥がすように手をどけて助手席のドアを開けた。

「失礼、します」

「雨森！」

普段決して荒らげられない部長が私を呼び止めようとする。その声から逃げるように全速力で改札を抜けて女子トイレに入って、案の定悲惨なことになってる顔を見えずる座り込んだ。アナウンスが遠くで響く。でも今は動く気になれなくて、私は熱を抱えたままうわ言のように繰り返した。

「終わらせなきゃ」

終わらせなきゃ、終わらせなきゃいけない。

失望されないように、これ以上呆れられないように。……嫌われないように。

こんなに誰かを気にしたことなんてなかった。

顔色も仕草も声音も、怖かったり優しかったり、いちいち感じ取ったりしなかった。

失望されて、嫌われて、でも怖がられたくないって懇願されたの

が嬉しかったなんて一度も思ったことがなかった。

でも、だからこそ駄目なんだ。

終わらせなきゃいけないんだ、今度こそ。

私はもう、ずるずる引きずられる始まりに甘えたくない。

親切をいいことに近寄って言い寄るなんて、歴代彼氏のような真似もしたくない。

だから終わらせなきゃ。

ぐちゃぐちゃにこんがらがった感情の中で音を立てて燻る気持ちが見抜かれる前に、雨を降らせて消し炭にしてしまわないと。

08・強制的ドライブ

最後と名前のついた強制的ドライブが決行される。

ああ、まただよ。

オフィスを出た途端降り始めた雨にげんなりする。

ここ最近晴れた日が多かった気がするのに、自分が外出た途端これだ。

秋雨前線はそろそろどこかに行っただと思っただのに、いつ来てもいつ去っていくのか未だに分からない。こういつも雨が降ってたんじゃない。

手首に目を落とす。腕時計は二十三時ぴったりに針を合わせていた。

当然バスはない。傘もない。

駅までの徒歩四十分の道のりをどうするか、そこが問題だ。

はぁ、と派手な溜息をつきながら辺りを警戒する。道路は車が時折通り過ぎるものの、そこにいつシルバーのセダンが通りかかるか分かったもんじゃない。コンクリートにヒールを叩きつけながら、注意深く周囲に目を配らないと。

もうすっかり風邪も治って熱も引いた体が雨に濡れていく。これじゃまた風邪をひきかねないけど、その時はその時だ。どの道コンビで傘を買った所で持って歩くのを忘れるのがオチだ。

もう一度溜息を漏らす。凝った息が空に上がる。

「何とか三回避けられたけど……」

ちらりと車道を見る。アスファルトの上を走るタイヤの、濃密なノイズのような音が通り過ぎていく。黒いワゴンの後ろ姿にほっと胸をなで下ろした。

前回。熱を出して散々喚きちらした拳句、呼び止める声を思いきり無視して帰ったあの夜から一週間。あれから私はメールアドレスを変え、瀬川さんからの電話をひたすら無視し、雨の夜は全力でシルバーのセダンを避けていた。後ろから鳴らされたクラクションは、当然無視した。

失礼極まりない話だと思う。

瀬川さんなんて完璧にとばっちりだし、親切にしてくれた部長を避けて通るのだってひどい話だ。

それでも完全に終わらせようと思ったたらもうそれしか方法が思い浮かばなくて、今日も私は通りすぎる車にビクビクしつつ別のルートを使って駅へと向かっていた。

こんなのただの逃避でしかない。でも、他にどうしたらいいか分からない。

瀬川さんならまだ分かる。

まだ何も言われてないけど付き合おうだの何だの言われたら断ればいいだけだ。

同じ職場に勤めてた者同士交流を深めるだけなら食事に行くのはやぶさかじゃないし、何の問題もないから。だから瀬川さんが付き合おうとかそんな事全然考えてないんなら、これからも仲良くしたいところだ。メールと電話がしつこいって言ってやってもいい。

……そうじゃない場合、流れに流されずにいられるかというのが問題だけだ。

けど、それはまだよかった。

一番の問題は七条部長だ。

「向き合おうって言っても」

今まで散々お世話になった御礼を言うぐらいなら、まだいい。車に乗せてくれるって言うなら乗せてもらうのもそれはそれでいい。

命令形な上に割と強引だけど、助かるのはこっちだし悪いことなんてない。

ただ、それは私が彼に対して何も思っていないというのが前提だ。尊敬や恐怖心じゃない。

認められなくて失望されたくなくて、ずっと隣にいたいって思う気持ちさえなければよかった。それならきつと箱根に行った夜みたいに仲直りしてやり直せる。

なのにどれだけ雨に打たれても鎮火できない気持ちが悪魔で、まともに顔を合わせられない。

好きだなんて気付かなきゃよかった。

やっと、やっと自分から好きになれた人なのに言葉にできないんなら知らない方がよかった。

言いたいと思った。きちんと口にして、玉砕してしまいたかった。玉砕前提なのは情けないけど。

好きだって言われたいとあれだけ思ってたんだから、自分から誰かに好きだって伝えるのも大事なことのように思えて、だから言わなきゃと思っではいる。けどこんな情けない気持ちのまま、ずるずる人に引きずられる自分のまま一体何を言えっというんだと考えると足が竦んだ。

そんなわけで話は最初に戻り、私はひたすら瀬川さんと部長を避けていた。

ゆっくりでも相手の誘いをきっぱり断る力を養う為、と言うと聞こえはいいが要はまだ度胸がないので勇気が出るまで逃げていただけだった。

果たして部長が駅まで送ってくれるという誘いを断るのに何の得があるのかと訊かれると微妙だけど、私としては部長はラスボスなのだ。彼の誘いを断れたらもう何だってできる気がする。一種の度胸試しだ。……今はまだ逃げてただけだけど。

黄ばんだ紙切れみたいな照明が歩道を照らす。その光を避けて、殊更車道から見えないようにビルに袖が触れそうな位置を歩く。

こうすれば車から見えないし、こちらからは車種を確認できる。ジャケットを大粒の雨が叩く。とん、とんと肩を叩くような強さ

に何度かドキリとさせられた。

一体何から逃げてるつもりだ私は。

「幽霊じゃあるまいし」

そんなに怖がることもないだろうと一人苦笑して歩き出す。

幸い今日は帰りも遅いし、車通りも少ないから誰にも会わずに帰れるだろう。

部長だつて最近はやい時間に見かけてたからいないだろうし。

これなら今日は少しは大手を振って帰れるだろう。

失礼な逃げ方に良心の呵責を感じていた心が軽くなる。

でも、このまま鼻歌でも歌ってしまおうかと考えた時、短いクラクションが鳴らされて私は思わず「うえ」と蛙が潰れたような声を出していた。

「何でこんな時間に!？」

しかもあれですよ、鳴らしたつてことは見つかつてるのよねこれ見つかつちやつてるのよね!？」

私ちゃんと照明避けて黒いスーツ着て見つからないようにしてたのに、部長どれだけ目がいいの。

いやでも対向車線にいるし、ハイビームのせいで見られたのかもしない。

それでも十分、見えないはずなんだけど。

「ど、どうしよう」

どうしようも何も見つかったのものはしょうがないのだが、言わずにはいられない。

その間にもシルバーのセダンは最初に会った時と同じアグレッシブなリターンを決めて近付く。ある種の恐怖と驚きに私は辺りを見回して路地を探そうとしたけど、丁度ここは一本道で何も無い。簡潔に言つと逃げ道がない。

「走ろつたつて車相手だし」

どれだけ頑張つたつて車には負けるし、そもそもそこまでして全力で逃げるなんて真似もできない。

今まではさりげなく路地に入ってたのに、何でこんな道で！
体をビルの方に極力寄せる。

乗りませんよって意思表示なんてこの程度しかできないのが情けないけど、これが私の精一杯だった。

憎らしくニヒルに笑うシルバーのボディが今日も雨に濡れている。乾いている時なんて見たことがない艶めいた車体が滑るように近くで止まった。

「雨森」

感情を抑える、ドスの利いた声に「ひっ」と悲鳴を上げそうになる。怖っ！ 部長怖いです！

あまりの声音に何も言えずにしていると、いつもなら開けられる助手席の窓ガラスが開かずになぜか運転席のドアが開いた。スーツをきつちりと着こなした長身が曇天の下に曝される。

「え？」

雨が降ってるのに、その手に傘はない。

そのままじゃ濡れて風邪をひきかねないのに、彼は後部座席を探って傘を取ることなく真っ直ぐこちらに向かってきた。大股の、逃げようにも暇なんて与えてもらえそうにない素早さだった。

そういえば部長、いつも歩くの早かったんだ。

どうでもいいことをぼんやり考える。

もはや現実逃避と言えるぐらいの適当さ加減で色々考える思考が、びたりと止まった。

「雨森」

もう一度名前を呼ばれる。

見上げた先にいる人は大粒の雨に濡れて青い顔をしていた。

あるいは、最初から青かったのかもしれないと思わせる紙のような白い顔。

「は、い」

今にも倒れそうな顔から目を逸らせずについ返事をする。

アグレッシブすぎるUターンいい加減やめたらどうですかとか、

何でわざわざこっちに来たのかとか言いたいことは山ほどあったけど何も言えなくなった。

鞆を胸元で抱きしめる。それがまるで怯えているように見えると思つて、慌てて離れた。

怖がらないでくれ。そう言われるのは、辛い。

しつとりとした苦い香りが鼻腔につく。

一体この人どれだけ煙草を吸つたんだろうつて思うぐらい、濃密な苦さだった。

口の端が吊り上げられる。

もう逃げられないだろう？

鉄面皮の奥で獣が舌なめずりしてそう言っているようだった。

「散々手こずらせてくれたな」

「て、手こずらせるってそんな……!!」

確かに三回ぐらいクラクシヨン鳴らされて路地に入り込んだけど!

でもそれはそれで別に部長にとっては大したことじゃないはずだ。面子は潰れるかもしれないが、誰が見てるわけじゃない。好意を仇にして返されて腹が立つのもあるけど、それこそ縁を切る絶好のチャンスじゃないか。何にも損なんてない。……まあ部長は基本的にしゅんとしていて誰とでも向き合わないと気が済まないタイプなんだろうから、そこは申し訳なく思っけど。

頬に張り付いた髪を部長の指がそつと払いのける。

甘やかすような仕草に虚を突かれた隙に、下に向かった手に腕を掴まれた。

「付いて来い」

ぐいと有無を言わさない力に慌てて抗う。

「い、嫌です! 私今日は歩いて帰りますんで!」

「駄目だ」

「何ですか!」

「話がある。……まだこの前の話は終わっていない」

ぐ、と断り文句が詰まる。

前回聞きたいと思った言葉、その先を彼は言おうとしているんだろ。

失望していないという言葉の理由、きっと聞けば私の気持ちも多少上向きになるに違いない。

腕が引かれる。強引なそれは私が助手席に座って車が発進するまで私達を繋いだままだろう。この寒いのに熱い手の平が服越しにでも伝わるのに私がどれほど動揺してるか、この人は知らないんだろ。うなあと思う。

気付くまでとろけても、気付いたらジェットコースター並に惹かれていくのも関わりたくなるのも知らないままだ。

でも、そうあってほしかったからこそ私は声を張り上げた。

「嫌です！」

人気のない道に私の声が響き渡る。

この様子を誰かに見られたら通報でもされそうだったけど、幸い誰もいなかったのでもそのまま声を張り上げて続けた。ちょっとだけポリウームを落として。

「し、しつこくされたら誰にでも付いていくのかって言ったのは部長じゃないですか！」

よし、言えた！

ようやく言えた言葉に奇妙な満足感を感じ、ぱっと顔が明るくなりそうになる。でも未だラスボスは健在で、この場を乗りきれたわけでもなんでもなかった。

「そうか。……そうだったな」

囁く声が落ちる。

ビルを私達をアスファルトを等しく叩く雨を避けられる光堂に戻りもせず、部長が数秒目を閉じた。それだけなのにいつもは怖く見えた鉄面皮が静謐で穏やかなものに見えるから不思議だ。

眠っているように見える顔が、ゆっくりと色を帯びていく。

開かれた瞼の奥の双眸が真摯な色を湛えて向けられた。

腕を握る手の平から力が抜ける。そつと触れる程度の指先は哀願

するように緊張していた。

「強引な真似をして悪かった。だが」

鋼を思わせる硬い、真つ直ぐな声が雨音と一緒に耳朵を打つ。

「今回だけでいい、私に君を送らせてくれないか。大事な話があるんだ」

そうして強引でもしつこくもなく、お願いされた。

伸びた背は、私が断れば今度は折られるのが分かるぐらいの真剣味を放っている。

いつも冷静で感情なんて滅多に見えない部長のそんなに一生懸命な姿を見たのは初めてで、言葉が出なくなる。あれだけ断り文句を色々考えてたのに。

何度だって頭を下げようとする態度はしつこいし強引だ。でも無理矢理腕を引つ張ったり命令口調で車まで連れて行こうと思えばできるはずの部長のこの行動は、多分彼にとって最大限気を遣ってくれたものなんだろうと思えた。

だって全然、怖くない。

「……分かりました」

するりと言葉が出ていた。

腕を伸ばして部長の頬を伝う水滴を指で拭う。

手はすごく熱いのに、頬はぞつとするほど冷たかった。

自然と出た行動に顔を強ばらせる部長を見て、さりげなく手を退ける。あまりにもあっさりさと距離を飛び越えてしまった行動に自分でもちよつと驚きながら。

「だから早く車に乗ってください。このままじゃ風邪ひいちゃいますから」

言い訳じみた言葉を吐き、今度は自分から歩き出す。シルバーのセダンの、あの温かい車内へと。

「君がそれを言うのか」

安堵からか、苦笑しているような声が背中を打つ。

「私はもう風邪治りましたから」

それに向かつて首だけ振り向けて笑うと、自分よりは顔色がいいのが分かるのか部長の目元が和らいだ。

大きく踏み出した一歩が横を通り過ぎていく。車の後ろから回りこんで運転席のドアを開けた部長が後部座席からタオルを取り出して、助手席に座った私に手渡してくれた。いつでもふかふかのタオルに頬をすり寄せると、あまりの心地良さにうっとりしそうになる。一体いくつ常備しているのか、同じくタオルを取り出した部長が顔を頭から簡単に水気を拭い、しゅっとシートベルトを装着する。だけどそのない動きを目で追っていると、突然「あ」と声を上げた。

「また消臭剤を使うのを忘れた」

「いいですよ、別に」

「いや、だが今日は……」

こんな時でもこちらの事を気にかけてくれる姿に笑いを噛み殺して首を振る。

だが部長は自分が相当煙草を吸ったという自覚があるのか、気にしている様子で消臭剤を探していた。

「大丈夫ですよ。臭わないわけじゃないですけど、嫌じゃないですから」

苦い香りも、今は別に嫌だと思わなかった。

そもそも最初からこの車内で煙草の匂いを嫌だと思ったことがない。

素直に言うと部長の手と視線が止まる。軽く咳払いした横顔が前を見据え、ギアチェンジするため手が伸びた。それを見てシートベルトを締めると、見計らったかのように車が走りだした。

ダッシュボードとボンネットの先に見えるのは夜の海に似た暗い車道。

そこに飛び出したような暗い道を照らすハイビームを見ると、部長が不意に口の端を吊り上げた。

「乗ったな」

? 楽しげな声がする。

「乗りましたけど、それが何か」

「ところで雨森」

頭の上に疑問符を浮かべる私を呼ぶ声と共にハンドルが切られる。

「何ですか? それより部長、道違」

「少し話が長引きそつだ。腹ごしらえでもする気はないか?」

「はい?」

無視ですか。私の話二回もぶつちぎって無視した拳句それですか。

「いや、いいです。駅まで行く道すがら話すればいいじゃないですか」

「そうもいかない。万一何かあった時、また君がホームまで逃げないとも限らないからな」

根に持つてる。明らかに根に持つてるよこの人。

駅に繋がる道とは別の脇道に入る車がすいすい見当違いの方向に進んでいく。明らかに許可していない方向へ。

……これってあれだろうか。乗せてしまえばこちらのものとか、そついうことなんだろうか。

じつとりと半眼で睨んでやる。

同意した道とは違う方向に突き進みながら、鉄面皮が僅かに笑みを浮かべる。

そのくせバックミラー越しの視線はこちらが驚くほど真剣だ。

「ハンバーガー付きのドライブに付き合え」

もう一分とかならない程の近距離に緑色の看板が見える。最近で来たファーストフード店だと思つた時には、もう車はドライブスルーに入り込んでいた。……店内に入らなかつたのはそこから私が逃げないためか。用意周到ですな部長。

ご注文は、との声に部長が少し考え込んだ後で「嫌いなものは?」と訊いてきた。

「……特に何も」

「じゃあ問題ないな」

問題は既に色んな所に山積みなんだけど、そこら辺無視なんだからなあやっぱり。

部長はじつとメニューを見た後で期間限定メニューのセットを二つ頼む。若干の気まずさと良心の呵責がそこに見えた気がするのは気のせいなんだろうか。

案内に従って少し前に進んで受け取り口で車が止まる。

商品を待つ間の、しっとりした湿度に支配された沈黙を私は頑なに守る。

当然抗議の意味を込めてだ。期間限定メニューは嬉しいけど、それとこれとは話が別だ。

そんな私の怒りと困惑と抗議をやはり沈黙を守ることで受け流す部長の手に商品が渡される。料金を当たり前のように払ってくれた彼が車を発進させると、暖房の風に混じって美味しそうな匂いが漂った。

「どこに行く気ですか」

「確かこの近くに二十四時間開いているスーパーがあっただはずだ。

そこに停めよう」

「……何でそんな所に」

「あの場所なら万一君が帰っても追いかけられる」

本格的に根に持たれてる。

逃げないのには口が裂けても言わない辺り私もどうかしてるけど。

同意から始まった割にものすごく強制的なドライブが決行される。ほんの僅かな距離だけど、確実に私が逃げられないように。

駅から大分離れた位置にある大通りをコンビニやスーパーの電飾が彩る。

どことなく空虚な光を受け止めるトラックや乗用車の群れからついとほぐれると、スーパーの駐車場の閑散とした闇の中に入り込む。駐車場入口と出口の間、スーパーの入り口から見ると真正面の、でも一番距離のある場所で車が停車する。見るからに人目につかない

場所だ。あと逃げづらい。

かさり、音を立てて開けられた紙の袋からハンバーガーの匂いが色濃く飛び出す。

その中の一つを掴んで手渡され、渋々御礼を言いながら受け取とコーヒーを一口飲んだ部長が唐突に口を開いた。

「失望されるのは怖いと言ったな」

貰ったハンバーガーとは何の関連性もない言葉に、しかし私は大きく体を震わせる。

「だが」

無言の反応を肯定と受けとめ、話が続けられる。

「私は君に失望なんてしていない」

断固とした意志を見せる強い声だった。

「そもそも意志が弱いと思ったことすらない」

しりとりをした時ですらこうも喋らなかつたと思うほどの饒舌さが、どちらかと言えば話し手になってばかりの私を黙らせる。

雨がフロントガラスを打つ。

その音を観客に、まるでプレゼンでもするように言葉は紡がれた。強い主張を携えて。

「君が私の下で働いていた頃」

こちらを見下ろし、とん、とハンドルを叩く。

「君は私がどんな仕事を言いつけても、そのせいでどれだけ残業続きになつても一度も音を上げなかつた。私がいちいちどれだけきついことを言つてももう嫌だとは言わなかつたし、自分の言葉を守っていた。社員ですらあつさり音を上げるものを、一度も放り出さなかつた。そんな君のどこが意志の弱い人間に見える」

相変わらず何を考えているか分からない無表情も、怖くてたまらなかつた怜悯な眼差しもどこまでも真剣だ。

あまりにも真剣だから褒められているのに喜ぶことも、動揺する余裕さえなくなる。

「守っていたって、何を」

肌に触れたら切れそうな鋭く熱い視線に我ながら不安げな声を漏らす。

だって、私自身はそんなに大したことをしたように思えないのだ。仕事だって雑用ばかりだったし、怒られて泣いた数なんて両手の指の数じゃ足りない。

頑張ったのは間違いなし放り出さなかったのも間違いないけど、それが当たり前だと思ってた。

こつやつて意志の強さの証明に使われるだなんて、夢にも思っていなかった。

ハンバーガーを包みから出さないまま膝に乗せて黙考する。その横から淡く笑う気配が感じられて顔を上げた時、部長の何とも言えない、呆れているような困っているような視線が注がれているのに気付いた。気付いていなかったのか。そう言われているようだった。とん、と今度はハンドルではなく部長が自分の頬を叩いた。

「君は最初から最後まで、一貫して私の顔色ばかり心配していただろっ」

「……あ」

苦く笑う声に思わず声を漏らす。そうだ、と妙に納得した。

私はこの鬼のように仕事をして休むことを知らない人の顔色が気になって、それを指摘して残業地獄に叩き落された。毎日日付が変わるぐらいの真夜中まで働かされて、怒られてばかりではつきり言っていないことなんて残業代が貰える以外何もなかった。

だけど、私はそれを一度もしなけりゃよかったと後悔したことがなかった。

今だってそうだ。私はあの時の事を一度だって後悔していない。それどころか当時の私は、顔色が良くなった部長を見てこれでよかったのだとさえ思っていたぐらいだ。

他人と付かず離れずで適当に生きてきた自分。

その自分の内から出た衝動が誰かに向かつて一步踏み出していたのはこの時だったんだと、ちゃんと自分の意志を貫けたんだと部長

の言葉で確信した。小さくても大きな一歩。随分と昔に踏み出されていたそれに胸が熱くなった。

「あれだけ働かせたせいで、顔を青くして今にも倒れそうになっていた君に顔色良くなりましたねと言われた時は、正直何て答えればいいのかと思っていた。こちらは仕事を少しでも人に任せると言われた腹いせに君に仕事を押し付けたのに、全く恨まれていなかったんだからな」

「恨んでませんでしたから」

恨むだとか恨まないだとかそんなの考えたこともなかった。

それよりも腹いせだったと聞かされても、そんな人間らしいことをこの人がするんだと驚くばかりだ。少なくとも仕事上では私情なんて一切挟みそうにない人なのに。

目を丸くして驚いていると、部長が頷きながらハンバーガーの包みを開ける。

「そうだな。だから私はあの時あっさり君に惚れたんだ」

ふわりと甘みのある匂いが広がる。

ああ、美味しそう。そう思った所でぴたりと思考が止まった。

見れば部長も手が止まっている。あっさり放たれた言葉がどれだけの爆弾だったか、やっと気付いたように。

無言のまま目が合う。気まずいことこの上ない空気に何て言ったらいいのか、ものすごく悩んだ。

散々迷った拳句、とりあえずにこやかに笑う。熱くなる頬は見られていないことにして、どうしようどうしようと思いがしい思考は一旦スイッチを切る。そうしてまずは自分に都合の悪い方を選択してみた。

「部下としてってことですね？　ありがとうございます。部長にそう言っていただけで嬉しいです」

うん、そうよ。そうに違いない。

大体今仕事の話してただし、間違いないはずだ。わざわざ確認するようなことじゃないけど、訊いておかない事には気になって夜

も眠れないから許してもらおう。部長はさらりと言えることでも、こちらにはあまりに強烈なのだ。

一度動きを止めた部長が無言のままハンバーガーを包み直し、置き場を探した後でダッシュボードの上に置く。失態を恥じるような目が、しかしはつきりと告げた。

「違う」

「……違う？」

心臓が早鐘を打つ。期待と不安と困惑を全部突っ込んでかき混ぜたような緊張に、頭がオーバーヒートしそうになった。

「部下としてというのは勿論あるが、そうじゃない」

腕が掴まれる。

絶対に逃げられない距離と状況で部長が言い放った。

「部下としてじゃなく私は君が好きだ」

欲しかった言葉がゆっくりと染みこんでくる。

頭が茹だつて思考が真っ白に塗り替えられていく。

鈍色の空と黒いアスファルトに彩られた世界を、そんなものまるで見えなくなるぐらいの白に。

嫌われたくなかった、失望されなくなかった。認めてほしくて最近まで自覚してなかったけど好かれたいとさえ思っていた人の言葉に、どうしようもなく嬉しくて泣きたくなるのに何も言えない。

一人狼狽える私に、部長は何の催促もしなかった。

「せめて食べ終えてから言うつもりだったんだが、口を滑らせるとは思わなかった」

ただそう言って、再びハンバーガーの包みを開けただけだった。

私もそれに倣ってハンバーガーを黙々と食べる。綺麗に最後の一口が消えていくまでの間も、部長は何も言わなかった。自分が発した言葉に対する反応や答えを気にしているのは、僅かに寄せられた眉間だとか落ち着かなげに遠くを見る視線に現れてたのに、絶対に催促しなかった。更には。

「次」

私を見下ろし告げる。

「もし、また雨の日に君に会えたら返事がほしい」
そんな悠長なことまで言つてのけた。

あの、いつも厳しい命令口調で有無を言わさなかった部長が。
ぽかんと口を開く私に言い訳みたいな声が続く。

「……こればかりは、強引に話を進めたくない」
静かな声にすとんと何かが心に落ちてくる。

ああ、そうか。だからこの人は待とうとしてくれてるんだって分
かったから。

相手の勢いに押されたり気付いたら付き合つてることになつてた
私が、もうそんなのは嫌だと喚いたからこの人は気持ちを汲んでく
れたのか。

「分かりました」

だから私もその場で何も言わなかった。

ここで自分も好きだと言えば手っ取り早いし、部長だつて待つ時
間がなくなつてすつきりするだろう。でもそれじゃお互いどこか釈
然としないものが残るに違いないと思つたし、何より今言うのは部
長の覚悟と優しさを無駄にしまふ。だから言わない。

もう逃げようだなんて思わなかった。

代わりに小さくても大きな一歩を踏み出す覚悟を徐々に徐々に大
きくする。

ポテトを食べ終え、お互いジュースを飲み終えてから車が動き出
す。

そうして夜の街を駆け抜ける車内でも、駅に着いてからもお互い
無言だつた。

「今まで何度も送つてくださつてありがとうございました」

「ああ。気をつけて帰れ」

最後にそう交わしたのが唯一の会話だつた。

つやつやとしたシルバーのセダンが遠ざかる。

それを見送り、私は再び日常に向かつて歩き出す。

やりたいことはもう決まっている。後は最後の一步を踏み出すだけだった。

09・秋雨前線に別れを

雨上がりの虹。それを見た時のようなハッピーな気持ちが欲しくて私は歩く。

最後のかなり強制的なドライブから明けて翌日。

今日も今日とて降り注ぐ雨は強く街を叩いている。

厚手のコートが欲しくなるような冷たさに、私はよしと頷いた。

手には家から持ってきたビニール傘。準備は万端だ。

時刻は十七時。定時にはまだちよつと早い時間にならせてもらい、私は一路タクシー乗り場に向かう。確実にあの人を捕まえる為にはタクシーぐらい使わないとやってられなかった。

辺りを見渡す。何度かこの辺りで見かけたシルバーのセダンは今日は無い。それにも満足してタクシーに乗り込む。

「どちらまで？」

無愛想な声ににこやかに告げる。昔自分が務めていた、派遣先会社の名前を。

タクシーの車内独特の匂いに包まれ、今日は濡れていない体をシートに預ける。

この匂いはあまり好きになれないな、と昔何度か思ったことを心の中で呟く。

酔うほどじゃないけど、何となく苦手だ。落ち着かない。

部長の車の中があんまり落ち着くせい、久しぶりに乗ったタクシーの快適さにありがたみを感じるどころじゃなかった。

傘についた雨の雫がぼたりと足元に落ちていく。

透明な水滴の末路をじっと見てみると、何度か通ったことのある道が視界に入った。

もうそろそろ見えてくるはずだ。

傘の柄をぎゅっと掴み、ガラス越しの景色を覗む。

これからの自分の行動を思うと緊張するけど、もう後には引けないんだと何度も言い聞かせた。ここで竦んだ体を動かさずに逃げてしまったら、もう二度と自分が足を踏み出すチャンスなんてなくなってしまう。そのぐらいの覚悟だった。

ずるずる引きずられるのが嫌で、自分から動き出せないまま始まって終わるのが嫌で、だから私は変わりたかった。努力してもなかなか上手く行かなくて悔しくて歯噛みしたけど、どうにかしたいと思ってた。

だからこそあの時返事を催促しなかったあの人の優しさに、私は今応えなければいけない。

帰宅ラッシュ一步手前の時刻。

まだ空いている道路を泳ぐように進むタクシーが黒々としたビルの前で停車した。

振り向いて料金を告げる無愛想な運転手にお金を渡して車を降りる。

湿度の高い重苦しい空気を深く吸い込むと、落ち着かなかった匂いが消えて少しほっとした。雨の匂いは雨女の私には一番馴染みがあつて、親しみやすいものだった。

ビルの前に立ち入り口を覗き込むと、煌びやかなロビー部分が広がっていた。

ずぶ濡れに濡れた営業担当や、外部の人と談笑する中堅社員、受付嬢の姿も見える。

大理石が放つ華やかな光に背を向け、私は空を見上げた。

さて、これからどうしよう。

待ち人にはアポを取ってあるわけじゃない。

いつ出てくるか分からないし、クライアントの所に行つて直帰していたらそもそも会えないだろう。かといって仕事中に呼び出すなんて真似もしたくない。

となると自然に待つこと以外に選択肢がなくなつて、雨露しのげる場所に立つた私は傘を折りたたんで、ただ待った。

元々何時間でも待つ覚悟をしていただけに厚着はしていたし、今日が駄目なら次の雨の日にと決めていたからそれほど期待もしていなかった。ただ、会えたらいいなと思うだけで。

曇天から降り注ぐ雨をひたすら眺める。定時を超えていたから、横の出入口からはこれから帰宅する社員の姿や残業のために買い出しに行く人達が出てくる。ささやかな喧騒から一步遠ざかり、私はそれを見て懐かしさを噛み締めていた。

まあ、あの頃は残業がいくらあつても買い出しに行く時間なんてなかったんだけど。

そんなあまつちよろい休憩を許してくれるような上司ではなかったのだ。

その厳しさが腹いせから来ていたのには驚いたけど、今更怒る気にはならなかった。

時計はもう見ないことにして空と道行く人だけを眺めることに専念する。

灰色の世界に佇むと人の話し声とか車の音さえ遠く感じられる。それさえも慣れたものと受け流すと、横から随分大きな声が耳を打った。

「唯ちゃん!？」

多分の驚きを含んだ声に振り返る。

紺のスーツをオシャレに着こなした長身がこちらに駆け寄った。

「どうしたの? こんな所で」

「瀬川さんですか。お久しぶりです」

「あ、うん。久しぶり」

あつさりとした私の言葉に怒る素振りも見せない甘い笑顔が、すくなく振られる。

「いやそうじゃなくて、どうしてこんな所いるの? もしかして俺に会いに来たなんてこと」

嬉しそうな言葉にいえ、と首を振る。

申し訳ないけど待ち人は彼じゃなかった。

「ちよつと人を待つてるんです」

「人？」

「はい」

「それって七条部長？」

「そうです」

きっぱり答えると、瀬川さんが口を噤む。

無言で悲しまれ苦笑い返すと、彼が自分の勤め先を振り返った。

「もしかして待ち合わせの約束でもしてた？」

不意に訊かれ、慌てて首を振る。

「いえ、全然。なので今日会えなくても仕方ないかなーとは思ってますけど」

「待ち合わせしてなかったのに来たの？」

「はい。それにごくごく個人的な用事なので、呼び出すわけにも行きませんし」

私の答えにふうん、と瀬川さんが不思議そうな声を出した。

「なのにあんな仕事早く進めたんだ、部長」

え、と顔を上げる。

意味が分からない言葉に首を傾げると、甘い顔立ちが少し不満そうに背けられた。

「……多分部長には今日会えるよ。社員用の駐車場行かないとすれ違っただるうけど」

「そっいえば」

失念していた。

このビルの駐車場は元々外部の人専用で、社員が使えるものじゃない。代わりに地下に作られた駐車場を利用しているのだ。だから部長に会おうと思ったなら出入口にいても意味がない。そのことをすっかり失念していたのでぼんと手を打つと、瀬川さんが「おいで」と私の手を引いた。

「俺と一緒に中に入りやすいでしょ？」

「そうですね、でも何で」

会いに行きたい人の名前はちゃんと伝えたのに、それどころか私は電話もメールも無視した件について謝罪一つしてないのになんてこんな風に手を引かれてるんだろうか。

かつん、と大理石をヒールで踏む。

懐かしいロビーからエレベーターを目指す間、瀬川さんは無言だった。

「唯ちゃん」

いつもは明るい声が重々しく開かれたのはエレベーターに乗り込んでからだ。

「何ですか？」

ぎゅっと握られた手をどう離れたものか思案しながら訊くと、ちらりとこちらを見下ろす瀬川さんと目が合った。

「最近部長に会った？」

「え？ えっと、昨日会いましたけど」

「その前は？ ここの一週間ぐらいの間、会った？」

ぎくり、心が音を立てる。

「……会ってません、けど」

一週間。その短い期間をあえて指定された理由が分からず、困惑気味に声を上げる。

「あの、それが何か？」

「何かもなにも」

すると盛大な溜息をつかれ、がっくりと疲れた様子の瀬川さんが壁に体を預けた。

そういえば、よくよく見れば随分顔色が悪い。風邪でもひいたんだろうか。

あの、ともう一度声を掛けようとする。だけどその前に瀬川さんが呻いた。

「最近機嫌悪い悪いと思ってたら、どつりで！」

「機嫌が悪い……？」

「そっだよ！」

呟きに瀬川さんがぐるりと体の向きを変える。

「ものすごい冷たい顔でガンガン仕事回してくるし、誰とも話していない時でもひたすら目つき悪いし、ミスなんてした日にはもう……っ！俺等全員この一週間地獄だったんだよ！」

「はあ、でもそれ別にいつものことなんじゃ」

むしろあの人はもう少し仕事を部下に回した方がいいと思う。

胸中で呟くと、地下に到着したのを告げるチン、という音に混ざって「いや！」と瀬川さんが拳を握り締めた。

「いつもはもつと余裕あんに全然だったよ。煙草だって今まで吸ってるって見たことないのにいきなりものすごい量吸い出してさ」

「はあ……」

やっぱり大量に吸ってたんだ、煙草。

それが自分が避けてたせいだと考えてると、申し訳ないような嬉しいようなくすぐったい気持ちになる。

……瀬川さんに見抜かれたのは恥ずかしくて仕方ないけど。

所々緑がかつた照明に照らされた駐車場を進む。

「でもそれ全部唯ちゃんが原因だったんだなって分かって、やっと納得した。全然嬉しくないけど」

ねえ、と声が掛けられる。

「俺、唯ちゃんが好きだよ」

ふわふわと甘い言葉が耳朶を打つ。

突然のような、でも突然とは言えないような言葉を静かに受け止める。

自分達ではない、誰かの足音が後ろから聞こえてくるのを無視して言葉が続く。

「だから俺にしとかない？」

部長の余裕のなさと私がここに来た理由を、この人はきくと全部知っている。

私が電話もメールも返さない理由は知らないまでも、その意味はきつと気付いてる。

その上で発された言葉に私はゆっくりと首を振った。軽く重たい言葉。

それが沢山の勇氣と共に真剣な気持ちで向けられたものだって知ってるから、私も同じだけ真剣に返す。

「ごめんなさい」

お互いがずつと言いたかった言葉をそれぞれに吐き出す。ふう、と淡く白い息が舞った。

そっか、と悲しげに目を細める姿が痛々しい。

でもここでいい男らしく爽やかに笑ってさよならを言わないこの人の姿を好ましいと思った。悲しければちゃんと悲しい姿を素直に出せるのは、大人になればなるほど難しくなるものだと知っているから。

手が離される。くるりと背を向け、横顔だけ振り向けて彼が自分の携帯を揺らす。

「また連絡するかも。その時は一緒に食事してくれる？」

ちらりと見えた横顔に笑い返す。

「許可が取れば」

「あー……、何か今の新しい断り文句に聞こえてきた」

許可が取れるなんてこれっぽっちも信じていない瀬川さんの情けない声が遠く広く流れていく。でもすぐさま気を取り直すと「許可貰えるように努力する」と笑った。

最後までしつこくてめげなくて凶太い人だ。

そんなのも、今は全然気にならなかつた。

ゆらりと長い腕が振られる。

「じゃあまたね」

「はい」

それに同じように手を振り返す。

消えていく後ろ姿を見送り、今度は別の方向を向いた。

さつきから聞こえていた足音の方へ向かって頭を下げる。

「おまたせしました、七条部長」

足音が止まる。

「気付いていたのか」

驚いたような低い声に笑いかける。

「今気付きました。スーツが見えたので」

そうか、と声が落ちる。

瀬川さんの後ろ姿を見る怜悯な眼差しを見上げ、私は持っている傘を見せつけた。

「今日は傘持つてるんです」

「見れば分かる、が」

困惑した眼差しが、どうしてこんな場所にいるんだとか瀬川さんと何を話していたのかとかそんな問いを発する前に口を開く。

「でも、申し訳ありませんが今日も車に乗せて頂いてもいいですか？」

いつもは部長に驚かされて手を引かれていた私も、今日だけは自分から歩き出したかった。

真正面に立ち、もう一度頭を下げる。

「大事な話があるんです。少しお時間をください」

人気のない場所に満ちる自分の声がゆるく浸透していく。

その声を受け止めて目を瞠る七条部長が心底驚いているのは、例え頬の筋肉がぴくりとも動いていなくたって分かった。分かるぐらい、見てきたんだから。

分かったと部長が囁く。

「付いて来い」

「はい」

堂々とした声に付いていく。

他の社員さんに見られるかもしれないとか、もうそんなことは考えなかった。

いちいち人の目を気にして動き出せないことの方が、ずっとずっ

と怖い。迷惑だと怒られた時のことは考えていなかった。

駐車場の奥に歩いていくと、乾いたシルバーのセダンが意外そうにこちらを見たような気がした。このボディも気付けば随分と見慣れてしまった。

助手席のシートに座った時の包みこむような感触、時折香る煙草の苦い匂い、雨がフロントガラスの立てる音。その細部まで、意識してみると沢山思い出せるものがあった。

エンジンの音が静寂を打ち破る。

きゅつとタイヤが音を立てて右折する。そのまま緩やかな坂を上がつて外に出ると、たちまち車体が雨に濡らされた。

通りがかった人が部長と私の顔を見ておや？ という顔をする。

好奇心に満ちた顔を何とか無表情でやり過すと、シルバーのセダンが他の車の波に乗った。

「駅でいいか？」

「はい」

問いかげに、さっきと同じような調子で返す。

それからバックミラー越しに、緊張しているようないつも通りにも見えるような部長の顔を見て本題を切り出した。

赤信号を待つわけでもない、車を進めたまま手早く話し始めるのは、あまり時間を掛けると勇気がしぼんでしまうからだ。

「部長の下で働いてる時、私いくら仕事押し付けられても全然腹が立たなかつたんです」

言いたい言葉をストレートに切り出す前に告げた、回りくどい前置きに沈黙が答える。

「むしろ仕事をちゃんと人に振れるようになったんだなあとか、よかつたちゃんと顔色よくなってきたとか、そんなことばかり考えてました。大変なことも辛いことも山ほどあつたし、部長のこと怖くて仕方なかつたんですけど、こっさりそう考えてました」

心地良い沈黙の中、今度は冷静に泣き喚かずに言える。

その機会が与えられるって実はすごいことなんだろうなと思った。

別れようと思えばいつでも別れられる。離れたければいつだって、でもそれをせずにこうして何度も同じ車の中にいられるって、ものすごいことなんだ。

そうやって自分がこの道を選んでいるのにまず驚いた。

「でも私、基本的にあんまり人に興味が無いというか踏み込まないたちなんです。親しい人なら別ですけど、そうでもないのに顔色がどうだの仕事をもっと人に振った方がいいだの、煙草の本数減らせだの、そういうの言ったりしないんです」

だってそんなの面倒だし小姑みたいで嫌だ。

大体それで喧嘩になるうものなら後々大変じゃないか。

だから本人が気付けばいいけど、気付かなければ放っておいてもいいとさえ思う性格だった。

……部長の青い顔を見るまでは。

「今までずっとそうしてきたのに、何で部長にあんなこと言ったんだろうって最近になってやっと考え始めたんです」

一生懸命になって怒られて落ち込んで、それでも前を向こうとしてしまう理由なんてろくに考えもしなかった。多分あまりのところが疑問が浮かぶの自体、時間がかかってしまったんだとは思っけど。息を吸い込む。暖房の温かな空気が体内を循環して、ぽかぽかと体が熱くなった。

言いたくて言えなくて、でもやっと踏み込める距離に立って隣を見る。

前を見て運転を続ける眼差しが答えを待っている。催促せずに、何も言わずに。

その一見突き放しているような優しさをミラー越しじゃなくて直接見て言った。

「七条部長」

名前を呼ぶ。何度も何度も呼んだ、思考にも舌にも馴染んだ名前を呼ぶとほっとした。

締めるので頼りっぱなしにするのでもない、追いかけたくなる背

中と横顔に声を掛ける。

「私、あなたが好きです」

やっと言えた。安堵に胸を一杯にしながらへらりと笑った。

「そんなわけなので、私と付き合って頂けませんか？」

今まで一度だって言えなかった言葉。そして一度だって言われなかった言葉。

二十六にしてようやく伝えられた言葉に頬も胸も熱くなる。

部長は無言だった。無言のまま、ハンドルを切る。

「部長……？ あ、れ？ あの、ちょ、どこ行く気ですか？」

何だか見たことない道に車突っ込ませてるように見えるんですけど。

アクセルを踏み込む。

法定速度ギリギリのスピードで車通りの少ない場所をひたすら選ぶ鉄面皮が、さらりと告げる。

「停車できる所だ」

ああそう……って、何でそんな場所なんて。

「え、駅行くんじゃないかったですか？」

「後でな」

何でこの人こんな子どもに言い聞かせるような適当な返事しながら怖いぐらいの無表情でいられるんだろう。気まずさの欠片もないのは瀬川さんみたいな凶太さを感じさせるけど、一体全体どうしてこうなったのか理解ができない。

目を白黒させる私をよそに部長が不満気に呟く。

「私の方から先に言うつもりだった」

先に？ ああ、付き合っって話か。

「あの時勘違いしなればとつくに言っていたんだが……、瀬川の奴」

忌々しげな声はいつもの部長と違って、余裕がない。

っていうか勘違いって、あれだろうか。

「私と瀬川さんが付き合っているって話ですか？」

「そうだ。だからあの頃は言えなかった。……まあ、今となってはそんなの関係ないんだが」

「関係、ない？」

「仮に付き合っけていても奪おうとしたらどうな。遠慮なんて何の役にも立たないと気付いた」

……あれ、今何かとんでもない科白聞こえた気がするんですけど。奪うとか遠慮しないとかそんな言葉を聞くのも驚きだけど、派遣社員として働いていた当時そんなことを考えられていたんだなんて想像もしてなかっただけに、本当にこの人隠し事がうまいなと内心で舌を巻いた。

私だけならともかく、誰も気付いてなかったんじゃないの？

左手に公園の名前が書いた看板が見える。

シルバーのセダンを水を溜め込んだアスファルトの上で走らせ、部長がそちらにハンドルを切る。

徐々に外灯の数が減り、夜の闇が大きくなる。

この先に駐車場でもあるんだろうか？

不思議に思いながら子どもものいないひっそりとした公園の横を通り過ぎる景色を見ると「あの日」と声が落ちた。

「車に乗っていて君を見つけた時は本当に驚いた」

「……私も驚きましたよ。すごいUターンする車がいるなと思ったら傍で止まるんですもん」

言つと、その時の事を思い出したのか冷ややかな目元が柔らかく細められる。

たったそれだけのことで空気を塗り替えられる優しい眼差しが前へと注がれる。

「だが、会えてよかった。瀬川と違って私は君と連絡が取れないし、かといって同業者の所に乗り込むわけにもいかなかったからな。どう追いかけてようにもストーリーカーとしか思われない行動しか思い浮かばなかったから、もう会えないんだと思っていた」

部長がストーリーカー。

想像し、声を上げて笑いそうになる。何て似合わない取り合わせなんだこの言葉。

口元を押さえ「そういえば」と顔を上げる。

「最初はともかく、後も続くなんですごかったですよね」

偶然なんて一度続けば十分だ。そう思っただけで呑気に言っていると、心底不思議そうな顔をされた。

「……偶然だと思ってたのか？」

「違うんですか!？」

ちよつと待つて、何でそんなさも当然みたいな顔で偶然じゃないなんて言うんですか部長。

だって確か部長は言っただけです。

「クライアントとの打ち合わせ、だったんですよ？」

「ああ」

「じゃあ偶然じゃないんですか？」

「打ち合わせ程度で私がわざわざ外に出た事があつたか?」
ないです。

少なくとも私がいた頃はなかつた気がする。よほど大きな案件でもない限りはオフィスから出た姿を見ることなんてなかつた。

「本当に偶然だったのは最初と、瀬川が乗った時だけだ」

「じゃ、じゃあ後は」

「他の社員の仕事を私が代わりに請け負っただけだ。あの位置なら会う可能性も高い」

……思いきり仕事に私情を持ち込んでるけど、いいんだろ
うかそれで。

車が公園脇の駐車場に止まる。

ギアをパーキングに入れ、シートベルトを外した彼がこちらを見
た。

柔らかい眼差しはそのままに、向ける場所だけが外から私へと変
えられる。

腕が伸ばされ、長い指が頬を撫ぜた。ぞくりとする程甘い仕草だ

った。

「あの、部長」

「黙っている」

熱くなる顔を悟られたくなくて声を出すと、端的な言葉と共に襟元がくいと引つ張られた。

あれ、この展開前にも。そう思ったけど、答えを出す前にそれどころじゃなくなった。

乾いた唇が触れる。雨はこんなにしとしと降り注いでるのに、ここだけが乾いていた。

腕が伸び、シートベルトが外される音がする。そのまま体をさらった手に背中を押されて頬が部長の肩に当たった。

満足気な、でもまだ足りないというような吐息が耳朵を打つ。私もそうだった。

まだまだ全然足りなくて、抱きしめられていてもどこか満足できない。ただ今頃はこうしていたかった。

予想外な相手と予想外な展開で転がり落ちた気持ちを噛み締めていたかった。

その時、不意にフロントガラスを叩く雨の音が消える。

「え？」

屋根なんて出てくるわけなのに、何で突然。

ほうけた声で目だけを外に向けると。急にさあっと風が吹いて雲が早く流れていった。

雨が止み、月明かりが差し込んだ。

「嘘」

今まで一度だって私が外に出てる時に雨が止んだことなんてないのに。

ぼかんとしていると、部長が喉の奥で低く笑った。

「外に出てみるか」

そう言いながら運転席を出ていく姿を追うように外に出る。

すると、空の一部分だけ雲が消えて月明かりと星が顔を覗かせているのが見えた。

手を伸ばされる。

こちらに來いと呼ぶ指先に自分のそれを触れさせると、ヒールのせいで歩きづらい足元を気遣うように手を握られた。

空を見て驚く私に、さして驚いた顔を見せない部長が呟く。

「そついえば言ったことがなかったか」

「何をです？」

柔らかく細められた目元が空を仰ぎ、相変わらずのさりりとした声が続く。

秋の晴れた空のような、懐かしくて乾いていて静かな声だった。

「私はな、晴れ男なんだ」

「……はい？」

晴れ、男？

「だから大抵どこに出かけるのも晴れだし、雨が降るなんてことは滅多にない」

あっさりとした横顔が晴れるのが当たり前というように空を見ている。

私が雨を見てそれを当たり前だと思つような自然さに、慌てて声を上げた。

「で、でも私が車に乗る時は雨ばかりで」

あれだけ何度も何度も雨が降つて止む気配なんてなくて、中には嵐じゃないかってぐらいひどい日だってあったのに。

まさか私つて晴れ男に勝る雨女なんじゃないだろうか。

そう考えて悲しくなる私に、部長はやはり喉の奥で笑つて「そうだな」と囁いた。

「もしかしたら、願っていたからかもしれないな」

「願う？ 雨をですか？ でも何で」

低く笑う声と共に手をぎゅっと握られる。

「雨が降つたら君を車に乗せられる」

とんでもなく甘ったるく、でも本人からしたら当然のような言葉に目を丸くする。

こちらを見下ろす横顔が月明かりに照らされて、淡く浮かび上がる。

こんなに静かで綺麗な、傘の作り出す影に邪魔されない顔を見たのは初めてかもしれない。

凜として、見ていると背筋をしゃんと伸ばしてしまう厳しさを持つ目を見返す。

するとふと大事なことを思い出したように部長の目が細められた。その仕草に私も大事なことを思い出す。不思議なぐらい心がシンク口しているような、そんな心持ちに顔がにやけそうになった。

「雨森」

指が絡む。熱い、優しい手だった。

「私と付き合ってほしい」

そうして言うだけ言って放置していた言葉の返事に、大きく頷く。「はい」

それからちよつと考えて、付け足す。

「どこまでも付いて行きます」

何度口にしても突っ込みどころ満載の言葉に部長が吹き出す。

それからもう一度、今度は襟を掴まれずにキスされた。

長い、長い時間が過ぎる。熱を持った唇が離れる頃には、雲は綺麗さっぱり消えていた。

月が煌々と地面を照らす。穏やかな静けさを眺めていると「そういえば」と声がした。

「秋雨も今日で終わりだそうだ」

「そうなんですか？ ……でも私が外出たら降りそうですね、雨」

「大丈夫だろう」

抱きしめる手がぼんと背中を叩く。

やっと捕まえた。その言葉の代わりに部長が囁いた。

「これで晴れと雨の確率は五分五分だ」

雨が降っててもお構いなしの晴れ男と、降水確率ゼロパーセントでもお構いなしの雨女。

確かに私達が揃っていれば天気がどちらになるか予想もできないだろう。

緩んだ頬を部長の胸に預ける。そうして時間の経過と共に膨らむハッピーな気持ちと目の前の人への好意がどうしようもなく大きくなってどこかに漏れ出してしまいそうになる中で、私は秋雨前線に別れを告げた。

月光に曝されてシルバーのセダンが汗のように雨の雫をぽたりと落とす。

外灯と月の白々とした光の中、雨の夜に何度も私達を運んでくれたその顔がやれやれと肩を竦めて笑っていた。

EX・雨女と光堂

「五月雨の降のこしてや光堂」

エレベーターを降りて自動ドアの前に立つと、しっとりどころかじっとりとした生温い風に迎えられた。

うっとおしく纏わり付く湿気は今は梅雨であることを否が応にも感じさせる。

耳朶を打つ雨音も激しく、傘なしに駅まで走れば濡れ鼠になると請け合いだ。

「ここが光堂なら良かったのに」

かつて芭蕉が詠んだとされる句を思い出しそんな文句が出てくるものの、五月雨には敵わない。

いや、そもそも私は雨には敵わないんだから文句を言っても仕方がない。

「また雨が」

大理石と靴の踵が触れ合う音と共に背後から聞こえてきた声に「げ」と蛙が潰れたような呟きを漏らす。

入り口付近に立つ受付嬢の「お疲れ様です」の挨拶に振り向くと、そこに立っていたのは紛れもなく自分の上司だった。

正確には派遣先の会社の上司、だろうか。

今や知らない人はいないんじゃないだろうかと思うぐらいの有名な広告代理店、その部長に若くして就任したのはまだ四十にも満たない男性だった。自分にも他人にも厳しく、敬遠されがちな人間の典型的パターンを地で行く人だ。

勿論私も散々怒られた事がある。半泣きどころか全泣きにさせられたことも一度や二度じゃない。でも自分に厳しいだけあってこなす仕事量は半端じゃないし、何よりミスが殆どない。だから仕事面では尊敬していた。

そう、仕事面ではだ。これが定時を超えてプライベートになると

話は別になる。

私は自分の上司であるこの男の事が　とてつもなく苦手だった。というか怖い。

「もう帰りか」

「は、はいっ！」

それなのに同じ部署にいるせいしか捨て置いてはもらえず、しつかりと声を掛けられる。

慌てて背筋を正して返事をする。と自分の声がロビーに響き渡った。受付嬢が目をぱちくりさせてこちらを凝視している。うわあ恥ずかしい。

「そんなに大声を出す必要はない」

「す、すみません……わざとじゃないんですけど」

呆れ混じりの硬い声にしゅんと俯く。うう、私だって好き好んでこんな恥ずかしいこと。

大理石を睨みつけるようにして見据えていると、ふと視界の端に黒っぽいものが見えた。

きつちりと布が巻かれた棒状のものは、傘だ。

「今日はもうお帰りですか？」

「ああ。たまには早く帰って休みたいからな」

部長が一人で外に出るなんて珍しい。

そう思っただけで声を掛けると案の定な答えが帰ってきて、ますます珍しいと目を丸くしてしまった。

他の社員さんの話だといつもは日付が変わってから帰るみたいなのに。

顔を上げ、失礼にならない程度に見返すと目が合う。眼光の鋭い黒瞳に射抜かれ体が竦んでしまった。

な、何でそんな無駄にきつい目付きなの。

確か三十五だという部長は、私の目にはまだ二十代後半程度にも見えるほど若々しく映った。

もう少し眼光の鋭さが取れて柔和な顔をすれば間違いない女にモ

てる。いや、今でも十分モテそうだけど更に。噂では独身で彼女もいないって話だけど……まああれだけ働いていれば仕方が無いのかも。

「雨森」

「へ？」

唐突に掛けられた声に慌てて思考を引きずり戻す。

すると部長が深く溜息をついた。今度は何だ。

「へ、じゃない。さっきから話しかけてるだろう」

「あ、えつと、すみません。何でしたっけ？」

ついでとばかりにもう一度溜息をつかれ、自棄になった私は空笑いでも乗り切ろうとする。

今は勤務時間内じゃないから少々抜けていても怒られはしないだろう。うん、きつとそうだ。

勤務時間外に話したことがないだけに怖かったけど、怒鳴られる事だけはないはず。

外回りをしてきた後か、水滴を滴らせた傘を持って社員が一人口ビ―へと足を踏み入れる。

その邪魔にならないように脇に避けてから部長の言葉を待つと、彼はちらりとこちらを見下ろした。

「傘を忘れたのかと訊いたんだ」

「あー……はい、忘れました」

あはは、ともう一つ空笑い。

だって誤魔化すしか道がないんだからしょうがないじゃない、忘れたのは本当だし。

何より一度マンションを出てからもう一度戻るのが面倒だったんだから！

それに、一度ぐらい傘を忘れてびしょ濡れになった所で痛くも痒くもなかった。

だって私は。

「君は確か雨女だと聞いているんだが、それなのに傘を忘れるのか

「？」

「雨女だからこそ今更面倒くさくて忘れがちなんです」

五月雨の季節なんて関係ない。

降水確率ゼロパーセントでも若干怪しいぐらい雨が降るのに、常にかさばる傘なんて持っていられない。折りたたみ傘を忘れたのは痛手だけど、でもそれは家で乾かしてるから何とも言えなかった。

きつちりと着込まれた濃いグレーのスーツが微かに動く。肩を落としてみたいだ。

「まさかとは思ったが、予想通りとは」

「……予想通り？」

意味が分からず首を傾げると「何でもない」とにべもなく返される。

だけど馬鹿にされた事は何となく分かったから何だか腹が立ってきて、私は一歩足を引いた。

そのままぺこりと頭を下げる。

「とにかく忘れちゃったものはしょうがないのでこのまま帰ります。お疲れ様でした」

そうしてお先に失礼しますと声を掛けると、再び堅苦しい声が耳朶を打つ。

「ちよつと待て」

え？ な、何？

有無を言わさぬ声にびくりと身を竦め振り返る。

すると眉間に皺を寄せた部長が私の顔を覗き込んできた。

今まで大して気にも留めなかったけど、頭一つ分以上の身長さがあつたんだ……。

って、そうじゃなくて。

「部長？」

「今ある案件を余裕を持って終わらせるためには、今雨森に倒れられるわけにはいかない」

「はあ……」

というか雨に濡れたぐらいじゃ風邪なんてひかないんだけど。そう反論したくても出来ないだけの迫力があって、私は生返事を返す。確かに今ある案件は至急のものだし余裕を持たせる必要があるのも事実だけど、でもそれは私が絶対に必要な事じゃないはずだ。こんな言い方は卑怯だと思うけど私は派遣社員だし、それだけの役割は求められていないはずだから。勿論与えられた仕事は全力でやるでも、目の前の案件をどうこうでできるだけの力なんてない。部長だってそれは知っているはずなのに。

自動ドアにぶつかる雨音が激しくなる。

ああ、早く帰らないと状況が更に悪化しそう、とか考えてると雨音に紛れるように部長が声を上げた。鉄面皮が向けられる。

「地下に社員用の駐車場がある」

「え？ ああ、はい。ありますね」

この豪奢なオフィスビルには地下が存在していて、社員用の駐車場になっていると聞いたことがある。

私は免許はあっても車がないから利用する事なんてないんだけど、いやそもそも派遣元との契約で車に乗れないんだけど。

……でも、それが一体何なんだろう。

部長の言いたいことが分からなくて黙っていると、説明が足りなかったと気付いたのか更に言葉が続く。

「私の車もそこに停まっている」

「はあ、そうなんですか」

これにも気のない返事を返す。部長に車があるうとなかろうと別にさしたる問題でもないし。

すると私の理解力の無さに失望したのか、部長は顔を曇らせながら焦れた声を出す。

「……乗って帰るかと言ってるんだ」

「あ」

成程。

内心で手をぼんと打ち、納得してからすぐさま気付く　　今なん

て言ったこの人？

「乗せて頂けるんですか？」

「そうだと云っているだろう」

乗せて帰ってもらえる。部長に。

……………。

嘘お！？

この鬼みたいに厳しくて血も涙もなさそうな冷徹仮面　だと思
い込んでいる　に！？

一週間前まで毎日のように深夜残業させてくれた鬼畜が言ったの
！？　今！

「どうするんだ」

そんな心の声を聞かれたわけじゃないだろうけど、どことなく憮
然とした声が響く。

僅かに早口に感じられる声に苛立ちを察知して私は本能的に背筋
を伸ばした。

「どこまでも付いて行きますー！」

……………どこまでもってというのは問題だろう、私よ。

自分で言った言葉にがくりと膝をつきそんな程呆れていると、部
長もやはり呆れた様子で目を丸くしていた。

だがやがて驚きから立ち直った様子で踵を返した。

「行くぞ」

エレベーターに行くつもりなんだろう。

スポーツでもしていたのかやや広い背中に追いつくため数歩小走
りになるとすぐに追いついた。

半歩分後ろに下がって歩き、ふと違和感を感じた。

……………何だか、いつも一緒に歩いている時より楽な気がする。

いつもならもう少し苦労して歩くはずなんだけど、今はそうでも
ない。

もしかして歩調を落としてくれてるんだろうかか思ったけど、
結局はまさかねという言葉で片付けた。

流石にそこまで自惚れたら半殺しにされそうだ。

でも、もう一つ気になる事がある。

「七条部長」

いつもより丁寧な呼び名で声を掛けると、足を止めることなく部長が振り返る。

何だ、と言いたいんだろう、これは。そう察知して私は遠慮無く話を続けた。

「何で出口まで行ってたんですか？ 階段だって出口方面にはないですよ」

エレベーターは一階の最奥にある。そして階段はその横にある。だから地下二階の駐車場に行くには何も出口に行く必要なんてないのだ。

むしろ出口に向かったら駐車場へは行けない。

それが不思議になりエレベーターを指さしながら尋ねると部長は一瞬押し黙ってから、おもむろに手を伸ばした。

「うわっ」

そのまま手を引かれ部長の方に倒れこみそうになると、すぐ横をずぶ濡れの社員が通りすぎるのが見えた。

……半径五十センチに水滴を振りまきそうな勢いの濡れ具合だわ。よくもまああんなに濡れたものだと思ってから、今更のように掴まれた手の感触に驚いた。

温度の低い、ひんやりとした手の平は当たり前前かもしれないけど大きい。

顔同様皮膚の感触も年齢を感じさせなかった。そのせいか緊張が一気に高まる。

「あ、あの」

目を白黒させて声を掛けると、部長はようやく手を離してくれた。慌てているでもない自然な動作で遠のいた手を一瞥してからエレベーターの前に立つと、やはり冷静な声が耳朵を打つ。

「せっかく濡れずに帰れるのにむざむざ濡れる必要もないだろう」

ということ、あれですか。

今のは私をあの半径五十センチ以内に水滴を振りまきそんな社員から守ってくれたってことでいいと？

でもそれを訊いてしまうのはあまりに無粋な気がしたから、私は勝手にそういう事だと決めつけて頭を下げた。

「ありがとうございます」

帰ってきたのはエレベーターが一階に到着した「チン」という音だけだった。それだけだった。

でも例え無言で通されても、今は苦手意識は出てこない。

数十秒だけ重なりあった手。その手の感触が食わず嫌いの如く苦手だったこの人への意識を少しだけ変えてくれたから。

エレベーターに乗り、地下へと向かう。

そうして乗り込んだ光堂こと車内で小雨のようにぽつぽつと時折交わされる会話も、今は何となく楽しく思えた。

EX・雨女と光堂（後書き）

サイトからかなり遅れての重複掲載です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0156x/>

車内恋愛

2011年12月23日00時45分発行